ロード・エルメロイⅡ世の冒険
The adventures of Lord El-Melloi Ⅱ
2
「彷徨海の魔人（上）」
三田 誠
イラスト 坂本みねぢ

ロード・エルメロイII世の冒険

2

「彷徨海の魔人（上）」

三田 誠

イラスト 坂本みねち

Characters
The adventures of Lord El-
エルゴ
ロード・エルメロイⅡ世
両儀幹也
両儀未那
夜劫朱音
白若瓏
夜劫雪信
アキラ

「いいね。そのまま掴んでろよ」
若瓏(ルォロン)が囁き、アキラをより強く抱き寄せると、ロケットのような勢いで、
三人は路地裏の上空へと吹き飛んだ。
———第二章より

ロード・エルメロイⅡ世の冒険

The adventures of Lord El-Melloi II

2

「彷徨海の魔人（上）」

The adventures of
Lord El-Melloi II

ロード・エルメロイII世の冒険
The adventures of Lord El-Melloi II

2

「彷徨海の魔人（上）」

目次
Contents

ロード・エルメロイII世の冒険

2「彷徨海の魔人(上)」

角川文庫

本電子書籍を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本電子書籍は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次　Contents

✦序章✦

序章

──遠く、太鼓の音がした。

威勢よく、どん、どん、どどんと連続で打ち鳴らされる。

自分にとっては初めての響き。初めての風景。なのに、ふっと懐かしい気持ちにとらわれたのは、夕映えに染まった山の向こう側へ飛んでいく鳥たちを見て、ウェールズの田舎のことを思い出したからだった。

神社である。

周辺を守るように鬱蒼と茂った樹木たちを、この国では鎮守の森と呼ぶのだったか。

境内にはいくつもの屋台が立ち並び、古めかしい裸の電球を吊り下げていた。やっぱり夜店ではこの照明を使うのだと、なんだか嬉しくなってしまった。それこそ師匠のアパートの近隣でも、フリーマーケットやらの屋台で時々見かける、ぼんやりとしつつも温かな明かりだったのだ。

屋台の種類も、びっくりするほど多い。

たとえば金魚すくい、たとえば射的、たとえば宝くじ、たとえばお好み焼きと、目にするのは初めての露店が立ち並び、たくさんの人々が笑いさざめいて、通り過ぎていく。こんな山の上まで、こんなに屋台がやってくることも、こんなに客が訪れることも不思議で、自分は何度も瞬きをしてしまった。自分が知っている信仰の形とは少し違うけれど、それだけこの国は信心深いのだろう。

これだけの笑顔で、これだけの賑やかさで、この国は神を迎えるのだと思えて、なんだか切なくなってしまった。

軒先や鳥居には、藁でつくられた縄が飾られ、ひらひらした紙が

垂らされている。

（……まるで）

　まるで向こう側だ、とふと思った。

　自分たちが呼吸する空気も踏みしめる石も、間違いなく現世のものなのに、ふわふわと落ち着かない。こんなに美しくて、華やかで、だからこそ切なく、どこか怖いような気持ちにかられてしまう。

（……吸い込まれて、しまいそう）

「ひとつどうだい、そこのフードのお嬢ちゃん」

　不意に、呼びかけられた。

　びくっと肩を震わせて振り返ると、立ち並んだ屋台のひとつの、鉢巻をした男だった。

「あれ、外国人さん？」

「は、はい。あの、ごめんなさい」

「いやいや、何も悪くないだろ！　というか日本語上手いんだな、お嬢ちゃん」

「……そういうわけでは、ないんですけれど」

　実際、自分にはまるで日本語は扱えない。

　シンガポールで見た中国語もそうだったが、自分には複雑怪奇な記号が連なっているようにしか思われない。看板については英語を付記してあることが多く、あまり不安に苛まれることもなかったのだけど。

　ただ、今回の場合は別の仕掛けがある。イカサマで感心されてしまったようで、少しばかり心苦しいが、おかげで意思疎通できるのも確かだ。

　視線を彷徨わせていると、興味深いものを見つけた。

「この……白いのは食べ物なんですか？」

自分の質問に、汚れた鉢巻をした男が顔を上げた。

「ああ、知らないのか」

　年季の入った手袋で、皺だらけの顔を撫でて、男が笑う。

　その横合いに、まるで白い雲をちぎったような品が陳列してあった。

（キャンディーフロス……？）

　イギリスの綿菓子に似ているが、自分の知っているそれより、軽やかで儚げだった。その後ろに置いてある、師匠が時々遊んでいるゲームのような袋もあいまって、つい見入ってしまったのである。

「もちろん食べ物だ。綿飴ってんだよ」

「飴ってことは、やっぱり甘いんですか」

「ああ、舌の上でふわっと……ええと、天使の羽みたいに溶けるぞ」

　不思議な比喩を出されて、面食らってしまった。

　こちらの顔を見て、天使なら伝わると思ったのかもしれない。フードはいつものものだが、ほかの衣服との組み合わせの奇妙さに触れないのも、外国人ならと思ってくれたのかもしれない。

　また、太鼓の音。

　勇ましく轟き渡るたび、境内が異界へと変わるように思えた。実際、音はひとつの結界なのだろう。藁でつくられた縄も、そこから垂らされた紙も、自分には分からない理屈で、この祭りを支えているのだろう。

　きっと、この不思議な白い菓子も。

「三つ、いえ、四ついただけますか」

「はいな。四つで二百円だ」

　びっくりするぐらいの安さだが、それも祭りの醍醐味かもしれない。

硬貨を受け取った男が、手元の金属の窯の中へ、無造作に棒を突っ込んだ。ぐるぐる回すと白い糸状の物体が絡まって、まるで魔法のようにどんどん大きくなっていく。

　あっという間に陳列されていた菓子と同じ形になったそれを持ち上げ、

「袋はいるかい？」

　と、男が尋ねた。

「あ、ひとつだけ袋なしで。そのまま食べていいんですよね」

「おお。そいつが一番通な食べ方だ」

　にやっと笑った男が、ふと気づいたように尋ねてきた。

「お嬢ちゃんは、観光かなにか？」

「一昨日、日本についたばかりです」

「ここの祭りは、三日間やっててさ」

　と、男が言う。

　目を細めたのは、過日の神社を思い返しているようにも見えた。

「最後はね、そりゃあ都内の大会とは比べ物にならないけど、なかなか立派な花火が上がるんだ。この辺に泊まってるなら、絶対見ていきなよ。損はさせないからさ」

「ありがとう、ございます」

　真摯に言っていることだけは伝わり、自分は頭を下げた。

　片手で剥き出しの綿飴を持って、境内を行く。わいわいがやがやとした喧騒の間に、いくつも紙の提灯が吊り下がっており、薄赤い光で周囲を照らしている。

　歩きながら、綿飴の端を口に含んだ。

「……甘い」

本当に、舌の上で、消えるように溶けてしまう。朝ぼらけ、もう思い出せなくなってしまった夢みたいだ。

　待ち合わせの目印にしていた石段の近くで、

「ぱ、い、な、つ、ぷ、る」

　と、声がした。

　ついで、着地する足音。

　勇ましく両手を上げた少女が、自慢げに振り返る。

「はい、またお兄ちゃんの負け！」

「よわーい！」

　少女ともうひとりの少年がきゃっきゃと話しているのは、見覚えのある相手だった。

「いや、その……」

　相変わらず、子どもたちに好かれていたらしい。

　石段の半ばあたりで、赤毛の若者が困ったような笑顔をして、頬を掻いている。

　大型の犬みたいだ、と思った。もうひとり、自分が時計塔で知っている犬っぽい青年は、野生の狼を思わせる鋭さを潜ませているのだが、彼の場合は大型の室内犬みたいな人懐っこさが根底にある。だから、あの海賊島でもこの神社でも、子どもたちを惹きつけてやまないのだろう。

「エルゴさん」

　呼びかけると、若者が子どもたちに頭を下げた。

「ごめん。待ち合わせの相手が来たから」

「ええー！」

「さよなら！」

身軽に石段を跳んで、一気にこちらのすぐそばに降り立つ。

　背丈を優に二倍近く上回る高さだったというのに、軽く膝を沈ませただけで、羽毛のように衝撃を吸収した。子どもたちもわっと目を見張り、再び群がってくるより早く、自分とエルゴは坂の向こうへ退散する。

「子どもたちが言っていたのは、なんの名前です？」

「あ、そっちは礼装で分かりませんでしたか？　パイナップルです」

「……確かに、そんな発音でした」

　さっきの綿飴と違って理解できなかったのは、あの子どもの言葉が果実のパイナップルを意図していなかったためだろう。今回のイカサマの弱点とも言える。

　坂を上ると、いくつか道が分かれていた。

　それぞれの道に、赤い鳥居が設けられている。

　華やかだった祭りの中心から外れ、まだ太鼓や笛の音はうっすら聞こえるものの、なんともいえない厳粛さがあたりを包んでいた。

「この神社は、何柱かの神を合祀しているそうですね。京都の八坂神社なんかと同じで、この道のひとつずつに神が御お座わすのだとか」

「師匠に教わったんですか」

「いいえ。さっき子どもたちに聞いたのと、看板にあった由来書を読ませてもらっただけです」

　自分より出来のいい生徒なのではないか、と思うと、少しだけ嫉妬の炎が胸を焼いた。もちろん、自分がマシな生徒のはずもないので、ほんの少しだけなのだけど。

　あるいは。

　先輩ぶりたいだけかもしれない、とも思った。

エルメロイ教室の最新の生徒に、今や現役最古参になりかけている自分から、何かしらそれらしいことを言ってみたいなんて、馬鹿馬鹿しいぐらいの子どもっぽい動機。さっき彼を呼び止めようとした子どもたちも、同じ気持ちだったろうか。彼を取り巻く軽やかな空気は、普段鬱々としがちな自分にさえ、影響を与えているらしかった。

　隣を見て、不意に気づいた。

「エルゴさん、背が高くなりましたか？　髪も伸びたような」

「まだ、グレイさんと会って一週間ほどですよ」

　快活に、若者が笑う。

　その通りだ。

　だけど、そんな短い期間で、彼は見違えるほど変わった気がする。持ち物どころか、ほとんどの記憶さえ失っていた若者は、生き急ぐように新たな自己を確立しつつある。

　風に揺れる短い赤毛。色素も自我も薄かった灰色の瞳は、視界に入るすべてにキラキラと歓喜しているようだ。ひょっとすると、人は心を弾ませた数だけ、大人になっていくのだろうか。

　自分も少しぐらい目を凝らすべきだろうかと思ったところで、風に吹かれてきた祭りの屋台の包装紙が、顔にぶつかる直前で不自然に持ち上がった。

　エルゴの背中から生えている透明な手──幻手によるものだ。

「ぼうっとして、どうかしました？」

「いえ、ちょっと」

　気恥ずかしくて、誤魔化そうとしたときだった。

　道の向こうから、黒くて長い影が差した。

　分かれ道に立つのは、魔性か神に属するものだ、という伝承を思い出した。

あれは確か、ヘカテの信仰だったろうか。ギリシャにおける魔女の源流である。ただ、夜の使者のように黒く流れる長髪の持ち主は、今回は女性ではなかったけれど。

「師匠」

　今日の師匠は、眉間に皺を寄せていた。

　ただ、不機嫌そうというよりも、困惑の成分が多い。それが服装によるものであることはすぐに分かった。なにしろ、自分と同じ理由である。

「なかなかしっくりとは来ないな」

　和服の袖に触れて、師匠が片目をつむる。

　居心地の悪そうな表情に、つい、くすりと笑ってしまった。

「お似合いです」

「冗談だろう。この十数年、シャツとジャケット以外は数えるほどしか着たことがないぞ」

「本当に、お似合いですよ」

　と、念をおす。

　それで冗談なんて言わないこちらの性質を思い出したのか、師匠はふむと呟いて、襟元を合わせた。

「法政科の化あだし野のが着てるぐらいしか、この国の民族衣装は見たことがなかったからな」

「同じようだけど、ずいぶん違いますね」

「絣かすりの着流し、ということです。僕のも同じですね」

　こちらはエルゴが言った。

「ふむ。絣とは、この服を織る模様付けの技法だったかな。マレーシアの方にも似た技術があったと思うが、やはり大陸からの流入か」

旅先の事物が楽しいのか、また師匠が考え始める。

　師匠も若者も長身なためか、すっきりと見えるこの国の衣装はよく似合っていた。生地から浮き上がる模様は、角度によってちょっとずつ違って見えて幻想的だ。この場にライネスがいたなら、ひとしきりからかった後でどう評するだろうか。

　なんとなく落ち着かなくなって、自分の胸元を見下ろしたところで、

「……君も悪くない」

　ついでのように師匠に言われて、顔が熱くなってしまった。

　今日の自分は、着物の上から、薄手のフード付きのケープを重ねているのであった。

＊

「もっとも、悪くないということは」

　と、師匠が付け加える。

「この民族衣装を送ってきた相手は、私たちの体格も把握しているということだがね。洋服に比べれば、比較的着る者を選ばない、風土にあった合理的な衣装ではあるが」

「……あ」

　確かに、師匠にせよエルゴにせよ、この国の平均よりは背が高くなるだろう。

　だったら、送りつけてきた相手には、何らかの意図があったりするのだろうか。これがロンドンの時計塔だったら、プレゼントひとつにもさまざまなメッセージがあるものだ、と師匠やライネスが話していたのを思い出す。相手との距離感の調整はもちろん、微妙な格の違いや未来への志向も表現できる。場合によっては、同じプレゼントでも封蠟の印章だけでやれるぞとか言われて、妙に感心して

しまったものだ。

　表情を固くしたこちらに、師匠が唇の端を歪めた。

「まあ、送ってくれた相手が、そういうことを気にするかは分からないがね。日本の民族衣装はかなりの値段がすると聞くが……」

「そ、そうなんですか！」

「安心したまえ。生地からして、これは比較的カジュアルな品のはずだ。職人の手作りというわけでもないだろう」

　その発言で、ほっとする。

「イッヒヒヒ！　グこレいイつはオシャレとかずーっと縁遠いからな！」

　右肩の固フ定ッ具クから、笑い声がした。

　思い切り振り回してやりたいところだが、いつもより固定に苦労したので、外す気にもなれない……というか指摘自体は真実なので、返す言葉がない。

　代わりに、こう尋ねた。

「そういえば、拙の着物にも、名前があるんですか？」

「えっとそれは……」

　エルゴが口ごもったところで、

「古典柄の浴衣ゆかたね。夏祭りといえばこれよ」

　声は、師匠がやってきた道から届いた。

　接近には気づいていたのだが、視線を上げて驚いてしまった。

「凛さん」

「うわ、すっごい」

　マジマジとこちらを見つめ、遠坂凛が視線を上下に往復させる。

「先生、よくもこんな可愛い内弟子連れて、噂立ちませんでしたね。あ、いや、普段顔を隠させてるんだから、辻褄は合ってるわけですが。ひょっとしてあれ、時計塔らしく情報工作を兼ねていたんです？」

「誰かのおかげで、我が現ノ代ー魔リ術ッ科ジはショッキングな話題に事欠かなかったのでね。浮ついた話が定着する余裕なんてなかったさ」

「可愛いのは否定なさらない？」

　ニンマリと笑った凛に、師匠が眉をひそめる。自分の顔はますます熱くなる一方だ。日本の夏はシンガポールに負けず劣らずの猛暑なのに、その気温さえも忘れてしまいそう。

　無論、凛も、本人が言ったように和服姿なのだ。

　この国の衣装だけあって、彼女にはなおさら似合っていた。師匠と同じ黒髪と、着物の赤い生地がよく似合っている。……恥ずかしいことに、つい颯爽とした姿に見惚れてしまうぐらいだ。

　そこで、やっと思い出した。

「あの、これ、皆さんの分です」

　差し出した菓子に、師匠が目を細め、白い指でそっと受け取ってくれた。

「綿飴か」

「食べたこと、あるんですか」

「いいや。ただ、この国を訪れて、祭りの食べ物を口にすることがあるとは思わなかったものでね。……ああ、甘い」

　口に含んだ師匠が、自分と同じ感想を言ったのが、少し嬉しかった。

「美味しい！」

　ついで、エルゴが素直に笑った。

ちらと見やった師匠が、指摘する。

「君、口にソースもついてるが」

「さっき遊んだ子から、たこ焼きを分けてもらったんです」

　照れくさそうに言いつつ、エルゴが手の甲で口元を拭う。

　それでもまだ顎のあたりが汚れていて、懐から出した布で拭ってあげた。んー、と声があがり、整った顔の鼻のあたりに皺が寄った。

「どうかしましたか？」

　振り返ると、師匠が意外そうな表情をしていた。

「いや、考えてみれば、寝ぼけたときの私も、君に似たような世話をされてるなと思っただけだ」

「ゲーム機のコントローラーを握りしめてない分、師匠よりは手間がかかりませんよ」

　率直に返すと、師匠が誤魔化すように咳払いする。

　同じく綿飴を食べていた凛が、クスクスとおかしそうに笑って、可愛い花飾りを差した帯のあたりを押さえる。機微の分からないエルゴはきょろきょろと左右を見回し、師匠はますます渋い顔をするのだった。あのアッドさえ、自分の右肩でヒヒヒヒと笑い声をこぼしていた。

（……どうして、だろう）

　と、ふと思った。

　この組み合わせで過ごして、まだ一週間かそこらしか経ってない。

　まして、他人と打ち解ける速度で言えば、自分は間違いなく最悪の部類だろう。なのに、ひどく昔から一緒にいるような錯覚に襲われたのだ。

　考えてみれば、嵐のような時間ではあった。

　あのシンガポールで、海賊のコンサルタントを務めていた凛と出会ったことから始まり、神を喰らったというエルゴを中心として、さまざまな事件が勃発したのだ。今のエルゴをつくりあげたという三人の魔術師のうち、アトラス院の錬金術師ラティオ、仙人だとかいうムシキとまで、自分たちは戦う羽目となった。

　いずれも、時計塔で神秘に慣れた自分にとってすら、荒唐無稽としか言いようのない出来事だ。

　ひとつ間違えれば、日本に着く前に命を失っていただろう。

　今だって、その状況は変わっていないのだ。

（……なのに）

　どこか、自分はこの旅を楽しんでしまっている。

　こんな異国の山中で、たくさんの謎を抱えたままで、ひょっとしたら新たな敵に命を狙われるかもしれない状況なのに……つい安心して、唇をほころばせてしまうぐらいに。まるで胸の中のアルバムに、一生褪せることのない、大事な人々との写真を収めているかのように。

「もうじき、約束してた時間になるが」

　みんなが綿飴を食べ終わった頃、鳥が飛び立った。

　夕暮を過ぎて、闇が訪れるより早く、巣に帰ろうとした羽ばたき

であったろうか。

　少し遅れて、足音が聞こえた。

　足音ひとつにも、意外と性格が出るものだ。たとえば横柄な足音、たとえば優雅な足音、たとえば神経質な足音。『強化』された自分の聴覚は、自然とそうしたニュアンスを聞き分けてしまう。

（……普通？）

　いままでなかった印象を、持ってしまった。

　あまりに曖昧で大雑把な感想に、浮かべた自分がびっくりしてしまう。でも、このとき感じたのは、本当にそうだったのだ。

　遠く、また太鼓の音。

　夕映えの坂をひょこひょこと歩いてきた人影が、頭を下げた。

「初めまして」

　ひどく平凡な男性だった。

　この国の人々の年齢は分かりにくいが、おそらく二十代後半といったところか。

　上も下も黒一色の洋服で、やはり黒ぶちの眼鏡をかけている。あえていえば、左側の髪を伸ばして目元を覆っているあたりは、独特なセンスかもしれないが、きっと祭りの客に埋もれてしまえば、あっという間に見つからなくなるだろう。

　しなやかな体躯も、優しそうな面立ちも十分に好ましいものだが、総合すれば凡庸という形容に落ち着いてしまう。

　その不思議な矛盾に瞬きしていると、

「蒼崎橙子さんから紹介された、両儀幹也といいます」

　と、黒ずくめの男性は自己紹介したのだ。

　──そして。

それは、自分たちにとって、忘れがたい運命の始まりであった。

第一章

1

　柔らかな陽光が、広い公園に差し込みつつあった。

　午前五時半。

　とろりとした空気は、まだ寝ぼけているようだ。

　草むらでは、カタバミやエノコログサが伸び放題になっている。

　青々とした葉や穂先から、ほろりと朝露が滴っていた。もっと暑い時間になれば、草いきれで苦しいぐらいになるだろう。

　そんな中、ぽっかりと三角形のカタチが浮かび上がる。

　テントであった。

　いくつもの汚れたテントが肩を寄せ合うように群れ集い、夏の公園の中で、ある種治外法権的な雰囲気を形成していたのだ。

　いわゆる、ホームレスのテント群だった。

　とりわけ目立つ、隅っこのオレンジの布地が、もぞもぞと動いた。

「……るお？」

　子どもが、テントから顔を出したのだ。

　七歳かそこらだろうか。

　ぼさぼさの髪が、肩まで伸びている。

　眠そうに瞼のあたりを擦り、すぐ周囲を探り出した。四つん這いのまま、何度も顔を振って、いるはずの相手を見つけようとする。

　オレンジのテントを這い出し、もう一度呼びかける。

「るお？」

　声に、かすかな焦りが混じった。

　どうしようもない未来予測を、その名前で断ち切ろうとするかのような。

「どうしたの、アキラくん」

　後ろから髭だらけの中年ホームレスが呼びかけたが、それにも気づく様子はなかった。

　最初は小走り、すぐに公園を駆け出す。

　スニーカーはボロボロで、今にも分解してしまいそう。

　懸命に視線が動いて、走りながらも、ひとつでも変化を見逃すまいとする。

　その足が、止まった。

　やっと安心したように、子どもは息をついた。

　公園の噴水で、ひとりの青年が体を洗っていたのだ。

　背が高い。

　鮮やかなほどの、褐色の肌であった。

　日焼けというわけではなさそうだ。生来の色である。

　噴水の内側へ大胆に入り込んでしまったまま、その青年は、自分の肩やら脇腹やらを擦っていた。しなやかで逞しい肉体だった。野生の獣やギリシャ彫刻にも似た筋肉が、目の前で気持ちよく連動して、躍動している。

　子どもは、そんな青年の背中をずっと見つめている。

　いくら見つめていても飽きることなどありえない、そんな風にも見えた。

「おはよう、アキラ」

と、青年が後ろを向いたまま呼びかけた。

　バシャバシャと顔を洗ってから、気持ちよさそうに空を仰ぐ。

　そんな青年に、アキラが唇を尖らせた。

「るお、僕が寝てる間にこっそり出て行かないで」

「よく寝てたんだもんさ」

　悪びれもせず、るおと呼ばれた青年は言う。

　優しい声音だった。

　ひょい、と後ろ向きに何かを放り投げた。

　アキラが受け止めたのは、歯ブラシだった。

「きちんと歯を磨けよ」

　と、青年が言う。

「あと、髪の毛も毎日梳かせって言ってんだろ。もったいないだろが」

　一瞬、子どもが硬直した。

　それから、恐る恐る、といったように訊く。

「僕が、女の子だから？」

　るおが振り返った。

　彫りの深い、はっとするぐらい整った顔立ちであった。

　アジア系に映るが、肌の色からすれば、中東の血も混じっているのだろうか。

　おそらく、年齢は二十に満つるまい。横おう溢いつするような若々しさのほかに、誰もが口を揃えるだろう特徴があった。

　キラキラと、目が輝いていた。

星のかけらのような、青い色の交じった黒瞳である。

　視界に入るすべてが嬉しくて、耳に聞こえるすべてが楽しくてたまらない、というよううだった。

　噴水から歩み出て、がしっ、と子どもの頭を摑む。

「関係あるか、んなもん。せっかく綺麗なんだから、綺麗なままでいた方が、オレが嬉しいだろうが」

　腰を折り曲げ、目線を合わせて、青年が言う。

　すると、

「分かった。なら、梳かす」

　たすき掛けにしていた鞄からブラシを出して、素直に少女が髪を梳かし始めた。

　対して、るおは身体を十分拭いてから、近くにかけていたダメージジジーンズを穿いた。次にＴシャツを着て、少女の隣に腰掛けた。

　どちらも、それ以上話すことはしなかった。

　心地よい風の吹く中、青年は明るくなってきた空を見上げている。

　鼻歌が流れた。やはりこの国とは違う拍子の歌であった。遥か彼方の、砂の国を思うかのような旋律。少女が髪を梳かすブラシのリズムに合わせて、アドリブで歌っているのかもしれなかった。

　蟬の声が、聞こえ始めた。

　騒がしく、力強く、ミーンミーンと公園を埋め尽くすような鳴き声。それだけで暑苦しくて、ぱたぱたと手で扇ぎたくなってしまう。

　不意に、しゃがれた声がした。

「るおくん、アキラくん」

「佐野さん」

青年が向くと、ひょろっとした四十代ほどの男が立っていた。

「ははは、朝早いね」

　話すと、ひゅうひゅうと空気が漏れるような音がした。

　チリチリの髭の下で、前歯が三本ほど抜けているのだ。夏だというのに垢じみたジャンパーを着ており、かなり汗臭い。頭には原形の分からなくなったワークキャップをかぶり、つるの歪んだ眼鏡をかけていた。

　ひび割れた唇をひきつらせるように笑って、佐野は包装された品を掲げた。

「今日はごちそうだぞ。廃棄されたハンバーガーをこっそりもらってきたんだ」

「そりゃすげえ！」

　るおも破顔する。

　つられて、アキラもわっとジャンプした。

　すぐ、近くの広っぱで食事をすることになった。イチョウの樹のそばで、佐野が適当に石ころなどをどけて、地面に直接座り込む。

「そこのベンチに座ってもいいんじゃねえの？」

「いいんだよう、隅っこがいいんだ」

　言い訳するように、佐野がぼそぼそと話す。

「ボクらはさ、世の中に遠慮して生きていかなきゃならないんだからさ」

「そんなことないだろ」

　るおが返すと、弱々しく佐野は笑った。

「うん。本当は違うんだろうね。でも、ボクが耐えられないんだ。そう思われてるだろうなーって考えただけで、胃がキュッてなって、目の前が暗くなっちゃうんだよね。ははは、昔は目の前が暗くなるって比喩だと思ってたんだけど、あれ、本当になるんだよね」

佐野が頭を掻くと、フケが落ちた。

油じみた色になっている指を見ながら、話す。

「もう、一週間になるかな。ふたりがやってきて」

「六日だね」

ハンバーガーにかぶりついて、るおが言った。

「佐野さんが、近くでご飯拾える場所とか教えてくれて助かったよ」

「ボクらの生命線だからね。炊き出しもあるけれど、それだけじゃあきつい。うまいこと回ると、こういう役得もつくれるしね」

くたくたになった鞄から、使い古しのビール瓶を出してきて、佐野がにかっと笑った。

「佐野ブレンド、だっけ」

「んふふ」

鼻にかかった感じに、佐野が息を漏らす。

数滴ずつ、瓶や缶の底に残った酒をかき集めたものであった。もちろん、そんなやり方でブレンドも何もないのだが、佐野は自分なりのこだわりがあるのだと、しょっちゅう自慢していた。

コップなどなく、直に唇をつけ、ちろりとだけ舐める。

「でもさ。こんな生活は長く続けるもんじゃないよ。ボクが言うのもおかしいけどね」

佐野が、深刻ぶった感じで言った。

ぶったというのは、前歯の抜けた顔が、どうにもシリアスにならないからだ。

「若いんだからさ。どうにでもなるだろ。役所に行けば、それなりのところを紹介してくれるさ。ボクみたいなのはどうにもならないけどね」

「ならないのか」

「何度も逃げてきたからねえ」

　困ったように、佐野が片手の瓶を見下ろした。

「佐野、眉間が」

　アキラの指摘に、おっと言って、自分の眉間を何度か撫でる。額がますます黒ずんだのだけれど、気にしないようだった。

「話し方からすると、インテリって感じだよね、佐野さん」

　と、るおが言う。

「はは。院は出たんだけどね……といっても、分からないか。ただ、どうにもちゃんと我慢するってのが、ボクにはできなかったようなんだ。社会というやつに出たら、それが一番大事らしいのにね」

　しみじみと、佐野が口にする。

　それから、こう付け加えた。

「アキラくんが、性別分かりにくくしてるのも、誰かから逃げてるからかな？」

　るおの表情は変わらず、しかしアキラの視線が一瞬揺れた。

「そういうのさ、ボク、意外と敏感なんだよ。ああでも、敏感だから、こんな風になっちゃったのかなあ。鈍感な方が良かったのかなあ。良かったんだろうなあ」

「まあ、ここでの生活は、そんな長くはならないと思います」

　のんびりしたるおの言葉に、佐野が何度かうなずいた。

「ああ、それがいい。それがいいよ。君らは面倒くさがらずに身体も服も洗ってるんだもの。十分やりなおせるさ」

　アキラが、むうと眉を寄せた。

「面倒くさいんだけど」

「だからさ。本当に面倒くさくなってしまう前に、出てしまうのがいいんだ」

　佐野が、そこで言葉を区切った。

　少し、間をおいて、

「そういえば」

　不意に気がついたように、こう続けたのだ。

「そこの神社で、今夜から祭りがあるらしいんだよ。うん、お別れになる前には、いいかもしれないなあ」

　あんまりなわざとらしさに、るおの片眉が大きく持ち上がった。

「ええっと、ひょっとして、本題はこれ？」

「だからさ、一緒に行かないか」

　と、佐野が持ちかけたのだ。

　いかにも恥ずかしそうに、しかしそれを無理に撥ね飛ばす調子で、こんな風に言った。

「ボクもちゃんと服を洗っていくし、一度ぐらい、雰囲気を楽しんだってバチはあたらないだろ？」

＊

　佐野が立ち去ってから、ふたりはしばらく原っぱでぼうっとしていた。

　相変わらず、蟬がうるさく鳴いている。

　通学や通勤の時間らしく、公園の外の道路を多くの老若男女が歩いていた。あるいはランドセルを背負って、あるいは革鞄を手にして、時に寡黙に、時に楽しげに語らいながら、往来している。

「この国の人たちは、いつも忙しそうだねえ」

　と、るおが感想を呟く。

　原っぱにあぐらをかいたまま、太ももに頬杖をついている。

（……長い腕だな）

　と、アキラは思った。

　るおは、腕も脚も細くて長い。それでいて華奢という印象はなかった。盛り上がった背筋が、薄手のＴシャツから透けて見える。引き締まった体格は、そこらの力仕事なら何人分もやってのけそうだ。

　褐色の肌もあいまって、青年はどこか別の世界の存在のようだった。

　舞台の上だとか、銀幕の中だとかにしか存在し得ない、形而上のなにか。

　ぬっ、とその首がこちらへ回った。

「わっ」

「お、すまん。驚かせたか」

「だ、大丈夫。ちょっと間が悪かっただけ」

　ドキドキする心臓を押さえながら、アキラが言う。

　るおは、少しだけ目を細めた。先ほどより、ゆっくりとした言葉で切り出す。

「祭り、いいのかい？」

「うん」

　と、アキラがうなずいた。

「行ってみる。もともとお祭りは好きだし」

「そっか」

「僕の神社じゃないから、大丈夫だよ」

　念を押すように言ってから、アキラは呆れた顔になった。

「それに、るおの方が行きたいんでしょ」

「バレた！」

　ぱちん、とるおが自分の頬を叩いた。

「いやあ、日本の祭りって初めてでさあ！」

　白い歯を煌めかせた青年に、アキラはため息をつき、

「大人ばっかり、お祭りを楽しみにしてるんだから」

　と、呟いたのであった。

＊

　わりと大きな祭りだった。

　集まった屋台は百近くになるだろう。人の数もそれなりで、密集して歩きにくいというほどではないが、十分以上に賑やかだ。

　境内の音楽も、陽気なものである。

　一応雅楽も流れているのだが、屋台のそれぞれが好きな曲を流しているせいで、ロックでもメタルでもアニソンでもクラシックでもなんでもありの、極めて出鱈目な空間となっている。

　真夏の熱気に加えて、最近の電灯が明るいこともあって、ある種のサマーライブのようにも見えた。

「わあ」

　と、アキラが声を上げる。

　隣にはるお。その後ろには、緊張した様子の佐野がいた。

「ごめんね。連れ出しちゃって」

　と、佐野が謝った。

「ひとりだと、やっぱり来られないんだ。こんな華やかなところ、ボクが来ちゃいけない気がしちゃって」

　もう四十を越えているだろう男が、まるで小学生みたいにはにかんだ。前歯の抜けたところも、ちょうど永久歯に生え変わろうとしているかのように映った。

　それから、数十分ほど、三人は祭りを堪能した。

　何かを買ったりすることはなかった。

　しかし、その盛況と騒がしさを味わうだけで十分だった。時折、三人を見咎めるような視線もなくはなかったが、幸い祭りの陽気さもあって、すぐに興味を失ってくれた。

　やがて、人気の少ない森の近くで、休憩になった。

　弱々しく、佐野が近くの石に座り込む。

「なんだか、人がたくさんいるだけで疲れちゃったよ」

　吐息が、夜の空に向かって溢れる。

　祭りの明かりはこのあたりでも眩しいぐらいで、星もわずかしか見えないが、彼にとってそんな明るい寂しさがちょうど良いらしかった。

　同じく石に座って、足を伸ばしたまま、アキラが尋ねる。

「佐野は、好きな屋台があるの」

「射的は好きだったねえ。いくら当たっても転がってくれないんだ。……でも、いまじゃそんなお金もないなあ」

　そう聞いたアキラが、懐のあたりにそっと触れた。

「お金があったら、今やる？」

「だ、ダメだよ」

と、佐野はあわてて少女の手を押さえた。

「いいかい。財布なんてボクらみたいな相手の前で出したらダメ」

「冗談」

　くすくすと笑ったアキラに、佐野が渋面をつくる。

　そんなふたりを見やってから、

「あのさ」

　と、るおが持ちかけたのだ。

「ひょっとして、神社の入り口あたりにあったお好み焼き屋のおっちゃん、佐野さんのお父さんじゃない？」

　途端、佐野は硬直した。

　しばらくして、ぼそぼそと言った。

「……分かる、かい？」

「頬骨とか鼻の形とかがね。遺伝が出やすいところなんだけど、そっくりだ」

「合わせる顔がなくてさ」

　文字通りに、佐野が顔を覆った。

　ここに来るまでに入念に洗ったのだろうが、それでも手の皺には油汚れが染み付いていて、さきほどと逆に、実際の年よりもずっと老いて見えた。

「こんなになっちゃってるんだもの」

　と、シャツを触る。

　ちゃんと洗いはしたものの、シャツの袖は無様に擦り切れ、ボタンはちぐはぐにちぎれている。かすかに饐すえた臭いも、屋台から十分離れた今は隠しきれない。かつて佐野が持っていて、ここまでの過程で喪失してしまったものの大きさを、誰よりも彼自身がわきまえていた。

「……みんな楽しそうだなあ」

　境内から聞こえてくる、騒がしいミュージックに、佐野が耳を澄ませる。

「あの中に、僕はもういられないし、いちゃいけないんだよ」

「よし」

　と、るおが立ち上がった。

「ちょっと、お好み焼き買ってくるよ」

「え、るおくん?!　話聞いてた?!」

　引き止める間もなく、青年が足早に鳥居へと向かっていく。

　途中で混雑に巻き込まれて、すぐに逞しい背中が見えなくなり、佐野の持ち上げた右手が力なく落ちた。

　アキラと佐野の、ふたりだけが残されていた。

「どうしよう」

「佐野は、嫌なの？」

「いや、その、そういう覚悟はしてなかったから」

　がくりと肩が下がると、佐野はひとまわり縮んだかに見えた。

　自分の身を抱いて、ますます縮こまって、この世から消えてしまおうとするかのようだ。とても怖くて、ずっと目を背けていた事柄が、突然彼の前に戻ろうとしていた。

　恐々と、まるで石を吐くように、呟く。

「でも……もしも……」

　ゆっくりと、身体に巻き付けていた手を外し、視線を落とす。

　皺まで黒ずんだ手のひらを、穴があきそうなぐらいに見つめていた。

「もしも……もう一度、親父と話せたら……」

「おい、お前」

　不意に、呼び止められた。

　言葉よりも、響きに込められた敵意に、アキラが息を止めた。

「佐野だな」

　祭りの明かりを背にして、三人、並んでいる。

　明らかに、筋の良くない男たちだと分かった。いずれも肩幅が広く、分厚い唇に下卑た笑みを浮かべている。

　リーダーらしい真ん中の男が、佐野の胸ぐらを摑んだ。

「はは、親父の誕生日だってから、ひょっとしたらと思ったら案の定だ」

　ぐい、と自分の方へ引き寄せる。

「佐野！」

　アキラの叫びに、

「いいんだ」

　と、佐野が制止した。

「ダメなところに、借金、つくってた、から」

　泣き笑いみたいな顔が、歪んだ。

　頰に、拳がめりこんだのだ。

　嫌な音がした。

　殴られた佐野が、地面に倒れる。せっかく洗ったばかりのシャツが、無惨に土で汚れた。脳まで揺れたのか、佐野はすぐに起き上がれず、顔を押さえたままでもがいた。

「兄さん、顔はやめといた方が。最近の警察面倒くさいって、若頭

も」

「は、こいつが警察に駆け込めるかよ」

「あっ、そりゃそうか」

　リーダー格の男に、取り巻きがうなずきざま、自分も蹴りをかました。

　横倒しになっていた佐野の鳩尾に、つま先が深々と食い込んだ。えずいた佐野の口元から汚液がまきちらされ、器用に男どもが避ける。

「ああ、スッとする。両儀のヤツらのうざったさったら、クソだからな」

「おかげで、ワリ食いましたからねえ」

　一見和やかに話しながら、男たちは蹴り続ける。

　笑いながら、佐野をボールのように蹴る。

「やめて！」

　すがりつくように、ひとりの男のジョガーパンツを、アキラが引っ張ったのだ。

「ああ？」

　面倒くさそうに眉をひそめた男が足を振ると、少女は吹き飛ばされた。

　軽い身体が、一度地面で跳ねた。

「や、やめ……」

　言いかけた佐野も、また蹴られる。

　かばった腕も、肩も、脇腹も、胸も、太ももも、腰も、下腹部も、尻も、背中も、お構いなしに蹴られた。

　その蹴りが、途中で、不自然に止まった。

男のひとりが、首を傾げる。

「何だ、これ」

見下ろせば、ジョガーパンツのふくらはぎあたりに、奇妙なものが張り付いていた。

「……縄？」

実際、それは真っ黒な縄のようだった。

長細く、重さは感じさせない。

「ああん、古い注し連め縄なわでも落ちてたのか？」

もうひとりが言って、表情を変えた。

ぐる、ぐる、と、男の脚に、さきほどの縄が巻き付いていったのだ。ばかりか、その巻き付いた先から、凄まじい激痛に見舞われ、男は悶絶した。

「あがががががが！」

痙攣して、そのまま倒れ伏す。

倒れても、痛みは執拗に続いた。気絶することもできず、男の口の端から泡がこぼれた。じゅうう、とジョガーパンツが酸のようなものに溶かされていき、それには男の皮膚と肉がまじっていた。

当然、ひとりではすまなかった。

佐野を囲んでいた全員が、同様の奇禍に襲われたのだ。

「お、おい！　何だよこれ！　おかしいだろ！」

悲鳴混じりの声が、森に響く。

無論、おかしい。

縄だけではない。暴力沙汰は喧騒で掻き消えても、男たちの叫びは祭りまで十分届いているはずだ。たとえ、暴力を恐れたとしても、何人かは物見高く近づいてくるのが普通だろう。

まるで、この一帯が異界として切り取られてしまったかのような。

「嫌だ！　嫌だ嫌だ嫌だ！」

　逃げようとした男の足首を、縄が捕らえ、地面に引き倒した。

「やめろ！」

　リーダー格の絶叫が、津波のような縄に呑み込まれる。

　ぐる、ぐる、ぐる。

　ぐる、ぐる、ぐる。

　ぐる、ぐる、ぐる。

「あ……あ……！」

　佐野が、低く呻いた。

　縄が、佐野の方にもにじり寄ってきたのだ。

　佐野に暴力を振るった男たちは、あるいは身体を溶かされ、あるいは喉元までを縄に覆われて、もはや叫び声すらあげられぬ有様となっている。

　自分も、それに続くのか。

「く……来るな……」

　近くに落ちていた枯れ枝を、佐野が拾う。

　そんなものは役に立たぬと分かりながら、そうせずにいられなかった。立ち上がって逃げるにも、とっくに腰なんか抜けてしまっていた。

「来るな……！」

　ぶん、と強く枝を振るう。

　手からすっぽ抜けて、夜闇の向こうへと消えてしまった。

何事も起こらなかったように、黒い縄が佐野へと近づいてくる。獲物を見つけた蛇にも似て、その速度は決して緩むことがない。

　突然、止まった。

　温かなものを、佐野は感じた。

　ふわふわと、無数の何かが、自分を取り巻いて浮かんでいるように感じた。

「……羽？」

　と、佐野が呻いた。

　はたして、返答があったのだ。

「幻翼ファンイーって、呼んでるんだけどね」

　るおが立っていた。

　両手に、お好み焼きの入った紙箱を持っていた。箱の縁から少しだけソースがはみ出ている。三つ持っていた紙箱のひとつだけを石の上に置いてから、ぺろりと親指をるおが舐めた。

「祭りが終わった後、神社の裏で待っててくれってことだったんだけどさ。ははは、つい話し込んじゃって。こいつはサービスでくれたよ」

　喋っているるおの背中から、半透明の翼が生えているように、佐野は錯覚した。実際、いくら目を凝らしても、そんなものは見えはしない。だというのに、これは翼であると納得してしまっている。そして、この翼によって黒い縄は阻まれているのだとも分かってしまって、頭がどうにかなりそうだった。

　佐野は知らない。

　それが幻手と名付けられた、とある若者エルゴの能力に酷似していることなど。

　青年がしゃがみこみ、優しく話しかけた。

「すまんアキラ。待たせたよな」

「……るお」

　倒れていたアキラが、少しだけ顔を持ち上げる。

　少女の周囲にだけ、縄が蠢うごめいていないことに、佐野は気づいた。あるいは彼女を縄が守ろうとしていたかのように。

「……遅いよ、バカ」

「だから謝ってるだろ。お好み焼きは後で食べようぜ」

　そっと少女を抱き上げる。

　ぐにゃ、と佐野の視界が歪んだ。

　かろうじて保っていた意識が、限界を超えたのだ。

「ありがとう、佐野さん」

　と、頭を下げたるおの顔も、よく見えなかった。

　だけど、続く声だけは聞こえた。

「白若瓏バイ・ルォロン」

「るぉ……ろん……？」

　鸚鵡返しに言った佐野に、青年はうなずいた。

「オレの名前。受け取っておいてください。かえって災いを招くかもしれませんが、ひょっとしたらお守りになるかもしれない」

　優しい声だ、と思った。

　優しくて哀しい声だ、と思った。

　考えてみれば、それが印象的だったので、何くれとなく世話を焼くようになったのではなかったろうか。

「若瓏ルォロン……アキラくん……！」

　呼びかけは、声にならなかった。

それきりで、気絶してしまったのだ。

目覚めた病院で、彼は父親に再会することになる。

借金を返せるだけの紙幣を持たせられていたのも、襲ってきたヤクザの上役から二度と手は出さないとの書状が送られてきたのも、後で父親から聞くことだ。

残った人生で、二度と出会うことのない風変わりな青年と少女を、佐野は時折ひどく切実な気持ちとともに思い返すことになるのだった。

2

　──舞台は戻る。

　少女の写真を、自分は見下ろしていた。

　自分のような外国人から見ると、この国の人々はどうも年齢不詳に見えがちなのだが、子どもとなるといっそ妖精みたいな雰囲気がある。まだ性差がはっきりしない、中性的な印象もあるからなおさらだ。

「アキラ、という人なんですね」

　写真の頰のあたりを撫でて、自分は呟く。

　ホテルの、安っぽい壁に声が響いた。

　師匠が用意したホテルである。両儀幹也は自分たちが手配すると言ってくれたのだが、そちらは師匠が固辞して、自分たちの選んだ宿に泊まることとなったのだ。

「夜や劫こうアキラ」

　と、改めて凛が言う。

「夜劫、かあ。まだ本当にいたのね」

「君はこの国の魔術師だが、知らなかったのかね」

「実戦派の法術師は、冬木の近くにはいませんでしたから、没交渉だったんです」

　冬木というのは、凛の故郷だ。

　日本の空港についた際も、師匠と凛はその話をしていたが、東京からはずいぶん離れているらしい。昔世話になった老夫婦にぐらい

は顔を合わせたかったが、なんて師匠はそっと呟いていた。

（……聖杯戦争が起きた土地）

　自分には、その印象ばかりが強かった。

　師匠が参加した第四次聖杯戦争。

　凛が参加したという第五次聖杯戦争。

　七騎の英霊が己の願いを叶えるために戦いあったという魔術儀式は、いずれも冬木という土地が中心になっていた。自分の身体に起きている現象とも、まったく無関係というわけではあるまい。

　だけど、今は。

「エルゴはどうだ？」

「……分からないです」

　と、赤毛の若者はかぶりを振った。

　食い入るように、エルゴは写真を見つめていた。

「でも、なんだか、気になるんです」

　もちろん、自分たちが話している写真は、昨日のあの会合で受け取ったものだった。

＊

　祭りの夜の後。

　招かれるまま、自分たちは男性についていくことになった。

　師匠と、自分と、凛と、エルゴ。

　そして、両儀幹也と名乗った、あの男性である。

神社から出て、山の小道を歩いている。太鼓の音はずいぶんと遠くなり、その分鬱蒼と茂った木々から、緑の香りが強くなったように思えた。履いているのは慣れない草履なのだが、それでもふっくらと沈み込むような土の感触が愛おしかった。

　途中で、

「あの、先生」

　と、凛が耳打ちした。

「蒼崎橙子って、まさかあの？」

「まさかでなくても、あの蒼崎だ」

「うわあ」

　珍しく、悲鳴のような声が、凛の口から漏れた。

「なんです？」

　前を行くエルゴが振り返る。

　ひそめた声のやりとりだったが、若者の耳ならば何の問題もなく聞き取れたろう。

「ええと、うん……つまり、とびきり性タ質チの悪い魔術師なのよ。時計塔でもちょっと類例がないぐらい。噂で人をどうこう言うつもりはないけれど、話半分どころか十分の一でも正気を疑うレベルね」

　凛の感想を、まったく否定できなかった。

　自分と師匠は、何度か蒼崎橙子と邂逅したことがあるのだ。

「うわー。うわー、あの封印指定の……って、封印指定は解除されてたんでしたっけ」

「いいや合ってる。またやらかして、封印指定に再登録されたからな」

「人生で二度、封印指定に登録された魔術師って、時計塔でも初じゃないですか？」

封印指定。

　後にも先にも現れない、と時計塔によって判断された希少能力の魔術師は、時計塔の内側で永遠に保存される。これは魔術師にとって最高峰の栄誉だが、保存された魔術師は研究を続けられなくなるので、逃げ出す者も少なくないのだとか。

　二度もこの指定を受けた、かの女魔術師は、けして単純な敵や味方ではありえなかった。時計塔においてもほぼ頂点に位置する冠位人形師は、こちらの思惑など悠々と飛び越え、常に独自の価値観をもって、事件に介入していたのだ。

　だからこそ、その橙子の紹介だという両儀幹也を、どう受け止めればいいか、自分には分からなかったのである。

（……怪しくは、見えないけれど）

　先を行く幹也をもう一度見やった時、彼は口を開いた。

「橙子さんが、お前の抱えてる問題にちょうどいいはずだ、という手紙を送ってきたんですよ」

「問題？」

　瞬きした自分に少し遅れて、

「私たちも、蒼崎橙子から連絡をもらった」

　と、師匠が言う。

「以前から、私たちが直面している課題について意見を交わしていたんだが、二週間前にこれならヒントになるんじゃないかと、手紙をよこしてきたんだ」

　二週間前。シンガポールに着くより前だ。

　つまり、師匠はもともと日本に来るつもりだったことになる。そういえば、確かにそんなことを言っていたように思う。

　先を歩きながら、幹也が尋ねる。

「どんな課題なんです？」

「ある種の解呪、と言えばいいか」

　どきり、と心臓が鳴った。

　それは、自分の内側に宿った、英雄の因子を取り除くための術式であった。天職としか言えない講師を退いてでも、師匠が探求しようとしていた魔術。

　そして、

「今なら、もっと分かりやすく言えるか。……神を還す方法、と」

　エルゴが師匠を見やった。

　若者が喰らったという三柱の神。それを還すことができなければ、いずれエルゴは神という絶大な情報量に圧迫されて、人格と記憶を失ってしまうだろうと、師匠は断言していたのだった。

　奇しくも、自分とエルゴに必要なものは同じ神秘であった。

「神様」

　言って、なんだか懐かしそうに、幹也が夜空を見上げる。

　山の上だからか、星の光はひどく澄んでいた。

「あの事務所で、そんな話をよくしました。……ああ、本当に、橙子さんと同じ魔術師なんですね」

「幹也さんの家って、魔術の家系じゃないんですか？」

　つい気になって、尋ねてしまった。

　この流れで、魔術師でない家系という方がよほど珍しかったからだ。

「ええ。うちの親はそういうのとまったく縁がなかったですね。ただ、両儀は妻の家なので、ちょっと事情が違うんですが」

「……両儀の名前も、来る前に調べた」

　続けて、師匠が言う。

「魔術というより……そうだな。グレイにも分かるよう端的に言えば、ジャパニーズ・マフィアといったところか」

　言いつつ、ちらっと幹也の表情を窺う。

「遠慮しなくていいですよ。その通りですから」

（マフィア！）

　その響きに、自分は瞬きしてしまった。

　いや、実態として時計塔がどれだけ違うのかと言われれば困るし、シンガポールでも凛が組織した海賊と行動をともにしていたわけなのだが、こうして言葉にされると、やはりドキリとしてしまう。

「さっきの祭りは、両儀の仕切りなんです」

　柔らかな表情で、幹也が話す。

「だから、体験してもらった方が分かりやすいかと思って」

「……ふむ。日本の祭りはジャパニーズ・マフィアが仕切ることが多いんだったか」

「ずいぶん昔の話ですね。あそこは今もそうだってだけで」

「なるほど」

　と、師匠がうなずいた。

「この民族衣装も、スムーズに体験してもらおうという意図かね？」

「昔、橙子さんが何かを体験させるなら、発信する側だけじゃなくて、受け取る側の準備こそが肝要だ、なんて言っていたのを思い出して。もう半分は、送った服を着てもらえたら、確実に見分けがつきますから」

　確かに分かりやすい。大人しそうに見えて、やることが大胆というか直截だ。どこかしら師匠に似ている気もした。

　それで気になって、もぞもぞとフードに触れてしまった。

「拙は、おかしくないですか」

「もちろん。僕の家族も、和服にブルゾンを重ねたりします」

　と、幹也が柔らかく笑った。

　よほど家族を大事にしてるのだろう、とそれで思った。でなければ、こんな表情を浮かべられはすまい。

　緊張していたのに、つい力が抜けてしまうような笑顔。

　こんな相手に寄り添ってほしいと思う人は、きっと多いだろう。

「ところで、皆さん、日本語が使えるんですか？　目印に服を送ったのも、てっきり全員が日本語が堪能なわけじゃないだろう、と思ったからなんですが」

「ああ、私とグレイについては、ちょっとしたイカサマでね。本来の私は専門分野の読み書きはできるが、日常会話は無理だ。見せてやってくれるか、グレイ？」

「師匠が時計塔から借り受けた礼装で、翻訳をしているんです」

　フードの下に隠していた、ペンダントを取り出す。

　魔術礼装と呼ばれる類の品であった。中央の宝石の内側に、いかなる手段によってか、複雑な文様が刻まれている。こうした呪物によって、限定的ではあるが、魔術師ならずとも神秘の効力を発揮することができるのだ。

「厳密に言えば、着用者と会話相手の、コミュニケーション能力と言語機能の強化だ。会話相手への影響は大したものではないが、日本は英語の情報が豊富だし、義務教育でもかなりの年月学ばされるのだろう？　ちょっとした補助があれば、私たちからの聞き取りは難しくない。逆に私たちが日本語を聞き取る分には、礼装の効果を十全に受けられる。とはいえ、あくまでコミュニケーション能力の強化を中心としている以上、相手が目の前にいないと難しいのだがね」

「つまり、僕は日本語で聞いてるつもりですが、おふたりは英語を話してる？」

「理解が早いな。おおよそ、そういうことだ。一定以上外国語を習得した人が、無意識に外国語でしゃべったり、頭の中で考えたりしていたなんて言うことがあるだろう？　あれと同じようなものと思ってくれたまえ。……若い頃に、こんな礼装が借りられるだけのコネがあれば良かったんだがな」

　何やら思い出したのか、師匠が渋面をつくる。実際、君主ロードとしてこの手の礼装を借り受けたり、エルゴの出入国審査含む偽装工作を手早く済ませてくれたりして、この旅ではずいぶんと助かっているのだが。

　幹也はしばらく感心したように、何度もうなずいていた。

　それから、少しして視線をあげる。

「ここから階段で、その向こうです」

「わ」

　と、エルゴが口にした。

　風が出ている。

　竹の葉がサワサワと揺れていた。

　幾重にも重なった長い葉が、それぞれに擦れ合い、複雑な音を奏でている。耳に心地よい旋律で、つかのま夏の夜の暑ささえ忘れてしまいそうだった。

　長細い葉の間から、こぼれるような月が美しい。

　その月光の向こう側に、和風の瀟しょう洒しゃな屋敷がしんと鎮座していたのだ。

「ふうん、いい感じじゃない」

「両儀の建物は、なぜか竹林の近くに建てられることが多いみたいで」

　凛の感想に、幹也が言う。

　わずかに遅れて、軽い足音が聞こえた。

東屋の中から、幼い少女が現れたのである。

「おかえり、コクトー！」

おおよそ七歳かそこら。

白いワンピース姿に、長い黒髪が似つかわしい。

潑剌とした、生命の輝きを凝縮したような少女であった。

「その呼び方はよしなさい」

　やんわりと、幹也がたしなめる。

　が、聞いているのかいないのか、少女は自らこちらを振り向き、優美に一礼する。

「娘の両儀未ま那なです。どうぞよろしく」

「え」

　一瞬動揺したのは、幹也と少女の年齢が不釣り合いな気がしたからだ。無論、東洋の人々は、自分たちからすると若く見える傾向があるのだが、どう考えても幹也が師匠より年上とは思えない。

「コクトーって、ひょっとしてあなたの旧姓？」

「ああ、そうです。色の黒に、木材の桐。なぜか未那がそちらで呼びたがって」

「……ふうん、なんとなく分からないではないわね」

　凛が、片目をつむった。

「でも、フランスの詩人みたいな名前」

「……黒桐か。私はてっきり黒冬かと思ったがね」

　師匠の感想に、凛が尋ねる。

「黒い冬ですか」

「青春、朱夏、白秋、黒冬。玄冬とも言われるが、まあ人生の順番だよ。」

　中国由来で、人生のそれぞれの時代を切り取る言葉なのだという。

　青春は最も若々しい青葉の時期、朱夏はさまざまな力量が伴った真っ盛りの時期、白秋はゆっくりと衰えつつも深みを増していく時期、そして黒冬は静かに終わりを受け入れる晩年の時期のことらしい。

確かに、娘のことを除いても、この男性からは見た目とそぐわぬ、妙に老成した部分が感じ取れた。

「とりあえず、お茶にしてもかまいませんか。すっかり喉が渇いちゃって。未那、その間にみんなを案内してくれる？」

「承りました、パパ」

　これ以上なく上品にうなずいた少女が、自分たちを屋敷の中へと連れて行く。

　縁側とつながった和室には、人数分のお茶がすでに用意されていた。

　ちょうど良いぐらいのぬるさで、主張しすぎない芳香が鼻孔を満たした。添えられた砂糖菓子は、舌の上でほろりと崩れ、艶めかしい甘さだけを残して消えていく。昔故郷で、母がつくってくれたファッジを思い出させる味わいだった。無論、母の味より、ずっと洗練されてはいたけれど。

　風が吹き、また竹の葉の音がした。

　茶碗を手にして、凛が囁く。

「川が近いのね。水の音も聞こえる」

「いい音です」

　エルゴが言った。

　瞼を閉じて、若者はかすかに首を動かす。自然の織りなすリズムに沿って、若者の中でも何かの音が鳴っているかのようだった。

「初めての国なのに、懐かしい気持ちになります」

「その感覚は大事にしたまえ。君が失った記憶、もしくは君の中の誰かの記憶と関連しているかもしれない」

　座布団の上で、あぐらをかいた師匠が指摘する。

　その言葉で、エルゴが日本人ということもありえるのか、と思った。

無論、髪の色などはこの国の多数派マジョリティとは異なるが、そもそも魔術や神秘に関わっている者自体が極め付きの少数派マイノリティだ。目覚める前のエルゴがこの国出身という可能性を否定できるものではあるまい。

　同時に、彼に喰らわれた神も、また。

「さっき、コクトーの読み方を話しましたけど」

　自分たちを案内した後、少女が去った襖の方を見やり、凛が話す。

「先生、両儀家については、先に調べたって言いましたよね。こっちは露骨なぐらいの名前ですし、両儀に竹っていうのもそういうことでいいんですか？」

「ああ、おおよそ君の想像通りで問題なかろう」

「え？」

　自分とエルゴが、話についていけず、似たような声をあげる。

　くすりと笑った凛が、着物の懐から紙を取り出した。

　懐紙、と呼ばれるものらしかった。

　彼女が人差し指を当てると、そこに色がついた。魔力によって紙の表面だけを変質させているのだと気づくのに、少しかかった。だが、人差し指を当てた一部分だけを変質させ、周囲に一切影響を及ぼさないのは、驚くべき魔力制御の冴えであった。エルメロイ教室でも、同様の芸当ができる者が他にどれだけいるだろう。

　その円を、今度は真っ直ぐ縦に下ろした線で、凛が断ち切る。

「両儀ってのは、大陸発祥の概念ね。太極──世界そのものの象徴をふたつに割ったもののことよ。で、竹ってふたつに割れるでしょう？　この国には、竹を割ったよう、なんて慣用句もあるぐらいだから、まあ意図は持たせてるわよね」

　凛の白い指が、「竹」という文字を描く。

　それが、今口にした言葉を漢字にしたものらしい。

「ほら、この竹の字にしてから、同じような記号をふたつ並べたものでしょう？　両儀の家が竹に縁が深いというのは、このあたりに引っ掛けているんでしょうね」

「……ひとつの字に、いろんな意味があるんですね」

　茫然と呟いた自分がおかしかったのか、凛はなんだか嬉しそうに微笑した。

「そうね。表意文字の国だもの。あと、手入れはいい加減だけれど、ここはちゃんとした霊地になってる。つまり、以前の両儀家は何らかの形で、神秘に関わった家だった、ということ」

「おそらくだが、この国なりの魔術をやめた家、ということだろう」

　凛の説明に、師匠が言葉を添える。

「魔術をやめる……？　そういうこともあるんですか？」

　意外な言葉に、訊き返してしまった。

「いくらでもあるとも。まして、日本はイギリスほど魔術の浸透した土地じゃない。かつては神秘に関わっていながら、それを放棄した家系など数え切れないほどあるだろう。仮に続けたくても、現代に至るにつれて、血統の魔術回路の減少を抑えきれず、やめざるを得なくなることだって多い」

　少しだけ、師匠が寂しそうな顔になった。

　あまり意識したことはなかったが、そういえば時計塔は魔術の本場であり、ある種の聖地なのだ。そこから遠く離れれば、かろうじて保っている魔術の栄華が薄れていくのも当然なんだろう。

「……ただ、それはそれで別の意味を持つ場合がある。魔術や神秘は離れればそれで終わりというものではない。いいや、一度離れたからこそ、むしろ……」

　何かしらを師匠が続けようとした時だった。

「お待たせしました」

未那が消えた襖から、幹也が現れたのだ。

　特に着替えていたりもせず、ゆっくりと目の前に正座する。そこまでサマになっているわけではないが、柔らかで丁寧な仕草だな、という印象が残った。

「こちらが落ち着く時間をくれたのかな？」

「いや、そういうつもりは……少しだけですね」

　師匠が尋ねると、幹也が鼻の頭を掻いた。

　さらに、師匠が言う。

「あなたは、両儀家の会計士だったか」

「ええ。正式な資格は取ってないんですけど」

「だが、両儀の娘さんと結婚されたことで、事実上の後継者と目されているとか」

「海外からも、そんなところまで調べられるんですか」

「知り合いに、妙なことばかり詳しいクズがいてね。蒼崎橙子の言葉は足りなかったり過剰だったりするものだから、申し訳ないが、調べられる限りで調べさせてもらった」

「いや……うん、橙子さん、やっぱりそうなんだな」

　楽しそうに、幹也が笑う。

　懐かしそうというよりも、ほんの少しだけ離れている家族の確認のようでもあった。

「日本での蒼崎橙子も、似た感じだった？」

「はい。今回はいきなり手紙をくれたついでに金の無心もされたんで、そちらは断っておきました」

「あの人らしいですね」

　つい、自分まで口を挟んで、くすりと笑ってしまった。

大いなる魔術師であり、時にはこちらの前に立ち塞がることもある人だったのに、時々溢れるそういう人間らしさを、自分は不思議と好んでいた。

　好む、というと少し違うだろうか。

　自由で放ほう埒らつで、しかし己のルールだけは裏切らない。ああいう女ひ性とに憧れている、のかもしれない。あんな風になりたいとは思わないけれど、自分の知る美しい生き方のひとつとして。

「私たちが直面している課題については話した」

　と、師匠がお茶を飲む。

「君の抱えている問題とやらについて、聞かせてほしい。蒼崎橙子の手紙からすれば、その問題が、私たちの課題解決に関係しているのか？」

「その前に、ひとつ、お尋ねしていいですか」

「なんだね？」

「魔術師は弟子や家族を大切にするものだと、橙子さんから聞きました」

　それは本当だ。

　魔術師が最も大事にしているのは、人ではない。

　彼らは己よりも世界よりも、根源という何かに辿り着くことを優先する。しかし、それは一世代で達成できるようなものではない。だから、魔術師は後の世代に託すのだ。だからこそ、身内や弟子には親身になって守りもする。……一般的な概念とは、違うものかもしれないが。

　そのような前提の上で、幹也が問う。

「でしたら、家族から引き離された人間は、不幸せだと思いますか？」

「幸せなど、ひとりずつ違うものだろう」

すぐ師匠が返した。

「誰かが極限の不幸だと感じる環境を、最高の幸福だと噛みしめる者もいる。魔術師でなくても、それは普通のことだと思うが」

「そうですね」

　と、幹也も認めた。

「国とか環境とか価値観とか、そんなちょっとした違いで、求めるものが全然変わってしまいます。誰かと同じことを幸せと思う人もいれば、誰かと違うことこそ幸せと思う人もいます。多分、人の心のカタチがみんな違うから、幸せのカタチもみんな違うんです」

　その言葉は、すとんと胸の深くに落ちた気がした。

　たとえば、ジグソーパズルのようなものだ。心のカタチが違うから、それに合う幸せのカタチが違う。それぞれに持ち寄ったカタチが、たまたま嵌はまったときに、やっと人は幸せを感じられる。

　それを探し求めるのが、あるいは人生という道程かもしれない。

「良かった。だったら、お話しできそうです」

　胸を撫で下ろしてから、幹也は一枚の写真を差し出したのだ。

　未那と同じぐらいの、子どもが写った写真であった。うつむいた顔に、短めに切られた髪もあいまって、性別は定かでない。

「この子は？」

「夜劫アキラ」

　幹也の言葉に、

「夜劫？」

　と、凛がまなじりを吊り上げた。

「夜劫って、法術師の流れを汲んだ夜劫のこと？」

　声音に、いつもと異なる成分が混じっていた。

かすかな緊張と、猫のように隠しきれない好奇心。その表情は、アトラス院のラティオや山嶺法廷のムシキと対峙したときと同質でありながら、別の意味合いを含んでいるようにも思えた。

「この子を、助けてほしいんです」

　と、幹也は続けた。

「…………」

　師匠は即答しなかった。

　凛は、師匠の言葉を待っているようだった。

　エルゴは、興味深そうに、写真の少女を見つめていた。

　自分は……ただ、徐々に高鳴っていく心臓を、必死に堪えていた。

　ゆっくり、師匠は口を開いた。

「助けるとは、一体何があったんだ？」

「攫われたんです」

　ぴくり、と師匠の眉が動いた。

　誘拐事件。

　それ自体はどこの国でも起こり得るだろう。しかし、今の凛の言葉通りなら夜劫とは魔術の家であるはずだ。そこで起きた誘拐事件とは。

　遠く、太鼓の音が聞こえる。

　祭りの陽気さとは正反対の、陰鬱な予感が部屋にたちこめつつあった。

「橙子さんは、この子と接触を持つことで、エルメロイII世さんの問題の解決に近づくだろう、と言っていました」

第二章

1

「夜劫の子ども、か」

　回想にとらわれていた自分は、その言葉でホテルの部屋に戻ってきた。

　師匠たちの服装も、和服からいつもの洋装に戻っている。夏らしくスッキリした装いは、日本に到着した段階で、ホテルに届くよう手配していたものだった。

　少し考えて、自分も口を開く。

「幹也さんは、夜劫は両儀の遠縁みたいなものだ、と話してましたね」

「それで、誘拐事件の解決の手伝いを頼まれた、ともね。もちろん、夜劫が魔術の家だというなら、警察に届け出ないのは普通のことだが」

　神秘の隠匿、というルールがある。

　魔術師たるもの、神秘の実在を、一般に知られてはならないということだ。

　警察を介入させたならば、当然このルールは破られることになろう。だからこそ、厄介ごとは身内で処理するか、時計塔などの上部組織に依頼するのが定例となっており、似た経緯から師匠に話が回ってくることも多かった。エルメロイ家の莫大な借金のため、この手の依頼を引き受けることが、当時の師匠にとって一番わりのいい仕事だったのである。

　しかし、ほとんど地球の反対側までやってきて、また同じことになろうとは。

「捜すだけなら多分自分ができると思う、とも言ってたわよね」

凛が言う。

両儀幹也は、以前、何度か人捜し的なことをしていたらしい。それが噂になって、今回夜劫が接触するきっかけになったということだが、必ずしも両儀の家の全員が賛成したわけではないようだ。

「とりわけ奥さんが反対で、お前がやるのは勝手だが、しばらく家出するから未那を任せる、って飛び出したんでしたっけ」

これは、エルゴが口にした。

もっとも、夜劫からの依頼をもちこんだのは、この奥さんの父親だというから、なかなか複雑だ。結婚というのは複数の人間関係を一気に結びつけてしまうものだが、どうもこの日本という国では、なおさら「家」という概念が重視されているような気がする。

（……結婚）

身近ではまだ縁遠い言葉だったので、不思議な気がした。

それこそ師匠の義妹であるライネスは、いつか誰かと結ばれるはずだ。エルメロイという家にいる以上、彼女の結婚は極めて政治的な意味を持つ。好悪とはまるで関係なしに、そういう交渉材料として結婚することになるだろう、とはライネスが常々話していることだった。

その時、自分はどんな顔をして、彼女を祝福するのだろう。

なぜだか、ひどく胸が締め付けられるような気分だった。勝手に心配したり、気を揉んだりしても、彼女はきっと喜ばないだろうに。

（……幸せのカタチは、みんな違う）

幹也の言葉を、思い出す。

だったら、ライネスにとって、一番の幸せとはなんなのだろう。

それに……。

「……幹也さんは、家に頼まれたってだけで、引き受ける人でしょうか？」

「ああ。夜劫アキラを助けてほしい、なんて言ったのがどういう意味かだな」

　師匠がうなずく。

　ただ、幹也からの説明はさきほど回想していたものがほとんどで、「本当に引き受けるかどうかも含めて、あなたたちの目で見て、どうするかを判断してほしいんです」ということだった。

　ある意味、己さえも突き放しているかのような言葉。

　一息ついて、師匠が、目の前に置かれた紅茶を口にする。今日はホテルの部屋についていたティーバッグで淹れたのだが、特に不満はないらしかった。もっとも、師匠が食事について文句を言ったところは、ほとんど見たことがないのだが。

　ティーカップの水面を見ながら、師匠がふと呟いた。

「両儀幹也、か」

「珍しいですね。先生が魔術師でもない相手を、そういう風に気にしてるなんて」

　凛の言葉に、師匠が視線を向ける。

「気にしてる、か。そうかもしれないな。話した時間はわずかだが、私が会った中でも、最もよくできた人間のひとりだろう。魔術師について詳しくないと言いながら、魔術師たるものの本質をぴたりとついて、かつ偏見を持たずに話していた。知性で同じことができる人間はそれなりにいるが、彼の場合は多分、本人の生き方によるものだ。あの年齢を考えれば、驚くべきことだよ」

　なんとなく、分かる。

　探偵のように推理するのではなく、研究者のように洞察するのでもなく、ただ当たり前にしていることで、答えに至る人がいる。

　誰かの幸せを祈ることが、自然と幸せのカタチを知ることにつながるような。

「いつからかは分からないが、彼はそのように生きてきたんだろう。自分も含めて、誰も特別扱いしない──魔術師ですら例外ではな

いということなんだろう。ふん、私とはまるで正反対の生き方だな」

「つまり、先生がひねくれものだから、気に入らないって話です？」

「むぐ」

　一瞬、口から紅茶を噴き出しかけた師匠が、胸を叩く。

「お前、私のことを何だと思ってるんだ」

「正直な感想を言ったまでですが」

　飄々と口にしてのけた凛に、師匠が沈黙した。

　今度は、新たな言葉まで、さっきの倍ぐらい時間がかかった。

「……誰も特別扱いしないというのは、ひょっとしたら辛いことかもしれない、となんとなく思っただけだ」

　独り言のように呟いてから、師匠は続けた。

「いずれにせよ、これから夜劫と接触することになるだろう。日本の魔術組織に渡りをつけたいところではあったんだ。あの冠位人形師の手で踊らされている気分にはなるがね」

　肩をすくめた師匠が、ふと尋ねた。

「ところで、エルゴは両儀幹也との会話でも、礼装を使ってなかったようだが」

「あ、はい。大体はわかりました」

　備え付きのパンフレットなどを読んでいたエルゴが、振り返って言ったのだ。

　飛行機の中で、映画を観て、ガイドブックをさらっと読んでいただけなのだけれど、あっさりとエルゴは日本語を習得してしまったらしい。到着して半日ほどした頃には、日本語の小説なども読み始めていて、自分も師匠も絶句したものだった。

「凛は、君の語学力はシュリーマンも凌駕すると言っていたな」

「ね、呆れちゃうでしょ」

　なぜかちょっと得意げな凛をよそに、師匠が言う。

「ある種の魔術師のように、魔術回路に翻訳の演算をさせているわけでもない。言語能力は、君の才能なんだろう」

「だったら、嬉しいです」

　褒められた犬みたいに、ニッコリとエルゴが笑った。

　人を嬉しくさせる笑顔があるとしたら、これだろう。自分も少しぐらい見習えたらいいのだけど、と頬に触れる。

　それから、凛が話題を戻した。

「じゃあ、夜劫の屋敷には揃って行きますか？」

「……いや、ここは私とグレイだけで行こう」

　師匠が、かぶりを振った。

「その方が立場がややこしくならないからな。凛は冬木の管理者セカンドオーナーでもあるし、エルゴに至ってはまともな説明さえできない。ここで連鎖的に問題が増えるのはごめんだ」

「……む、それはそうですね」

　エルゴの正体は、自分たちにも分かっていないのだ。

　場合によっては、夜劫という組織と、妙な関連がないとも限らない。すでにアトラス院と彷徨海の構成員を敵に回している以上、更なるハプニングは避けたかった。正直、こういう状況で、師匠がいかにややこしい事態に巻き込まれがちかは、自分もこの数年で身にしみていたからだ。

　凛も納得したようにうなずいてから、

「だったら、わたしたちは少しでかけましょうか」

　と、エルゴの手を取ったのだ。

「どうするつもりだ？」

手荷物を小さなポーチにまとめた彼女は、数歩進んでから、振り返る。

「東京観光ですよ。せっかく来てるんだから、観光しない手はないでしょう？」

「どのあたりを予定してるかは聞かせてもらえるか。連絡は携帯電話でいいだろうが、一応位置関係は踏まえておきたい」

「もちろんです。まずは、父が懇意にしていた古書店が神田神保町にありますので、そちらを訪ねてみようかと」

「なるほど、古書店は地元と密着してるからな。いい目の付け所だ」

「でしょう！」

　片目をつむって、エルメロイ教室の俊英が扉のノブに手をかける。

　そこで振り返った。まんま罠にかかった鼠を観察する猫みたいだった。

「そうそう。その後は近場ですし、秋葉原に行ってみようと思うんです、教授」

　結果は、いっそ劇的だった。

　声も上げられず、師匠が硬直したのである。

　彼女が颯爽とエルゴと出かけるまで、見事に固まったままの──それは、目の前で念願のおもちゃを横取りされた子どものような顔であった。

2

　夏の湿っぽい風に、柳が揺れていた。

　細長い葉が、墨ぼっ痕こん淋りん漓りたる看板に触れている。

　その玄関を出て振り返ると、建物の向こう側で、太陽がギラギラ輝いていた。

　手をかざして、遠坂凛が軽く眼を細める。

「うーわ、あっつ。やっぱり日本の夏はたまらないわねえ」

　周囲を行く人々も、多くはハンカチなどを持ち、ひっきりなしに汗を拭いている。高温多湿のシンガポールにすら、十分日本の夏は匹敵しうる。シンガポールの夏は曇りが多いことを考えれば、体感気温では上回るやもしれない。

　神田神保町。

　もとは武家屋敷の立ち並んでいた土地が、世界屈指の本の街として知られるようになったのは、明治時代における変革のためだ。東京大学をはじめとして、さまざまな大学が開校し、学生街となった神保町では、年次ごとに多くの学生たちが使わなくなった教科書を売るようになったことから、古書店が発達したのである。

　やがて客層もジャンルも広がり、各国の古典や文学はもちろんのこと、演劇も美術も紀行も建築もありとあらゆる書籍を網羅して、この街は広がっていった。いまや二百に余る古書店が軒を連ねるこの土地では、ほとんどの書店が直射日光を嫌って、北向きに建てられている徹底ぶりである。

　凛たちが出てきたのは、そんな古書店のひとつだった。

「いい買い物ができたんですか」

「悪くなかったわね。どこでも魔術師が眼を光らせてるロンドンと

違って、あちこち巡り巡った品がポロッと出てくることがあるのよ。おかげで二百年ほど前の掘り出し物が出てたから、とりあえず確保したわ」

　エルゴに向かって、紙袋を持ち上げる。

「地元の話もいくらか聞けたけれど、このへんは後で、先生と詰めるところね。秋葉原でフラットから聞き出したレアアイテムを物色した後、個人授業とギブアンドテイクでトレードしてあげましょう」

「トレード」

「ええ。シンガポールの事件でも、あれこれ生徒の術式について腹案があったのが分かったもの。あれはまだまだ絞れるわよ。名門から略奪してきた魔術について口を割らせてもいいし、ライネスの機嫌を損ねない範囲で先代ロード・エルメロイの魔術を解説してもらってもいいし……」

　胸の中でそろばんでも弾いているように、凛がほくそ笑む。

　伝統的な悪代官というか、おぬしも悪よのうというか、およそ知人には見せがたい、私利私欲にまみれた表情ではあった。あらかじめフラットに聞き取りしていたのも、このチャンスを期してのことだったに違いあるまい。

　そんな相手を前に、ふとエルゴが口を開く。

「凛さんが、時計塔でのことを楽しそうに話す理由が、やっと分かってきました」

「なんのこと？」

「あの人が先生なら、きっと厳しくても充実しています。学んでいる時間が、自分を高めてくれるんだって信じられそうだから」

　エルゴの言葉に、凛はきょとんとしてから、軽く苦笑した。

「そういう素直さは、わたしたちには毒ね。あなた、エルメロイ教室に入ったら、きっといろんな意味で苦労するわよ」

「そうですか」

「絶対間違いないわ。グレイは気質的に魔術師に近いけれど、あなたの場合はちょっと陽性が強すぎるから。……でも、うん、楽しいのには違いないでしょうね。周りも本人も苦労するけれど、それでも楽しいってことはあるもの」

　歩きつつ、凛が独り合点する。

　多くの書店が並んでいる中、ぷんと食欲をそそるカレーの香りがしてくるのも、この街の風物詩だろう。かつては、教科書を売った学生たちが、その金でカレーを頬張る光景もあったのやもしれない。

　先を行く背中を追いながら、ふと思い出したように、エルゴが尋ねた。

「ロンドンにいるっていう、日本人の助手さんもそうだったんですか」

「ちょ」

　言いかけて、凛が片手で顔を覆う。

　間をおいてから、振り返り、こう尋ねたのである。

「……ひょっとして、顔に出てた？」

「少しだけ。やっぱり、日本に来ると思い出しますか？」

　エルゴの言葉に、シンガポールで海賊たちを率いていた女魔術師はそっと微笑した。

「わたしの故郷とは結構離れてるけど、まあ同じ国だもの。うん、この暑さは懐かしい気分になるわよね。冬木も東京も変わらないんだなって」

　建物の間から覗く空を、見上げる。

　冬木にもロンドンにもつながっている、夏の青い空。

「そうね。実際のところ、あいつがロンドンの生活を楽しんでるかは分からないけれど、わたしは目一杯楽しんでるわ。魔術師らしくない同士、あなたとも気が合うと思う。そういう意味では、魔術師

らしすぎる先生とは逆なのよね」

　横顔が、さまざまな色を帯びた。

　この女性には、いくつもの顔がある。

　胸を打つ凜々しさも、俗っぽいがめつさも、道ばたに咲いた花のごとき逞しさと可憐さも、すべて本当なのだろう。その全部を当たり前に受け容れていることこそ、希な資質なのではないかと、そんな風にエルゴは思っていた。

　たくさんの自分を許せるからこそ、彼女の世界は美しいのではないか、と。

（僕は、どうだろう）

　ひっそりと思う。

　凜に拾われる以前の記憶は、まるで回復していない。エルメロイII世に言わせれば、それは記憶喪失ではなく、神を喰らったことによる記憶飽和なのだという。放置すれば、いずれはこの人格も押しのけられ、消滅するだろうとも忠告された。この旅に出たのは、まさしく生き残るためなのだ。

　しかし。

　過去の記憶と人格を取り戻したいかと言われれば、悩むのである。

　神を喰らった時の自分が、真っ当な人間であると、誰が保証できるのか。山嶺法廷のムシキや、アトラス院のラティオのことを考えれば、凜やII世と敵対する可能性だって十分にある。場合によっては、グレイと殺し合うことさえ、ないとは言えないだろう。

「…………ッ」

　息が、苦しくなった。

　そんな未来を考えただけで、エルゴは胸が詰まってしまう。

　精一杯に生きて、恥ずかしそうにフードで顔を隠している彼女が、心の柔らかなところにいるのを、若者は意識していた。多分、

それは仲間意識のようなものだろう。自分も彼女も、古い時代の誰かに乗っ取られないよう、必死に抗っている。

（ラナの声を聞きたいな）

　数日前別れたばかりの、海賊島の少女を思った。

　ホームシックというのは、おかしいかもしれないけれど。

　蟬の鳴き声を聞きながら、ふたりは神保町から東の方角に歩いていった。

　アスファルトに、濃い影が落ちている。その影を追うようにして、ふたりの足が進んでいく。うだるような夏の陽気だが、凛の足取りは変わらず颯爽としており、エルゴの足取りはどこか初々しい。

　初めて訪れる国を、一歩ずつ確認するかのようでもあった。

　途中で、凛が口を開く。

「何か、気づいたことある？」

「道のあちこちに、神社があるんですね」

　エルゴが視線を向けたところにも、小さな祠があった。

　手前に安物のカップ酒が供えられていて、可愛らしい紙人形も置かれている。おそらくは近隣の住人によるものだろう。

「神様の多い国だもの。それとも、近いという方がいいのかしら」

　歩みを止めずに、凛が言う。

「やおよろず、っていうのよね」

「八はっ百ぴゃく万まん、ですか？」

　数字を几帳面に返したエルゴに、凛は微笑した。

「あくまで、多いことのたとえだけど、この国はたくさんのことに神を見いだすのよ。風が吹くこと、波が起きること、火がおこること、手を合わせること。ある種の汎霊説アニミズムだけれど、実際

に霊が宿ってると思ってるわけじゃないわね。神を信仰しているんじゃなくて、神がいるかのように扱う、振る舞うっていう行動や感情の話」

「神を信じてないのに、神様がいるみたいにするんですか？」

「言われてみると不思議よね。でも、そういう国なのよ。はっきり信仰を自覚しているわけではないのに、新年にお賽銭を投げたり、受験合格のお祈りしたり、さっきみたいに道祖神やお地蔵さんにお酒を捧げたりするの。うん、そういうのって多分、神様よりも自分の内側の何かを確認しているんでしょうね」

　彼女の言葉は、なんとなくエルゴにも伝わった。

　胸に、そっと手をあてる。

　エルゴの場合、そこには本当に神がおわすのだ。かつて自分が喰らった神が。

　ゆっくりと、手が口元に上がる。

　そこにも、ある。

　記憶を失っても、いまだ舌から離れることのない、神の味わいが。

＊

　しばらく唇を噛んだまま、師匠はハンドルを握っていた。

　レンタカーである。

　イギリスと日本は同じ右ハンドルなので、馴染むのは早かったようだ。普段使っている車種が借りられなかったことに、師匠は不満げだったが、まがりなりにも君主ロードとして使っている高級車がそうそう借りられないのは当然だろうとも思う。助手席に座る身としては、加速などのスムーズさは違いを感じるが、気になるほどのものでもない。

もっとも、今回の場合、師匠の思考の大部分は別のところにあったのだが。

「……私にとっても、こんな機会はめったにないのに……しかし秋葉原を中心とした聖地を回るとしても三日は欲しい……優先順位の高いレアアイテムを掘って、あとから交流可能な最低限のコネクションを構築するなら一週間……くそ、秋葉原の買い物は遊びじゃないんだぞ……」

ぶつぶつと言い続ける真剣さは、今まで見たことがないほどだ。

凛が残していった傷跡は、かように深刻らしかった。さすがはエルメロイ教室の新たな核爆弾、という思いを新たにしてしまう。ある意味、これは魔術以上に強烈な呪いではないだろうか。

「そんなに行ってみたい街だったんですか」

「いやそういうわけでは……もちろん、余裕さえあれば行きたくないわけではないが、あくまでリフレッシュとしての話で」

言い訳みたいに口にして、師匠が道路を睨んでいる。

なんだかおかしくなってしまって、つい余計なことを口にしてしまう。

「拙は、師匠が行きたいところなら、一緒に行きたいです」

「ああ、悪くはないな」

「それに……」

言いかけて、やめる。

少しだけ、思ってしまったのだ。

純然たる趣味で街に出かけたこの人の隣に、もしもあの大英雄がいたなら、きっとこれ以上なく素敵だろうと。自分にとって、かの英雄はかつての事件でほんの一瞬垣間見ただけの幻影だけれど、それでもふたりの絆は静謐な光を湛えていた。……いいや、以前より師匠が穏やかになった分、ちょっとした言葉や表情で、意識することはかえって増えたかもしれない。

「なんだ？」

「あ、いえ……」

　口ごもった自分をちらと見て、苦笑した師匠は小さくこぼした。

「私のゲーム趣味は、もともとあいつがきっかけだからな」

　はっ、と顔をあげた。

　考えを見透かされていたみたいで、耳まで熱くなる。

　師匠はどこか懐かしそうに、眼を細めていた。その表情は、やはりこの国が、若かりし頃の師匠が戦った舞台だからだろうか。

　第四次聖杯戦争。

　今の師匠をつくりあげた、熱い時間。

　ああ、それこそ師匠の話していた四つの時代──人生を四つに分けた呼び名の、青春ではなかっただろうか。

　師匠がアクセルを踏んで、車が加速する。

　すぐ、山が見えてきた。

　鬱蒼と茂った林が、天蓋を覆うかのようだ。車のエンジン音にも掻き消されぬほど、蟬の鳴き声がけたたましくなっていく。窓ガラス越しに感じられる空気も、その温度と色合いを変えたかのように感じる。

　麓からつながる坂道に入り、さらに十分ほど走ったところで、突然巨大な建造物が目に入った。

　真っ黒な──塗料で塗ったのかと紛うほど、黒い屋敷であった。

「ここが、夜劫の屋敷ですか？」

　昨日の、幹也が案内してくれた瀟洒な屋敷とは、比較にもならない。

　いかにも武骨な門構えといい、ぱっと見て端がどこかも分からないほどの漆喰の壁といい、桁違いの規模である。山の雰囲気と渾然

一体となった佇まいに、圧倒されてしまいそうだった。

「いいや。これはただの入り口だ」

　と、師匠が言った。

「入り口？　それってどういう」

「内側にいくつも建物があるんだ。この山が、そのまま夜劫の家ということだな」

　驚愕を呑み込み、改めて建物を見やる。

　確かに、門の向こう側には、複数の大きな建物が見えた。いずれも相当昔に建てられたことは間違いない。

「付け加えれば、さっきの道からずっと私有地ということらしい。だから、この国の地図にもきちんと記載されてないらしいな。なるほど、この面積と歴史であれば、これも立派な結界になるだろう」

　結界にも、いろんな種別があると師匠はよく言う。

　いわゆる魔術的なもの。

　逆に科学的なもの。

　人間の心理に訴えたもの。

　この山の場合は、歴史や法律を盾とした結界になるだろうか。いずれにせよ、あちらとこちらを区別して、他者の行き来を許さないものであろう。

　しかし、この規模となると、ほとんど小国の国境ではなかろうか。

「おそらく、夜劫という組織は豪族の流れを汲んでいるんだろう」

「豪族というと、地方の有力者でしたっけ」

　師匠がうなずき、運転する車が門を通り過ぎる。

　その先も、ずっと道が続いていた。

「洋の東西を問わず、山というのはある種の治外法権でな。だから、海賊に対して山賊なんて言ったりするわけだ。日本の場合だと、近世になって徳川家康という英雄が幕府を開いた後も、山の内側には独自の秩序ルールが存在した。同じ日本でありながら、ある種の山の内側は、ほとんど別の国といえるほどの有様だったわけだ」

「それって、山全体が結界のようなものなんですか」

「もちろん、そうだ。仏教ブッディズムでも、お山なんて言い方をするぐらいでね。山だけではなく、国境も文化も言語も、すべてが結界の構築要素たりえる。私たちは常に何かを区切っていないと、生きていけないモノなんだから」

　何かを区切って、生きていく。

　その言い方は、なぜか自分に魔術師の業とも言える、根源のことを思い出させた。

　師匠たちに言わせると、現代のありとあらゆるものは根源から枝分かれして、生まれてきたものなのだという。

（……ひょっとして）

　その枝分かれとは、つまり何かを区切って生きていく、という話とほとんど同質なのではないだろうか。私たちがそうしなければ生きていけないモノであるから、根源もまた区切られていったのではないだろうか。

　ひどく、重大なことに近づいた気がした。

　錯覚かもしれないと、糸口を追うようにして考えていたところで、ようやく新たな建物が見えてきた。

　最初の門と同じ、漆黒の建物であった。

「……徹底しているな」

　と、師匠が呟いたほどだった。

　壁も、門も、柱も、屋根瓦の一枚ずつさえもが、果てしなく黒い。

まるで、地面に落ちた影が立ち上がり、そのまま屋敷に変じたかのようだ。真夏の眩しい陽光もあいまって、あまりにも異質な構造体に映る。斜め前には、三つほどの土蔵も建てられているのだが、それさえも軒並み黒かった。

少し離れた場所に砂利が敷いてあり、何台かの車が止まっていた。

自分と師匠もそこで降りる。

エアコンの効いた車内を出ると、むっ、とたまらない熱と湿度が押し寄せた。

土と緑のにおいが混じっている。

山のにおいである。

同じ山であっても、いつもどこかに肌寒さの張り付くようなウェールズとは異なる、この国のにおい。この国の暑さ。

改めて、第二の門前に立つ。

ノックもチャイムも必要なかった。

ゆっくりと門が開き、思いがけないものを自分と師匠は見ることになった。

数十人もの黒服の男たちが、道の両側に並んでいたのである。

髪型こそめいめいだったが、全員が黒いスーツに、黒いネクタイをしていた。真夏の昼間だというのに、まるで暑さも感じていないようだ。

（……ジャパニーズ・マフィア）

師匠が言っていたのを思い出す。

両儀の遠縁だというのなら、この夜劫もそうなのだろう。

師匠は豪族の流れを汲むのではないかと話していたが、そうした地方の有力者がやがてヤクザになっていったのかもしれない。この国について詳しくはないが、政府機関に吸収されなかった有力者

が、反体制的な形で自己構築するのはいかにもありそうに思えた。

　歴史のあやによってつくられた、まつろわぬモノたち。

　だが。

　自分と師匠が絶句したのは、それだけではない。

　振り向いた男たちの顔は、ことごとく仮面によって覆われていたのだ。おそらくは日本の民族的な品であろう。以前師匠と一緒にロンドンで見た能楽の役者が、似た仮面をつけていたように思う。

　同じ表情のはずなのに、わずかな陰影の違いで、泣いているようにも笑っているようにも怒っているようにも見える、奇妙な仮面。

　そんな仮面をつけた黒服たちが、時計仕掛けみたいにこちらを振り向き、一斉に頭を下げる。

「…………っ！」

　あまりに非日常な光景で、正直混乱してしまっていた。

　魔術や神秘といった事柄は馴染んでいたし、時計塔やそれにまつわる貴族たちにも、似た感じで多くの部下を連れている者はいた。しかし、異国ならではの景色や立ち居振る舞いを含めて、今の風景は自分の常識の外にあったのだ。

　皆、微動だにせぬ中、ひとりだけが歩み出た。

　唯一、彼は仮面をつけていなかった。

　右手をギプスで固めて、三角巾で吊った男だった。

「お待ちしておりました、ロード・エルメロイ」

「悪いが、II世をつけてくれ。私の肩には重い名でね」

「分かりました。ロード・エルメロイII世」

　言葉は実直かつ丁寧だが、声音の底に圧がこもっている。

　暴力を背景にしている人間特有の圧だ。ここ数年、自分もそういう相手と接触することは増えていて、独特な気配を識別できるよう

になっていた。

　年齢は、師匠と同じ三十代前半あたりだろうか。

　短く刈り上げられた髪も、引き結ばれた唇も、スーツ越しにも明白な逞しい肉体も印象的だが、一番は眉間に刻まれた切り傷の痕だろう。斜めに走った傷はかなり古いものらしく、淡い色を皮膚に沈着させていた。

「君の名は？」

「夜や劫こう雪ゆき信のぶ、と申します」

　師匠が、かすかに目を見開いた。

「夜劫の後継者直々のお迎えとは」

「残念ですが、その評価は正しくないかと」

「ほう？　私が聞いた限りでは、この数年事実上あなたが夜劫を切り盛りしているということだが」

「でしたら、こうも聞かなかったですか。組織の切り盛りなどという些細なことで、夜劫の後継者は決まりません」

　ギプスの男の言葉は、けして卑下するようなものではなかった。

　ただ単純に、決まりきった事実のみをごろりと投げ出す口調。

　そうして話しているうちに、屋敷の方から声が聞こえてきたのだ。

「お待ちください。朱あか音ね様」

「いいや、待たないね。わざわざ出向いてもらったのに、こちらが奥の間であぐらかいてるわけにいかないだろう？　あの両儀が、まさか時計塔と──それも君主ロードとつなぎを取れるなんてな。ははは、とっぽい見かけでやるじゃあないか、あの婿どの」

　仮面はつけていない。

　纏っているのは、喪服と紛う黒い着物だった。

艶っぽい光沢のある生地は絹だろう。銀色の帯以外は無地で、屋敷と同じく陽光を吸い込むかのようだった。

　五十代半ばと思しい婦人が、引き留めようとする周囲の人々を振り払い、まっすぐこちらに向かってきたのである。

「当主でございます」

　と、夜劫雪信は目を伏せた。

　師匠が向き直って、片眉をあげる。

「あなたが」

「そうさ」

　と、婦人は目を輝かせた。

　皺が目立ち、髪は半ばが白くなっている。

　しかし、その瞳に宿った勁けい烈れつたる意志だけは、若かりし頃から変わっていないのだろうと思われた。

「夜劫朱音っていうんだ。ロード・エルメロイII世──ああいや、最近は略奪公の方が通りがいいんだっけか？」

　どこか悪戯っぽい調子で、婦人はそんな風に言ったのであった。

3

「このあたりから、秋葉原ね」

　凜の囁いた地点から、ガラリと風景が変わった。

　多くの建物からゲームやアニメの広告が吊るされ、ポップに描かれたさまざまなキャラクターが躍動していた。

　大通りは、歩行者天国となっている。

　そのあちこちで、たくさんのパフォーマーたちが思い思いの表現を振るっていた。

　メイドコスプレのまま踊っている者もいれば、古ぼけたギターでロックをかき鳴らしている者もいる。あるいは自作のコントを披露している二人組も、パントマイムを演じている魔法少女もいて、そんなパフォーマンスへ勇んで参加しようとする通りがかりの人もいた。

　猛暑を蹴散らさんばかりの、とにかく混沌カオスな空間であった。

　ただでさえ印象の強いもの同士が、これでもかと坩る堝つぼに投げ込まれ、グツグツと煮えたぎっているかのようだ。

「……秋葉原って、すごいんですね」

　目を白黒させたエルゴが、何度となく頭こうべを巡らせる。

　先行する凜も、かすかな驚きを押し込めつつ、あんまりに自由な街に目を見張っていた。

「同じ日本にこんな世界もあったんだ……。先生が、ここに時計塔の支部があれば、なんて時々ぼやくわけね」

「ないんですか」

「あったら、あんな顔してないわよ」

　くすくすと笑う。

　別れる際のII世の表情を思い出したらしい。写真でも撮っておけばよかった、と嘯うそぶく彼女をよそに、

「みんな、楽しそうです」

　と、赤毛の若者は口にした。

　どこか夢見るような表情で、ふわふわと歩いている。

　昨日、神社の祭りを歩いていたときも、こうだった。同種の横顔を見て、地に足がついてないと悪口を言う者もいるだろうが、この若者の場合、不思議と周囲を和ませる効果を伴っていた。

　猫よりは、やはり犬だろう。

　暖炉の側で眠そうにしたり、幼子を引っ張って散歩したりする大型犬だ。

「なんだか、毎日お祭りの中にいるみたいで」

「ああ、そうね。歩行者天国はある意味お祭りかも。季節的に言えば、盂う蘭ら盆ぼん会えよね」

「盂蘭盆会……夏のお祭りですか？」

「ええ、シンガポールにもあったでしょ。旧暦の七月──いわゆる鬼月に行われるハングリー・ゴースト・フェスティバルのこと」

「あ、それならラナたちも話してました。夏には、あの世から先祖や友達が帰ってくるんだって」

「どっちも、元は同じ祭りなのよ」

　凛がかすかに目を細める。

　マラッカ海峡の海賊のコンサルタントとして、辣腕を振るったことを、思い返しているかのようだった。時計塔から指示を出していた期間も長いはずだが、心のどこかはあの海で太陽に手をかざしているのかもしれない。

「ハングリー・ゴーストってのは本当にそのままで、飢えた死者を慰めるために食事を捧げ、娯楽を捧げようってこと。うん、ある意味秋葉原には似合ってるかもね。東洋の死者はよく水に親しむものだし、秋葉原このあたりはもともと海の中だったわけだから。先生風に言うなら、ゲームだってお祭りのようなものだしね」

　真夏の騒がしい大通りを歩きながら、凜が言う。

　竣工されたばかりの高層ビル──秋葉原ＵＤＸが睥へい睨げいする歩行者天国には、大型のモニターを並べた電気屋も多く、各種最新ゲームのトレーラーが惜しげなく流れていた。

「とりわけデジタルゲームは、二次元と三次元で区分けして、向こう側にひとつの世界を想定する儀式よ。もちろん本や映画でも同じなんだけど、モニターという区切りの向こう側に働きかけられるから、こうした定義はより直接的になるわね」

「あ、先生が遊んでる携帯ゲームとかもそうですね」

　エルゴが相槌をうつ。

　道端に座り込んでいた、学生らしいグループのひとりが、携帯ゲーム機を片手に小さくガッツポーズを取った。どうやらグループ全員で遊んでいるらしい。ちらっと見えた画面からすると、エルメロイII世も遊んでいた、幻想の怪物を狩猟するゲームだ。

「だから、先生も好きになったんでしょうか」

　その呟きで、不意に凜が足を止めた。

　頭ひとつ高いエルゴを見上げるようにして、ため息混じりに言う。

「エあルなゴた、本当に真面目ね」

　人差し指で、胸板をついた。

「でも、そういうのオススメしないわよ」

「どうしてです？」

「決まってるわ。順番が逆だからよ。あなたの言う通りだと、好き

になるべきだから好きになる、ってのが最終地点になるじゃない」

　女魔術師の言葉に、若者はきょとんとしてから、神妙な顔でこめかみを押さえた。

「……言われてみれば、そうかもしれません」

「でもね。わたしたちは好きになったから、生きるべきなの。生きるために好きになるんじゃないわ。逆にしたからって支障があるわけじゃないけれど、意地を張るところを間違いやすくなるわよ」

「…………」

　すると、エルゴはううんと唸り、頭を抱えてしまった。

「どうしたの？」

「いえ……でも、凛さんの言う通りだと、僕たちは好きになってはならないものも好きになってしまいます」

「そうね」

「だったら、そのために誰かと諍いさかいになることもあるんじゃないですか」

「もちろんよ。そのときはね、きっぱりと戦うしかないの。わたしたちの歴史なんて何千年もその繰り返しなんだから。いい、エルゴ？　魔術師でもそうじゃなくても、どんな風に生きていたとしても、それはいつかやってくる。そのとき話し合うのもいい。妥協するのもいい。折れたって全然構わない。だけど、戦うって選択肢は必ずどこかに入ってるべきよ。その選択肢が頭を掠めなくなったら、わたしたちは別に生きていなくてもいいってことになるんだから」

　そこまで話して、あ、と小さく声をあげた。

　ただでさえ目立つふたりが、道の真ん中で口論しているように見えたため、通りすがりの人々の注目を集めつつあったのだ。

　エルゴの袖をつまんで、そそくさと場を離れる。

　人気の少ないビルの裏あたりで、やっと落ち着いて、息をつい

た。

「あー、もう。陽気にあてられて、うっかり話しすぎちゃった」

　ぱたぱたと自分の手で首元を扇いで、メモ用紙を取り出す。

「さて、フラットから聞き出したレアアイテムの店は、と……」

　メモを広げかけたところで、白い指が止まった。

「どうしたの、エルゴ？」

「それが、その」

　かすかな躊躇と視線の行き場に、凛がはっとまなじりをあげた。

「ひょっとして幻手？」

「はい。背中のあたりが、妙にチクチクして」

　エルゴが、そっと肩口を撫でた。

　三対六本の幻手は、非実体化させている限り、人の目には映らない。それでも、エルゴには感覚が存在するようだった。

「へえ……そういえば先生が、幻手は道具というよりも、より膨大な情報圧に耐えられる感覚器なんじゃないかって話してたわね」

　エルメロイII世の仮説であった。

　だからこそ、このままだと、エルゴの人格は崩壊するのではないかとも話していた。彼の記憶喪失は、本来は記憶飽和である。たかが人間の人格情報では神の情報に比するわけもない、という論理だ。

　だからこそ、凛の表情もかすかに緊張を漂わせつつ、しかしなるべくいつもの調子で尋ねた。

「何か、分かる？」

「いいえ」

　と、エルゴがかぶりを振る。

「だけど……強くて、怖いです」

　目をつむった。

　少し悩んでから、こう付け足す。

「それに……黒い」

　奇妙な言い方だった。

　見えているわけではないだろう。なのに、黒いという形容をエルゴは選んだ。いくつかの理由や推測が、凛の脳内で明滅して、彼女はメモ用紙をしまい、別のものを懐から取り出した。

「それって？」

「魔力針」

　彼女が取り出した品は、コンパスに似ていた。

　というより、コンパスそのものだ。優美な装飾を施され、方位を示す針は北とは異なる方角へゆらゆらと揺れている。

「昔、誕生日プレゼントでお父様から同じものをもらったんだけど、これはわたしが一からつくったオリジナル」

「ひょっとして、聖杯戦争で使ったんですか」

　若者の質問に、凛は不敵な笑みを返した。

「聖杯戦争では定石だったのよ。街を出歩いて、自分と同じ参加者を探すっていうのがね。東京は広いから、別の仕掛けが必要だと思ってたけれど……エルゴの感覚と合わせれば、いけるんじゃない？」

＊

　仮面の男たちに連れられて、自分と師匠は館へと入っていった。

建物の内側も、ひどく黒かった。

　柱も壁も外から見たままで、内側に入っていくほど、巨人の臓腑に潜っていくかのごとき心持ちがする。香木を焚いているのか、不思議な匂いが満ちていることも、そんな印象を強くしていた。

　体の内側まで、侵食していくような色と香り。

　前後に付き従った黒服の仮面も、それを助長するかのようだ。

「皆さん、ずっと仮面なんですか……？」

「はは、そんなわけないだろう！」

　おそるおそる尋ねた自分に、婦人は大いに笑った。

「こいつはある種の儀式さ。時計塔なら、もっと本格的で合理的なやり方なのかもしれないがね。地球の裏側では、水も土も空気も違う。当然魔術も異なるさ。まあ、私たちは魔術とはあまり呼ばないがね」

　くつくつと、和服の婦人が肩を揺らす。

　夜劫朱音。

　この魔術組織の、当主だという。

　彼女についていくと、自分の距離感や平衡感覚も少しずつ狂っていくように思えた。奇妙な言い方になるが、真っ黒な万華鏡の中を歩いているみたいだ。目に見えるのは漆黒だけなのに、認識できないほどの濃淡の違いが、自分たちの内側に修正不能な歪みをもたらしていく。

　日の届かぬ廊下には、蠟燭が灯っている。

　揺れる光に照らされて、天井には髑髏どくろが笑っているようではないか。

（……錯覚だ）

　目を細める。

　浅く、深く、密かに呼吸を繰り返す。

師匠に習った、防性の瞑想メディテーション。想像力や感受性が自身を傷つけてしまわぬよう、心をしっかりと壁で覆う。時計塔に数年通っても、ほとんどの魔術は身に付かなかったが、かろうじてこの手の技術は及第点をもらったのだった。

　やがて、広い部屋へと辿り着いた。

「…………ッ！」

動揺を、押し殺す。

　今度こそ本当に、仮面が壁に掛けられていたのだ。

　ひとつやふたつではない。数十か、下手すると百を数えるのではという仮面たちが、真っ黒な壁を埋め尽くしている。いずれも黒服たちがつけているのと似た、木彫りの面だった。

「趣味が悪いのは許せ。まあ魔術師というのは、どこでも悪趣味になるものだろうが」

　ここまで連れてきた仮面の黒服たちが帰って行き、朱音は部屋の奥に座った。

　こちらにも、座るように促す。

「能面……それも喝かっ食しきや今若など、男の面ばかりですね」

　師匠が、壁を見ながら言った。

「へえ、分かるのか」

「イギリスでも能楽の公演があったので。美しい劇でした」

「ああ、時計塔の君主ロードとなれば、一般社会でもそれなりに遇されるか。ほとんどが黙って裏に引っ込んでいる、うちの国とは大違いだな」

「神秘は隠匿すべし、という最優先事項は変わらないでしょう」

　師匠と夜劫朱音の会話は、ひどく穏やかなのに胸騒ぎがした。

　ふたつの文化が、刃を交わしているかのようだ。昔観た日本の映画で、サムライがジリジリと間合いを詰めているのにも似た感覚であった。

　ちら、と師匠の視線が、婦人の背後へ投げかけられる。

　奥まった位置の壇には、黒い布をかけられた何かがあったのだ。形からすれば、どうやら鏡であろうか。

「ヤクザには三つの源流がある、と聞いたことがあります」

「ほう」

「当時の政府に存在を認められていなかった賤民、非合法の賭場を開いていた博徒、多くが寺社で屋台を出したり芸を見せたりしていた的屋テキヤ。完全に分別できるようなものではなく、これらが渾然一体となり、互いに交流してきたものこそがヤクザの源流でしょう。とりわけ最後、的屋が売るものについては極めて範囲が広く、薬や春を売るのももちろんのこと、相撲や能楽の興行、果ては呪詛や祈禱も商っていた、という記述を読んだことがあります」

「そうやって、どこでも解体してるのか？　さすがは略奪公」

　呆れたような婦人の言い草に、師匠は眉をかすかに動かしたきりだった。

　同時に、自分はひどく心臓が高鳴るのを感じていた。今の分析はヤクザについての話と見せかけて、露骨に夜劫という組織を語っていた。もちろん、個々の事情はいくらでもあるだろうが、おおよその方向性は間違ってない、というところだろうか。

　祭りを、思い出した。

　西洋だろうが東洋だろうが、祭りとはつまり呪的な儀礼に違いあるまい。ならば、それを仕切る存在も否応なく神秘の昏い色を帯びる。

　目を細め、間をおいてから、師匠が改めて切り出した。

「一族の方が攫われた、と聞きましたが」

「まあ、その通りさ。縁のある両儀の婿が、時々人捜しみたいなことをやってる……って聞いてね。まあ恥を忍んで相談してみたわけだ」

　幹也に聞いていたのと、おおよそ同じ話だった。

「失礼ながら、私たちはここでは余所者です。人捜しで役に立つとは思えないのですが」

「ああ、それは誤解させたか」

　と、朱音が微苦笑した。

「両儀に頼んだ人捜しってのは、ちょうどいい伝手のことなんだよ」

「……どういうことですか？」

「子どもを攫った相手に、異国の魔術の気配があったのさ」

　その言葉で、皮膚の上に微細な稲妻が走ったかと思えた。

「日本の魔術組織は、結束こそ固いがちっぽけなものでね。時計塔にも、大陸の螺旋館にも遠く及ばない。攫われた子どもはもちろん追っているが、その際にどこかの虎の尾を踏んだら、対処が必要になるだろう？」

　ひどく政治的な話だった。

　時計塔でこの手の話を聞くことは増えていたが、また異なる感触を自分は覚えていた。

　何もかもが黒い、この部屋のせいかもしれない。

　あるいは、無数の仮面たちのためか。

　そのひとつずつに意思が宿り、こちらを見据えているようだ。時計塔でも幾多の陰謀と思惑が絡み合い、複雑極まりない様相を呈していたが、この場く所にでは思惑自体はひとつに集約され、代わりにねっとりとした空気が首を締め付けてくるかに思えた。

「……つまり、攫った相手を迂闊に捕まえたら、その相手の組織と諍いになるかもしれない、ということですね？」

「おっと、この国には似合わない、ちょっと直截すぎる言い方だ」

　戯けるように、朱音の唇が歪んだ。

「まあ、さっきも似たことを言ったが、国が違えば水も空気も違う。当然やり方も違う。だけど、私たちはなるべく穏便に行きたいんだ。いざというときの保険だって欲しい。世界に冠たる時計塔の君主ロードに、それを期待しても悪くはないだろう？」

　なるほど、時計塔の君主ロード、というのを強調してきたわけだ。

期待しているのは、仲介や保険としての役割。戦争を始める前から、落とし前の段取りを考えている、いかにもマフィアらしい発想であった。

「ミズ夜劫」

　と、師匠が呼びかけた。

「そういう話をするということは、あなたは他人に借りを作る意味をよく分かっているはずだが」

「もちろんだとも」

　と、朱音はうなずいた。

「あんたも、私らから知りたいことがあるんじゃないのかい？
ロード・エルメロイII世」

「…………」

　その通りだ。

　ここに来る前も、師匠は日本の魔術師と接触を持ちたいと話していた。多分それは、自分とエルゴを救うために。

　師匠が、目を閉じた。

　一度、深く呼吸してから、ゆっくりと瞼を開き、尋ねる。

「ひとつ確認させてほしい。単に異国の魔術師というだけなら、私と接触するほど警戒はしないでしょう。……だったら、あなたは誘拐した魔術師の組織について、見当がついているんじゃないですか」

「はは、当然聞いてくるな。もちろんその通りだ」

　それ以上勿体ぶらず、夜劫朱音は組織の名を告げた。

　自分と師匠も、知っている名前を。

「彷徨海バルトアンデルス」

4

　北の方に、凜とエルゴは歩いていった。

　賑やかだった秋葉原から、雰囲気はしんと沈んでいく。

　華やかな街並みは徐々に古き良き電気屋、パーツ屋といった趣に移り、さらに末広町のオフィス街へと変化していった。

「どう？」

「少しずつ、近づいてるような気がします」

「魔力の方向も合ってるわね」

　手元の魔力針を確認しつつ、凜が言う。

「こういうことも、予測してたんですか」

「予測じゃなくて、ただの準備よ。あなた、あちこちの魔術師に追われてるの、忘れてるんじゃないでしょうね？」

　凜の言っているのが、何のことかは明らかだ。

　アトラス院からはラティオ。

　山嶺法廷からはムシキ。

　そして、彷徨海バルトアンデルス。

　エルゴに神を喰らわせたという三人の魔術師である。第三の彷徨海の魔術師についてはほとんど情報がないが、エルゴと行動をともにする以上、近いうちに現れるだろうと凜は目していたのだった。

「リアクションって趣味に合わないもの。できるんなら、いつだって攻撃あるのみよ。不意打ちで先制攻撃できるなら最高でしょう？」

「凛らしい」

　正直な感想とともに、エルゴは微笑した。

　彼の記憶において最も付き合いの長いこの女性は、どこまでも現実的であった。魔術師なんていかにも浮世離れしてそうなのに、そんな印象はかけらもない。夢を本気で、真剣に見据えた者は、こうなるのかもしれなかった。

（先生に似ているのかも）

　と、エルゴは思う。

　才能がないと卑下しながら、まるで歩みを止める様子のないあの君主ロードは、生徒である凛とよく似通っていた。そう言えば、どちらも否定するかもしれないが。

「ここです」

　不思議な感覚に引かれるまま、エルゴはとある路地の前に立った。

　数歩入ったところで、凛が止まった。

「エルゴ」

　名前だけ言って、クイと顎を上下させる。

　それで伝わったらしく、エルゴが彼女の腰を抱くと、ふたりの身体が不自然に持ち上がった。伸ばした幻手でビルの縁を摑み、一気に上昇したのである。

　音もなく着地した屋上から、彼女たちは路地裏を覗き込んだ。

　ゴミ袋が雑然と置かれた近くに、いくつかの影が佇んでいた。

　三人は、黒スーツの男たちであった。

　いずれもサングラスをかけて、素顔を隠している。雰囲気からしても、まともな職業に就いているとは思われなかった。

　その三人が、おおよそ八歳かそこらの子どもを取り囲んでいるのだ。

こちらは、アニメのプリントがされたＴシャツと破れたジーンズだった。黒髪には一応櫛を通しているようだが、Ｔシャツに描かれたキャラクターは無残に汚れ、元の色も分からなくなっている。『強化』された凛の目には、黒服たちを睨みつけ、ぎゅっと唇を引き結んだ子どもの表情まで、はっきりと見えた。

　数十メートルの距離を超えて、黒服の声が聞こえた。

「お帰りくださいませ、アキラ様」

（アキラ様──?!）

　屋上のエルゴが、硬直する。

　それは、まさに自分たちが捜すように依頼された子どもの名前ではないか。

「凛さ──」

　呼びかけた時、

「嫌だ！」

　と、子どもが身をよじった。

　しかし、黒服たちの間をかいくぐることもできない。黒服のひとりが、子どもの手首をがっちりと摑んでいるのだった。

　それでも諦めず、子どもが黒服の腕に嚙みつこうとしたところで、不自然に倒れた。

　地面に組み伏せられたのだ。

「乱暴をしたくはありませんが、場合によっては痛い思いをしてもらってもかまわない、とも言われています。骨の一本や二本を折ったところで、あなたさまの素質が損なわれることはないでしょうが、どうぞそのお覚悟で」

　落ち着いた声は、鉄の冷たさを備えていた。

　必要となれば、眉一筋動かさずにやる、とエルゴは感じた。マラッカ海峡で海賊をしていたときにも似た人種と出会うことはあっ

たが、異国の都会でもそんな暴力と出くわすことがあるのだという事実に、軽い衝撃を受けてもいた。

「……止めないと」

「待って」

　エルゴが前に出かけたのを、凜が制止した。

　ほぼ同時に、路地裏へ背の高い影が落ちたのである。

「やれやれ。やっぱり仕事で定住してるとすぐにバレるな」

　屋上からだと、顔ははっきりと見えなかった。

　背が高い。

　服装からすると、バーテンダーらしい。

　ベストを肩にひっかけて、見下ろすように三人を眺めている。

「お前は」

「やっと仕事を見つけたところなんだよ。夕方までに仕込みを終わらせないと、店長がうるさくてさ。まあ、生活費を確保しておくのうっかりしてて、佐野さんに手持ちの現金あらかた渡しちゃったオレが悪いんだけど」

　苦笑いしつつ、バーテンダー風の青年が頭を掻く。

　そうしながら、ゆっくりと黒服たちに──いいや、子どもに近づいていく。あまりの躊躇のなさに一瞬硬直した黒服たちが、すぐに視線を戻した。

「若頭」

「……ああ」

　ひとつうなずいて、

「止まれ」

　と、若頭が命じた。

「アキラ様を拐かした魔術師については聞いている。だが、我らの当主からはなるべく危害を加えないように、とのことだ。ここで退けば見逃す」

「そいつは嬉しい。他人の気遣いが身にしみるねえ」

　しみじみと言って、しかし青年は止まらない。

　アキラと呼ばれた子どもへ触れる前に、黒服の三人が両手を前に出した。それは勢いよく打ち合わされ、清い音を撒き散らした。

　柏かしわ手で。

　単なる音の波が、魔力の衝撃に変化するのを、エルゴは感じた。

　一瞬、青年の背中が膨れ上がったのだ。

　風が身体を吹き抜けたように、ふわ、と元に戻った。

「人のことを『魔』だと判断したのか。日本の魔術ってのは乱暴だな」

「勘違いするな」

　と、黒服が言った。

「今のは警告に過ぎない。それと、これは夜劫の行ぎょうだ」

「ああ、そういえば『魔』の術だなんて言わないのか。もう信仰はしていなくても、接続しているのはアレだものな」

　陽気な青年と裏腹に、隠れたままの凛は表情を強張らせていた。

「……嘘」

「凛？」

　呟いた凛に、エルゴが視線だけを向ける。

「威力はともかく、あの術式は相手の体内で直接生じてるわ。共鳴みたいなものよ。相手の固有の波長に合わせる必要はあるけれど、うまくはまれば、体内で爆弾を炸裂させるのと一緒。ほとんどの霊的防御を無視して、骨も内臓もめちゃくちゃになるはず」

凛の形容は、黒服たちの術を適切に表現していた。

柏手とは、本来清らかな音をもって神を呼ばう行動だ。この場合の神とは、生きとし生けるものに宿る精オ気ドの別名でもあろう。だからこそ、内側を震わせる行為は、そのまま他人を爆殺する術式へ転用可能なのだと、凛は看破したのだ。

「時計塔の西洋魔術だと、あんな術式機能しない。ああ、だから日本の固有の術式なのね。日本の魔術は順番が違うもの。規模は著しく減衰していても、次元としては神代と同一。わたしたちにとってのイカサマが、この国における当たり前。きっと、逆もそうなんだろうけど」

凛の言葉に、エルゴはII世の言葉を思い出した。

いわく、時計塔を起点とした西洋魔術は、世界への詐術なのだという。

流派こそさまざまだが、基本的には魔力で魔術式を刻むことにより、一時的に世界の形を歪めたものが魔術らしい。世界を歪める深度はおおよそ呪文によって固定され、十小節以上━瞬間契約テンカウントと呼ばれる簡易儀式となれば、世界の秩序にも干渉しうる。ゆえに、世界の内側にもうひとつの世界をつくりだす固有結界と呼ばれる術式は、魔術の極みと呼ばれるのだとか。

しかし。

おそらく、夜劫の魔術は違うのだ。

『神代の魔術や、神の権能は、ただそのようにあるものだ』

『現代の魔術のような手順を必要としない。君の幻手は、神の権能に近いだろう』

かくあれかしアーメン。

古い聖句を、エルゴは思い出す。

光よあれ、と主が囁けば、そこに光は生まれた。エルゴにはきちんとした理屈はわからないが、夜劫は神代のように魔術を行使する。

「……なのに、あいつ」

　もう一度、柏手が鳴った。

　炸裂、という言葉がふさわしかっただろう。

　今度こそ、エルゴの肉体が同じ数だけ震え、それだけで終わった。

「耳に響くからやめてほしいんだよな」

　言葉通りに耳をさすって、青年は快活に笑った。

「お前……」

「密度の問題だよ。砂の城ならおもちゃの爆竹でも壊れるだろうけど、ガチガチに固めたコンクリはびくともしないだろ。こっちを魔性の類と判断するなら、それぐらいのことは考えとけよ」

　とん、と地面を蹴ったように思えた。

　明らかに常人の範疇にとどまらぬ──エルゴや、『強化』された凛の目で、やっと追える動き。それでも、ステップからのストレートは、手が霞んだとしか見えなかった。

　乾いた音が、三度した。

　顎を打ち抜かれたふたりが、わずかな時間差とともに倒れた。

　若頭と呼ばれた男だけは、かろうじて踏み堪えた。後ろに大きく跳びすさり、新たな術式を紡ぐため、中指と人差し指が剣印を結んだ。

「お、大したもんだ」

　バーテンダー風の青年が、ぐい、とシャツの袖をまくる。

　肌の表面に、何かが刻印されているのをエルゴは見た。

鍵に似ていた。

カチ、カチ、カチ、と歯を三度鳴らして、その刻印をなぞり、

「天てん地ち玄げん宗しゅう、万ばん気き本ほん根こん」

囁きが溢れた。

同時、刻印を滑らせた指の間から、手品のように黄色い霊符が現れたのだ。霊符はたちまち若頭の手や顔に張り付き、何枚も何枚も重なって、黄色いミイラのようにその体を縛り上げてしまった。

「急きゅう々きゅう如にょ律りつ令れい……と。オヤジにゃ悪いが、これが一番楽でね」

「思想魔術……！」

青年の魔術を、凛が看破した。

大陸の魔術の総称だと、エルゴも知っている。自分を襲ってきた山嶺法廷のムシキが使った嵐の魔術が、それに該当するらしかった。

だが、今みたいな霊符や、鍵のような刻印を見るのは初めてだ。

（……むしろ）

こちらが、一般的な思想魔術ということだろうか。

「るお！」

「よく我慢したな、お前」

駆け寄った子どもの頭を、ぐしゃぐしゃと青年が撫でた。

「……別に、るおが来なくても、全然平気だし！」

「ははは、そうだな。余計な手出しをしました、アキラお嬢様」

アキラと呼んだ子ども──少女に、青年が大袈裟に一礼する。

それから、

「で、今度はそっちだな」

　と、視線を上げた。

　屋上のこちらと、目があった。

　顔を見合わせてから、諦めた凛とエルゴが飛び降りる。

　エルゴはまっすぐに、凛は何度か途中のビルの壁を蹴って、路地裏に着地した。どちらも猫のように、音を立てなかった。

「この人は？」

　アキラが、一歩後ずさる。

　青年は少女を庇うように、少しだけ前に出た。

　年齢はエルゴよりは少し上、十八か九といったところだろう。

　屋上からはよく分からなかったが、美しい褐色の肌をしていた。彫りの深い顔立ちからは、見たこともない遠い国の、乾いた風の匂いを感じた。地平線まで見晴らせる草の海で、馬一頭だけを相棒に、どこまでも夕陽を追いかけていそうだった。

（……なんだろう）

　奇妙な既視感に、エルゴの胸が騒いだ。

　得体の知れない懐かしさで、息が詰まってしまいそうだった。

「夜劫の助っ人ってことでいいのかな？」

「待って」

　凛が、手をあげる。

「確かに、人伝てに夜劫の話は聞いたわ。アキラさんが攫われたから、解決してほしいってね。でも、わたしたちは依頼を受けるなんて決めてない」

「なるほど。それを信じろって？」

「助っ人だったら、さっき一緒に不意打ちしてたでしょ」

実際、事前に不意打ちで先制攻撃できるなら最高と言っていたわけだから、隣のエルゴとしてはうなずくしかない。

　るおと呼ばれた青年も苦笑した。

「ずいぶん現実的な考え方だな。この国より大陸に近い。あんた、この国が狭いタイプだろう」

「別に？　どこにいたって、人は国に縛られてたりなんかしてないわ。だって、国なんて形は地図でしか見たことないもの。もしも縛られてるとしたら、勝手に区切ってる考え方でしょう」

　平然と答えた凛に、

「いいな！」

　手を叩いて、るおは、エルゴの方を見やった。

「エルゴ、お前、面白い知り合いを持ったな！」

「……え」

　突然話の矛先を向けられて、赤毛の若者は面食らった。

　凛の視線にも、エルゴはかぶりを振るしかない。

　知らない。

　しかし、この懐かしさは。

　けしてありえないはずの既視感デジャ・ヴュは。

「うん、まあ忘れられてるだろうなあとは思ってたよ。いささか切ないが、そりゃあ当然ってもんだ。お前は三つも喰ってるんだからな」

　その数が何を表すかなど、問うまでもない。

　同時に、それを知る青年に対して、凛も緊張を漲みなぎらせた。

「ムシキで、終わると思ってたんだよ」

　と、青年が言う。

「アトラス院はなんとかするだろう。あそこの未来予測程度で終わるなら、そもそも神を喰らわせた意味がない。だけど、ムシキって仙人は下手な神よりもよっぽど厄介だ。本人が出張るのはまだ無理があるようだが、それでも乗り越えるのは難しいだろうって、オヤジには話してたんだよ」

　路地裏の空気は、どんどん冷えていくように思った。

　いかに奇怪な神秘と出くわしても、どこか他人事のような気持ちが、ここまでのエルゴにはあった。異国の旅人として、旅の途中で巡り会うさまざまな事物のひとつなのだと。

　だが、これは違う。

「るお？」

「ああ、悪い。ちょっと、こっちの都合でさ」

　見上げたアキラに、青年が釈明する。

　身構えた凛は、意識の数割を魔術回路に割きながら尋ねた。

「あなた、誰？」

「白若瓏バイ・ルォロン」

　名乗ってから、はにかむように付け加える。

「エルゴの親友で──そいつに神を喰らわせた、彷徨海の魔術師の弟子だよ」

＊

　どちらに反応すればいいか、エルゴには分からなかった。

　己の親友だという台詞。

　己に神を喰らわせた、彷徨海の魔術師の弟子だという言葉。

唐突につきつけられた情報に抗しきれず、軋みをあげるように、エルゴの唇から名前がこぼれた。

「白バイ……若瓏ルォロン……！」

「そうだよ。もう忘れないでくれると嬉しいけどな」

　柔らかく、若瓏ルォロンが笑う。

　銀幕でも飾れそうな、とびきりの笑みだった。その笑顔を見るために、奈落に落ちるのを厭わぬ者は何人もいるだろう。

「るおの、友達……？」

　これは、アキラが言った。

「もともとはね」

「わたしにも、詳しく聞かせてほしいわ」

　凛が、尋ねる。

「今使っていたのは大陸の思想魔術よね。なのに彷徨海なの？」

「ああ、そいつは認識不足だ。彷徨海は神代以前の魔術を志向しているだけで、西洋魔術でも思想魔術でも使う。アトラス院由来の錬金術はちょっと仕様が違うけどさ。そういうあんたは時計塔の魔術師だっけ。遠坂凛であってる？」

「よく下調べしてるのね」

　言いながら、倒れた夜劫の魔術師を、検分する。

　傷ついてはいるが、どうやら命に別状はなさそうだった。若瓏ルォロンにしてみれば、それだけ余裕のある相手だったんだろう。

「じゃあ、あなたもエルゴを狙っているわけ？」

「ああ、それなんだよな」

　青年が肩をすくめる。

「さっき言ったように、ムシキで詰むと思ってたんだよ。オレた

ち、彷徨海の順番は最後だったからさ。そこで終わらなかったって話は聞いたけど、こんなところで会うのは想定外だったわけ」

「じゃあ、どうするの？」

「いやあ」

　快活に、首の後ろを若瓏ルォロンが叩いたのだ。

「会ったら捕まえろ、とはオヤジに言われてるんだな、これが」

　若瓏ルォロンの体から、魔力が迸ほとばしった。

　一個人の精オ気ドとは到底思われぬ、凄絶な量の放射であった。こと魔術回路の生産量においては、凛も並ではない。メインの回路どころかサブの回路だって、そこらの魔術師を大きく上回るという自信がある。

　だというのに、目の前の相手は、凛にも底が見えなかった。

　それこそ、あの時のムシキを彷彿とさせるような。

（なら、先手を取るしか——！）

「エルゴ！」

「はい！」

　凛の指示に、エルゴの背から半透明の物体が湧き出た。

　幻手であった。

　エルゴの魔力を受けて、活性化した幻手が半透明に浮き上がって、若瓏ルォロンへと殺到したのである。

　しかし、そのことごとくが、眼前で弾かれた。

「まあ忘れてるんだろうがさ」

　少し寂しそうに、若瓏ルォロンが視線を落とす。

　その背中に、何か温かなものが広がっているのを、凛は感じた。エルゴの幻手とよく似た半透明の、まるで宗教画で見るような、幻

想的な器官であった。

「幻翼ファンイーっていうんだよ」

「君は……」

「だから、言ったろ？　お前の親友だって。オレらみたいなのが対等な友人になるには、それなりの条件が必要だろう」

　対等な、と若瓏ルォロンは言った。

　それはつまり、単なる心理的な条件ではなく、物理的な──あるいは神秘的な条件であったろうか。

「ああ、そうだ。一応確認しておくけどさ。アキラはこの人たちと夜劫に戻るつもりがあったりする？」

「嫌だ！」

「じゃあ仕方ない」

　少女の即答に、わざとらしく青年がうなずく。

「ちょっと痛い目にあうのは覚悟してくれよ、エルゴ」

　その背中で、半透明の翼がそそり立つ。

　彼の呼称通りならば、幻翼。

　しかし、その威力は翼というより魔剣に比するものであった。

　斜めに振り落とされた羽が、路地裏のビルの壁を大きく切り裂く。鉄筋コンクリートを紙よりもたやすく引き裂きながら、エルゴの幻手と激突し、蒼い魔力の火花を散らした。

「痛……ッ！」

　初めて、幻手に受けた苦痛で、エルゴの表情が歪んだ。

　それでも、エルゴは無理やりに地面を蹴った。翼を受け止めたのとは別の幻手を伸ばして、ビルの窓枠を摑み、狭い路地裏の上空から躍りかかったのだ。

「ああああああっ！」

　咆哮とともに、幻手が突き出された。

　凛が瞠目したのは、基本的に平和主義なエルゴが初手から全力であったことだ。海賊島でエルメロイII世とグレイが忍び込んできた時も、穏便に拘束から入った彼が、今回は凛の指示を飛び越え、しゃにむに若瓏ルォロンへ突進していた。

「エルゴ……?!」

　戦車の主砲じみたデタラメな一撃が、路地裏に颶ぐ風ふうを巻き起こす。

　現代の魔術師など足元にも及ばぬ、凄絶なる拳撃。ミクロサイズの嵐が突然現出したかのようだった。あまりの暴風に、倒れた夜劫の魔術師たちが吹き飛ばされるのではないか、とさえ凛は思った。

　そして、優美な天鵞絨びろうどのごとく、若瓏ルォロンを覆った半透明の幻翼は小揺るぎもしなかった。

　すぐ後ろで、アキラも無傷だった。

　ただ、少しだけ、ビックリした顔をしていた。

「ぁ……」

　と、エルゴが呻く。

　今ので頭が冷えて、少女の存在に気づいたらしかった。

「ああ、気にしなくていいぜ。なんせ、オレが守ってるんだ」

　若瓏ルォロンが微笑する。

「……いつも、ちょっぴり遅かったりするくせに」

「おっと、これは痛いところを突かれた」

　少女の指摘に眉を上げて、恭しく片手で抱き寄せる。

「ちょっと狭いな」

アキラを抱いたまま、若瓏ルォロンの幻翼が羽ばたいた。

そのまま、宙に浮いたのだ。

重力が絶えたかのような、天使を思わせる飛翔。褐色の肌の天使が、路地裏の中空へと舞い上がり、エルゴと凛を見つめる。

いや、凛はその場にはいなかった。

「なめないでよ、彷徨海！」

エルゴの幻手によって颶風が巻き起こされた直後、彼女はすでに次の攻撃態勢に移っていたのだ。

ギリギリまで体勢を低くして、若瓏ルォロンの脇を抜けて、背後へと。

「Anfangセット!」

容赦なく、若瓏ルォロンの背中へ叩きつけられるガンド。

それは北欧の呪い。現代でも、人を指さすことは場合によって無礼とされるが、ある種の地域では魔女の業とされた。凛の魔力によって半ば物質化した呪いの弾丸は、一息に十数発を超えた。

振り向きざま、青年が幻翼で弾く。

同時、ガンドは目の前で炸裂したのだ。

「ッ?!」

さしもの若瓏ルォロンも、たじろいだ。

エルゴの一撃と今のガンドを双方目くらましに使ったのだと、悟るまでコンマ数秒。

その一瞬で路地裏の壁を蹴り、若瓏ルォロンの頭上に跳躍した凛の手に、二粒の宝石が煌めいていた。新体操のごとく宙返りしつつ、こちらを見下ろす美しいエキゾチックブルーの瞳に、苦笑した若瓏ルォロンが映っていた。

「……大したもんだな、時計塔」

「その子は傷つけないであげる」

　さすが海賊の首魁としか言いようのない、悪い笑みを浮かべて、指に挟んだ宝石が心臓のごとく魔力を脈動させた。

「Neun九番! Acht八番! DornendesSiegels封印の茨!」

　ゼロ距離から、新たな魔術が起動したのだ。

　たちまち、紅玉ルビーと蒼玉サファイアは二色の茨となり、若瓏ルォロンの体を取り囲んだ。

「事情はありそうだけど、そういうのは動けなくなった後に聞かせてもらうから！」

「西洋魔術師ってのは現実的だねえ。対物理、対魔力、双方の拘束か」

　若瓏が翼を動かすと、ジジ……ッと稲妻が走った。

　浮遊しているためには、必ずしも翼を動かし続ける必要がないようだ。着地した凛が見上げても、一向に若瓏ルォロンたちが落下してくる気配はなかった。

（……魔力を封じてるはずなのに）

　中空を仰いだまま、凛が唾を飲み込む。

　今の宝石魔術は、エルゴを追ってくるだろう魔術師に対抗するため、日本到着前から構築していたものである。手持ちの宝石でもかなりのお気に入りを用いており、蒼玉サファイアの茨によって、内側の魔術師から魔力を搾り取るという代物だった。搾り取った魔力は、そのまま紅玉ルビーの拘束術式に転用されるから、地力でこちらを上回る相手だろうが、その相手自身の魔力を用いて無力化できる……というのが、凛の狙いであった。

「つまりあれか。アトラス院とムシキの双方に対策を取ったわけだな。この短期間で、新しい術式ごとつくりあげるってのは、お前相当真面目だろ」

　幻想の世界のごとく、青年は浮遊したままだ。

「ああ、アキラを傷つけないと言ってくれたのには、礼をしないとな」

　ギチリ、と音がした。

　凛の魔術には、そんな音がする仕掛けはない。

「冗談でしょ……」

「よくできてるよ、ホント。現代の魔術師も侮れない。オレが対処できてるのは、つまるところ性質の問題だから」

　拘束した蒼と赤の茨が、双方どす黒く染まっていく。

　腐食しているのだと、嫌でも分からされた。だが、そんなことはありえない。彼女が作り上げた茨は、魔術による変形だ。世界を誤魔化して、一時的に現出させたものに過ぎず、腐食するような概念は与えていない。

（幻手と、幻翼……）

　エルゴの幻手は、エルメロイII世がつけた仮の名である。

　しかし、ある種の命名は物事の本質をつく。まして、多くの魔術師を解体し、略奪公とまで呼ばれたエルメロイII世となれば、それ以上の結果もありえるだろう。

　だから、連想してしまう。

（……もしも）

　もしも、若瓏ルォロンの幻翼が、本当にエルゴの幻手と近似の能力だとすれば……エルゴの幻手に術式を破壊する力があったように、若瓏ルォロンの幻翼にも。

　いいや。

　もっと、根本的な問題である。

　本当に似通った能力を持っているのだとしたら、エルゴと同じく、この若瓏ルォロンという青年も、神を――

「――ッ！」

恐怖より先に、凛の手が新たな宝石を摑み取った。

　しかし、それよりも早く、魔術の茨が砕け散る。腐った破片は、夏の路地裏で無残に溶け落ちて、地表に触れる前に儚く消滅した。

「待て！」

　エルゴが叫んだ。

　一番付き合いの長い凛ですら、ほとんど聞いたことのない、強い声音だった。

　幻手を伸ばし、若瓏ルォロンの胴体を握りしめる。

「いいね。そのまま摑んでろよ」

　若瓏ルォロンが囁き、アキラをより強く抱き寄せると、ロケットのような勢いで、三人は路地裏の上空へと吹き飛んだ。あまりの速度に、『強化』された凛の動体視力でも追いつかぬほどだった。

　見上げれば、青空に浮かんだ三人の姿は、早くも拳大ほどとなっていた。

「……なによ、あのインチキ。サーヴァント級じゃない！」

　茫然としたのも、数秒。

　人が集まるのが少しでも遅れるように、周囲へ人払いの術式を施す。倒れたままの夜劫の魔術師たちはひとまず無視。情報は欲しいが、これ以上状況が複雑化したら、手に負えなくなる。

　焦りを嚙み殺しながら、凛は携帯端末を取り出した。

✦第三章✦

1

「……何？」

　携帯電話を握ったまま、師匠が表情を変えた。

　夜劫の館だった。

　当主である夜劫朱音と話している最中に、師匠の胸元で携帯電話が鳴ったのだ。最初師匠は無視していたが、朱音から取るように促され、その場で耳にあてたものである。

「ミズ夜劫」

　通話を切らず、師匠が顔を上げる。

「どうされたのかな？」

「私の生徒が、彷徨海の魔術師と交戦中らしい。攫われた夜劫アキラも一緒だと」

「…………ッ！」

　自分は、言葉を失った。

　蠟燭に照らされた婦人の顔も、表情を硬くしていた。

　彷徨海の名は、さきほど朱音自身の口から出たばかりだったからだ。よもやこのタイミングで、凛たちが接触してしまうとはどんな偶然か。

（……本当に？）

　本当に、それは偶然なのだろうか、と胸の中で疑問の泡が弾けた。

　しばしば、時計塔では魔術師に偶然などありえないと言われる。人智の範囲でたまたまに見えても、結局は砂金を篩ふるいにかける

ようなもので、必然の流れを持っている。だからこそ我々は根源に辿り着かねばならないのだと。

　そうした講師たちの発言を、自分は半分も理解できなかったが、魔術師の近くでは、信じがたい確率の出来事がしばしば起こりえる……ということは、身にしみて知っている。アトラス院の錬金術師たちによる未来予測も、そうした異常な偶然を下敷きにしているのではないだろうか。

「場所は末広町」

　と、師匠が言う。

「サーヴァント──いや、境界記録帯ゴーストライナー並の相手だと、凛は言っている。夜劫の魔術師がすでに倒されたとのことだ」

　婦人が手を叩いた。

　すぐさま背後の襖が開き、当主の息子──右手をギプスで固めた夜劫雪信が現れた。

「お呼びでしょうか」

「話は聞いていたな。今日、末広町周辺を捜していた者はいるか」

「斑鳩たちです。今は三人一組で行動させています」

「三人で合っているそうだ」

　確認をした師匠がうなずく。

　事態は、まさに風雲急を告げていた。

＊

　地表が、瞬く間に流れていった。

　道ゆく人々も、道路に密集した車も、ビルから垂らされた広告幕も、何もかもが視界のパレットで混色され、過ぎ去っていく。

秋葉原。

　高層ビル・秋葉原ＵＤＸの上空を抜けて、若瓏ルォロンにしがみついたままのエルゴは、風圧で顔を歪めていた。

（どこまで）

　どこまで、飛ぶつもりなのか。

　幻手は若瓏ルォロンの体をホールドしているが、どこまで耐え切れるかは怪しい。

　かといって、この状況で若瓏ルォロンを攻撃すれば、あの夜劫アキラという少女まで巻き添えになってしまうだろう。それはエルゴの本意ではなかった。魔術師の跋ばっ扈こする世界では、致命的な甘さかもしれなかったが、己より幼い相手を傷つけることなど彼には考えがたかった。

　しかし。

　──『会ったら捕まえろ、とはオヤジに言われてるんだな、これが』

　若瓏ルォロンの言葉通りなら、この先は彷徨海の魔術師が待ち構えている可能性が高い。

　なされるがまま、とはいかなかった。

（何か……）

　考える刹那にも速度はますます上がり、信じがたい領域に突入する。

　シンガポールからの飛行機に乗ったとき、エルメロイII世は、現代の魔術師では飛ぶのは難しいんだと話していた。ちょっとした浮遊ぐらいならいざ知らず、いくつかの例外を除けば、単独で長距離を飛ぶことはほぼ不可能である。その例外にしたところで、自由な飛行にはまるでほど遠いのだと、何かに憧れるような──かつてII世

自身はそんな飛行を味わったことがあるのだ、とでも言いたげな口調で話していた。

　飛行機の小さな窓から、空を見つめるII世は、事情に詳しくないエルゴですら胸を締めつけられるような横顔をしていたのだった。

　II世の言っていた自由な飛行とは、まさしくこれではないか。

　現代の魔術師には不可能だという、どこまでだって行けそうな飛翔。

　加速度Ｇに、揺さぶられる。

　それでも必死に、眼を見開く。

　視界の隅に、建物が入った。

　そこからの動きは、まともに思考したものではなかった。

　ただ、伸ばせるだけ幻手を伸ばしたのだ。六本の幻手のうち、四本は若瓏ルォロンを捕らえたまま、二本は建物の屋上を摑み、精一杯に引っ張る。

　凄まじい力が、幻手にかかった。

　これまでも、さまざまな攻撃に、エルゴの幻手は耐えてきた。骨の巨人の打撃にも、錬金術師による斬撃にも、はたまた凛との特訓による魔術にも。

　だが、時速何百キロもの高速で引っ張られるのはどうか。

　ブチリ、と何かがちぎれる音が聞こえた。

　それでも、エルゴは耐えた。

　ブチ、ブチ、と音が連続する。

　背中から走る凄絶な痛みを堪え、あらん限りの力を幻手に込める。

　突然、飛翔が鈍ったように思えた。

「やるなあ、エルゴ」

無理に、若瓏ルォロンは逆らわなかったのだ。

ぐるりと飛翔の方向が半回転し、間を外されたエルゴの体が上方にブレる。それでも双方の幻手は握りしめたままだった。ひたすらに、建物の方角へと若瓏ルォロンを誘導しながら、ぎりぎりでそちらの幻手だけを離す。

建物を摑んだ方の幻手をロープのようにして、ぐいんとエルゴがスイングした。

振り子の要領で、ベクトルを上昇へと変換する。

頂点で体をひねり、建物の屋上へと墜落した。

空いた幻手で身を守りはしたものの、衝撃は内臓まで突き抜けた。

わずかに遅れて、幻翼を広げた若瓏ルォロンは、同じ建物の屋上へと滑空してきた。

「大丈夫かい」

「……うん、びっくりした」

囁きかけられたアキラが、そっと腕から降ろされる。

少女の小さな体にも相応の加速度Ｇがかかっていたはずなのだが、どうやら若瓏ルォロンに抱きかかえられていた間は、現実ならざる法則が働いたらしい。

「るおは、るおなんだよね？」

「は？　何言ってんだ。他の誰に見えるんだっつの」

見上げた少女の問いに、若瓏ルォロンが眉をひそめる。

こんな状況で、エルゴはなんとなくほっとしてしまった。

まだ、先ほどの引っ張りによるダメージも残ったままだが、奥歯を噛みしめ、ゆっくりと立ち上がる。

ごおごおと、強い風が吹いていた。

高い。

見下ろせば、西側に広い緑の空間が開けていた。

公園ではない。皇居とよばれる、この国の象徴がおわすところだというのは、エルゴも知っている。だが、空港で地図を見た記憶からすると、先ほどの末広町から数キロはあったはずだ。

わずか二、三十秒ほどの飛翔で、ここまで運ばれたのか。

グラントウキョウ・ノースタワー。

地上四十三階。高さは二百メートルを超える、千代田区最大を目指して建設中のビルである。

まだオープンはしていない。しかし、工事はおおよそ終わっていて、今は内装を仕上げつつ、定期的な検査をしている段階だった。

服の汚れを払って、エルゴが口を開く。

「凛はよく神秘は隠匿しなきゃいけないって言ってたけど、彷徨海は違うの？」

「あ、いや、そこのところは変わらない。だから見つかってないといいなあ。見つかってたら、オヤジにドヤされるんだよな。いや、あの速度で空を飛んだんだから、大丈夫だとは思うけど」

いささか自信がなさそうに、若瓏ルォロンが頬を掻いた。

それから、

「親友だとか、言ったよね」

と、エルゴが口にする。

「君は、僕の何を知っているの」

「なにもかも……というのは、もちろん嘘だ」

悪戯っぽく、褐色の肌の青年が舌先を出した。

「でも、多分エルゴよりは覚えてる。どうせ、ほとんど忘れてるんだろ？」

「先生は、記憶飽和だって言ってた」

「へえ、うまいこと言う。確かに記憶喪失とはちょっと違う」

　感心した風に、若瓏ルォロンが顎を撫でる。

「うん、エルメロイII世に興味が湧いてきた。正直、現代魔術科なんてどうでもいいと思っていたんだけど、さすがに時計塔の君主ロードはあなどれないな」

　彷徨海は、神代以前の魔術を志向している、と若瓏ルォロンは言っていた。

　だから、現代魔術なんていう新参者は、最初から視界にも入っていなかったのか。

「あ、一応誤解ないように言っておくと、オレの思想魔術は現代よりだよ。彷徨海といっても弟子でしかないからね」

「君は、僕の何を知ってる？」

　もう一度、同じことをエルゴが訊いた。

　若瓏ルォロンは、かすかに目を細めてから口を開いた。

「歌うのが好き？」

「多分」

　海賊島では、よくラナたちと歌っていた。怖い時、悲しい時、嬉しい時。歌だけはいつも一緒だった。

「じゃあ、そこは変わらないな。昔からよく歌ってたよ、お前。オレは付き合わなかったけどさ」

「付き合わなかったのに親友？」

「付き合ってたら、友達になるってわけじゃないだろ」

　それはそうだ。

　若瓏ルォロンがはあーと深くため息をつき、額のあたりを押さえた。

「つうか、お前、失踪癖まで昔のままだよ。しょっちゅう大事なときにいなくなって、オレが何回捜しに行ったと思ってやがる。そのたび木の上だとか山の洞窟だとか、妙なところにばかり隠れてるものだから、オレが捜すのが当たり前みたいになっちまった」

　なんだかふてくされたように、褐色の肌の青年が唇を尖らせる。

　エルゴの知らない記憶。

　飽和した情報。

　だけど、

「だって、ルオなら、すぐに見つけてくれるから」

　そんな返事が喉から滑り出てしまって、自分でびっくりした。

「あなたも、るおって呼んでた？」

　近くで聞いていたアキラも、ぱちぱちと瞬きした。

　ただ、取り消すこともできなかった。

　目の前でくしゃくしゃと笑った褐色の顔が、あまりにも嬉しそうだったからだ。

「少しは、思い出したか？」

「……分からない」

　と、かぶりを振る。

「僕は、自分の名前がエルゴかどうかさえ、自信がなかったから」

「いわゆる人名とは少し違うかもな。オレらはそう呼んでたけど、お前のはある意味で実験名に近い」

「実験名？」

　それに、若瓏ルォロンは答えなかった。

　代わりに、

「飢えはどうだ？」

　と、尋ねたのだ。

　エルゴは、硬直してしまった。

「時々、腹が減ってたまらなくなるだろ。寝てる時でも、食事の最中でも関係ない。わけがわからなくなるぐらいの飢えだ。目の前が真っ黒に染まって、匂いもろくに分からなくなって、腹の底だけが炎にあぶられている感覚だ。肉を食おうが果実を食おうが満たされない。あえて言えば、柘榴ざくろだけはマシなぐらい。それでも、溶岩にほんの一滴水を垂らされた程度のことで、すぐさまもっとひどい飢えに苛まれる」

　ゾクゾク、と体の内側をまさぐられるような気持ちがした。

　初対面の──少なくとも、エルゴからはそうとしか思えなかった相手が、エルゴにとって最もおぞましい秘密を知っている。あのときのどうしようもない焦燥を、つぶさに語ってくる。

「今のままだと、お前は死ぬ。正確に言えば、お前という人格が押し潰される。エルメロイII世も同じことを言わなかったか？」

「……言われた」

　記憶飽和は、エルゴの宿命だと。

　だから、生き残るために、若者はともに旅をすることにした。

　──『君の神を還す方法を、見つけるために』

　エルゴの神を還すのだと、エルメロイII世は言った。そのためには、エルゴの喰らった、残る二柱の神も明らかにする必要があると。

　そして、今。

「来い、エルゴ」

と、若瓏ルォロンが誘いをかける。

ひどく真摯な物言いだった。願いが叶えられないだろうと予測しながら、それでも口にせずにいられない切なさがこもっていた。

「お前の体について、オレたちはほかの誰よりも詳しい。現代魔術科の君主ロードもあなどれないが、それでもどちらが有利かは考えれば分かるはずだ。お前に神を喰らわせたのはオレたちで、エルメロイII世は必死にそれを解析してるだけなんだから」

「…………」

若者は、黙り込んだ。

そっと唇に手を当てた。

さっき、自然に「ルオ」と呼んでしまった感覚が、まだそこに残っていた。知らない名前。温かな名前。エルゴという言葉以外のあらゆる記憶を失っていた己が、初めて取り戻したかもしれない過去。

褐色の肌の青年は、こちらの言葉をじっと待っていた。

いくらだって待ってくれるだろうと、なぜかそれだけは確信できた。

ひょっとしたら、昔もそうだったのかもしれない。先ほど話していたように、何度も己が姿をくらまし、この青年が根気強く見つけ出してくれたのかもしれない。愛称と紐づいた感情は、あまりに正体不明で、彼の胸を掻き乱した。

しばらくしてから、エルゴは口を開いた。

「全部話して折り合えるんだったら、さっきの君は凛に打ち明けてただろう」

ゆっくりと、噛んで含めるように、言う。

「つまり、凛や先生に、そして今の僕に知られたらまずいことがある」

「お前、昔からそういう勘はいいよな」

小さく、チェッと若瓏ルォロンが舌打ちした。

「それでも、さっきの話は嘘じゃない。お前が生き残りたいなら、オレたちにつくべきだ」

「……え」

　不意に、アキラが息を止める。

　ふたりの間に、陽炎が立ったように思えたのだ。

　夏の風物詩ともいえる現象であった。穏やかに始まったふたりの会話が進むほど、空気中に別の成分が混じり、変質していく。

「その子は、どうして？」

　と、エルゴが問うた。

「先生は、僕が喰らった神を還す必要があると言っていた。そのために日本に渡らなきゃいけないって」

　言う間にも、空気の変質は進んでいく。

　陽炎と紛ったのは、肌を刺す緊張感によるものだった。

　エルゴも若瓏ルォロンも、表面的には変わらない。殺意や敵意を剝き出しにしているわけでもない。なのに、互いに内包した何かは、到底一個人の器にはおさまらず、周囲を侵食している。その乖離による緊張感を、アキラの感覚が陽炎のごとく認識してしまったのだ。

　彼女が魔術師ならば、魔力の仕業であると看破しただろう。

　ギシ、ギシ、と空気が軋む。

　ギシ、ギシ。

　ギシ、ギシ。

　軋む、軋む。

　歪む、歪む。

どろどろに、風景さえも歪んでいく。

「その子は、神を還すのと関係してるんじゃないの？」

「してるよ」

　平然と、若瓏ルォロンが答える。

　隠せないと判断したのだろうか。もしくは、隠すほどのことでもないと、考えたのだろうか。

　限界まで、歪みは達していた。

　本来、魔術式を与えられなければ、まともに作用しない魔力が、このふたりに限っては奇妙な相乗効果を発揮して、現実を変革しつつある。真夏の空気はまるで劇薬を投げ込まれたかのように、周辺を蝕んでいた。

「君も、神を喰っ……」

　言いかけたときだった。

　エルゴの身体が、震えた。

（喰いたい）

　そんな声が、身の裡うちでこだましたのだ。

　意識の色が、塗り替わる。

　そうとしか表現できない、壮絶な欲求を孕んだ声だった。

　たまらずに、膝をつく。ガクガクと痙攣する。震えは筋肉ではなく内臓からだった。胃も肺も肝臓も心臓もすべてが震えているようだった。胃から喉元へと灼熱の感覚が貫き、何度もえずいたが、ただ大量の唾液がこぼれただけだった。

「エルゴ？」

「……だ、め」

「お前、まさか」

　爛と輝いた瞳は、若瓏ルォロンに向いていなかった。

　夜劫アキラを、捉えていた。

　同時、少女へと放たれる六本の幻手。

「ちっ！」

　横っ飛びに跳ねた若瓏ルォロンが、アキラの体を抱いて、屋上を転がった。

　幻手が、空を切った。

「若瓏ルォロン？」

「悪い、アキラ」

　少女に、若瓏ルォロンが謝る。

「こうなる前に、連れて行きたかったんだけどな……」

　立ち上がった青年の前で、エルゴはかすかに首を傾げていた。

　手をついたまま、瞳の焦点は合っていない。純粋な表情は無惨に歪み、獣のごとく歯を何度も嚙み合わせている。唇の端からは白い泡がこぼれていた。

　明らかに、先ほどまでの彼ではなかった。

（喰いたい）

　真紅の衝動だけが、若者の内部を埋め尽くしている。

　それは、厄災のような。

　それは、疫病のような。

　それは、地獄のような。

以前グレイに抱いたのと、同じ衝動だった。

しかし、あのときはまだ堪えられた。一歩も動けなくなるほどの強烈な欲望に身を焦がされはしたが、即座に幻手で襲いかかることはなかった。

（喰いたい）

理由は、分かる。

目の前で動く相手が、エルゴにはもはやヒトとは見えていなかった。

彼の認識では、こうだ。

ご馳走が、ふたつもある。

そして、自分を止める人間は誰もいない。II世も、グレイも、凛も、ラナも。人のつながりというものが、いかに自分を不条理に縛っていたか、やっとエルゴは思い知った。

「がぁッ」

せめて、その欲望をずらそうとした。

自分の腕に嚙みつく。

血が、溢れる。

その香りが、甘い。その舌触りが、とろけるよう。

何もかもに、陶然とエルゴの精神こころは酔いしれた。このためならば、何もかもを捨てられると思った。思ってしまった自分に絶望しながら、若者は自分の血を貪った。

「エルゴ……さん……」

アキラが、若瓏ルォロンの袖をぎゅっと摑む。

ああ、その姿はまるで吸血鬼ではないか。

伝説に残る悪鬼の有様。先ほどまで若瓏ルォロンと向かい合っていた赤毛の若者は、対立こそしていても、純朴で人好きのする印象

だった。だからこそ、今の姿はより無惨であった。

　ジュルジュル、と異様な音がした。

　血を吸い上げる音だった。

　それが止まったとき、瞳がぎょろりとこちらを向いた。

「いくらお前が我慢強くても、自分の血肉だけで終わるわきゃねえよな」

　哀しそうに、若瓏ルォロンが言う。

　その背中に、幻翼が再び広がる。

　零れた羽は落葉のごとき優雅さと見えたが、それは大いなる間違いであった。

　くいと羽が方向を変えて、エルゴへと突進する。掠めた肩口が一瞬遅れて大きく裂けた。剣術の達人が業物を振るえば、切られたものはしばしの間気づかぬというが、まさしくその逸話に匹敵する切れ味だった。

　今度は、一斉に数十の妖羽が乱れ飛ぶ。

　エルゴの背から、三対六本の幻手が迎え撃った。

　激突した端から、おびただしい魔力が散る。空中に不可視の波紋がいくつも広がり、花火にも似て儚く消えていく。その一輪ずつに込められた魔力量が、まともな魔術師ならば卒倒するほどの域に達していた。

　一見は、五分と見えた。

　その間にも、エルゴの内側で、おぞましい欲望が膨れ上がっていく。

（喰いたい）

　喰いたい。

　喰いたい。喰いたい。喰いたい。

喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい喰いたい――！

　もはや、その声こそがエルゴだった。

　叫びこそが、咆哮こそが、欲望こそが、若者のすべてであった。

　それでもなお抵抗しようとしたとき、妖羽が脇腹をかすめた。おびただしい血が溢れ、激痛とともにエルゴが空を仰いだ。

「あああああッ！」

　我が身を抱いた若者へ、残った妖羽が襲いかかり――突如、烈風が巻き起こった。

「おいおいおい」

　魔力を孕んだ風が、若瓏ルォロンの妖羽を蹴散らしたのである。

　そして風の中心地点で、六本の幻手が、エルゴ本来の腕へと重なっていく。

「お前、それは……」

　若瓏ルォロンが、息を止める。

　持ち上がったエルゴの目は、火眼金睛に燃えていた。

　唇が、あの名を口ずさむ。

「神核装塡・斉天大聖」

　――装塡／神という名の弾丸。

2

　地上を、凛は走っていた。

　パルクールの要領で、目立たぬよう、おもに路地裏を選んで駆けている。『強化』の魔術がかかった彼女には、オリンピックの金メダリストですら追いつけない。

（遅すぎる！）

　もしも、これがかつての聖杯戦争だったなら、契約したサーヴァントが凛を抱きかかえてビルからビルへと飛び移りさえしただろうに。

（……そんなの、無駄な考えだけど）

　つい連想してしまった赤い弓兵アーチャーの姿を脳裏から追いやり、彼女は手のひらを見やる。

　そこに、魔力針が握られていた。

　エルゴに持たせた宝石が、ある種の発信器となっているのだ。

　若瓏ルォロンと名乗った青年がどこまで飛んだかは定かでないが、この魔力針があれば、東京内であれば見失わない程度の自信はあった。

　なのに、彼女は目を見張ったのだ。

　針が、ぐるぐると回っている。

　ありえない現象であった。

　二度ほど瞬きした時、路地裏から垣間見えた何人かの市民が立ち止まり、興味深げに視線を持ち上げた。

「なんだあれ？」

ひそひそと聞こえた囁きに、凛も空を仰ぐ。

　真夏の空──ギラギラと輝く太陽を覆っていた雲に、異様な空白が生まれたのだ。

「ちょ、ちょっと何やってるのよ！」

　神秘の隠匿どころではない。

　いくら時計塔の目が届かない極東だからって、これはやりすぎだ。異常気象などで済めばいいが、目端の利く者が見つけた場合、一気に状況が悪化する可能性もある。ただでさえ情報化社会となった現代は、魔術師にとって致命的な落とし穴が多すぎるのだが、これは心臓を直に握られたに等しい非常事態であった。

「バッカじゃないの、彷徨海！」

　小さく叫んで、凛は地面を蹴る。

　空白の真下──建設途中のグラントウキョウ・ノースタワーへと。

＊

　海に、似ていた。

　広く、遠く、どこまでも見渡せる。

　ほとんど無限とも思える風景の──すべてが赤かった。

　上そらも、下うみも、ただ一色だ。何もかもを燃やし尽くす、憤怒と激情。その場にいるだけで、まるごと蒸発してしまいそうな赤い海面に、エルゴは立っていた。

　波の代わりに、炎の渦がうねる。

　飛沫の代わりに、火の粉が跳ねる。

　そんな燃える海に突き立った柱の上で、とあるヒトガタが叫んでいた。

「……孫行者」

　と、エルゴが呻く。

　あの時、自分を穏やかに諭してくれた猿形の神は、今荒れ狂っていた。

　これこそ本来の姿である、とでも言うかのように。いや、実際、孫行者の伝説はそうではなかったか。天竺への旅の最後には闘戦勝仏となりおおせたが、とりわけ三蔵法師に出会うまでの孫行者──孫悟空は、天界すべてを相手取っても引かぬほどの大妖魔であった。

「孫行者！」

　エルゴの叫びさえ、聞こえぬようだった。

　咆哮に合わせて、炎はなお猛り、赤い海は激しく渦巻く。エルゴもその中に呑み込まれた。途方もない灼熱に魂までも焼かれ、若者の意識は途切れた。

＊

　空に──雲に、異様な空白が生まれた。

　まるで、透明な巨人の手が、屹立したかのようだった。

　自分の唇から、己の意思を無視して流れる声を、エルゴは聞いた。

「神核展開・孫行者」

　──展開／周辺部位バレルの置換。

　エルゴの腕が、置き換わっていく。神という情報だんがんを装塡されて、そのように肉体うつわも変換される。エルゴの記憶がそうであるように、圧倒的な情報が、他のすべてを塗りつぶしてしまう。

　それだけの質量を埋めるべく、大マ源ナも精オ気ドも、ありった

けの魔力が周辺からこそぎとられていく。

　若瓏ルォロンの幻翼から降り注いだ妖羽さえも、ことごとく分解した。

「冗談じゃねえぞ、おい。今度はこっちの密度が足りないのかよ」

　さすがの青年の声にも、焦りが混じっていた。

　アキラを抱いて、後ろに大きく飛びのきながら、あらん限りの妖羽を放つ。数十の妖羽が渦巻き、竜巻となってエルゴへと襲いかかった。

　そして、彼は呟く。

「神殻纏繞・如意金箍棒」

*

　━纏繞/我が手は神を象る。

*

　純白の巨大な双腕を、エルゴは携えていた。

　大蛇のごとき妖羽の急襲に、その腕を無造作に振る。

　あたかも、時間が止まったかのように見えた。神腕が振られた周辺で、幻翼から放たれた妖羽のすべてが、ぴたりと停滞したのである。

「空間をつきかためる特性か！」

　神仏に至った妖猿・孫悟空の宝具━如意金箍棒の権能であろう。知名度では間違いなく世界屈指の宝具が、もともとは海の底を突き

固めるのに使われた品だと、若瓏ルォロンも当然知っていた。

　つまりは回避不能。

　絶大なる魔力を考えれば、防御も事実上不可能。

　十分な距離をとる以外の対処が皆無の、イカサマとしか言いようがない特質。

　いや、その距離さえ、赤毛の若者は一瞬で無に帰する。

　火眼金睛の放つ輝きが、真夏の昼になお焼き付く、赤い直線を引いた。

　十数メートルをたった一歩で踏み込み、飛び退いた若瓏ルォロンへと肉薄する。振りかぶられた神腕は、もはや必滅の領域にあった。幻翼を折りたたみ、腕の中のアキラだけでも庇わんと若瓏ルォロンが魔力を振り絞る。

「エルゴ！」

　叫びは、巨大な拳の表面で砕けた。

　ほんの数センチほどの近距離で、神腕が停止していたのだ。

「るお」

　呻くような声に、若瓏ルォロンはその意味を知った。

　抱いたままのアキラの周囲から、黒い縄が生えていた。

　その黒い縄が、つかの間神腕を拘束していたのだ。

　だが、その程度で止まる神腕ではないはずだ。アキラに潜むモノを、若瓏ルォロンは知っているが、エルゴの神腕ならば遥かに凌駕する。でなければ、アトラス院、山嶺法廷、彷徨海という名だたる組織の魔術師が、一堂に会することもなかっただろう。

「ぎっ！」

　奇妙な声が、エルゴの口からこぼれた。

「ぎっ、いっ！」

また、こぼれた。

ガクガクと、前にのめった身体が痙攣する。

凄まじい熱が、その全身から放射されていた。

首を伝った汗がすぐさま蒸発し、ジュウと音を立てる。

合一されたはずの神腕から、小さな幻手が生えた。胎児のように未熟な手であった。ちいちいと鳴くような、泣くような、囀るような音が聞こえていた。そんな手が生まれては消えて、消えては生まれ、神腕は小刻みに震えた。

「ああ……苦しいのか、エルゴ」

若瓏ルォロンが苦笑する。

「喰いたいだろう」

そっとアキラをおろし、後ろへとやる。

「……るお」

「いいから、離れろ」

エルゴから目を離さず、若瓏ルォロンが言う。

「ごおっ」

人のものとは思えない呼気が、エルゴの喉から溢れた。

獣の咆哮であった。純白の双腕が、みるみるうちに禍々しい真紅へと染まっていく。エルゴの内側の世界に応じて、表象たる神腕も、変じざるを得なかった。

「オレも、お前が喰いたい。昔も同じこと言ったんだが、どうせ覚えてねえな」

打ち明ける若瓏ルォロンの横顔は、どこか幼く見えた。

同じことを言ったという、その頃の年齢かもしれなかった。

もう一度、真紅の神腕が振りかぶられる。

引き絞られた弓に似ていた。

極限まで魔力を溜め込み、拳が一気に解き放たれる。

粉砕される若瓏ルォロンの姿を、後退したアキラは思い浮かべた。人間どころか、堅牢な車両や建築物でも破壊するだけの威力が、拳にはこもっていた。

ぐるり、とその拳が横に逸らされたのだ。

化か勁けい、と呼ばれる中国拳法の技術であった。

　八卦掌・葉底蔵華。凄まじい速度の拳に、若瓏ルォロンが手の甲をあてて、くるりと返しただけで、そのベクトルを変換せしめたのである。

（やっぱり、空間固定の特性は停止したか！）

　考えながら、膝を抜く。

　沈む重心移動を利用して、背中へと回り込んだ若瓏ルォロンが小さく囁いた。

「思想鍵紋、接続」

　術式の駆動とともに、軽くひねった右足を、地面につく。

　足の裏から脛、脛から太もも、太ももから腰へと伝達する力を増幅させていった。いわゆる発はっ勁けいの要領で、脊髄を走らせた魔力を捻じり、螺旋状に絞り上げる。鍵紋から接続した術式を稼働させつつ、八卦掌の身体運用をそのまま魔術の構成要素と成した。

　狙うは、神腕の核。

　そこに術式を打ち込む必要があった。

「緊急用に、オヤジに渡された術式でな。どうなっても恨むなよ！」

　同時、反転したエルゴの神腕が、拳を開く。

　おぞましいかぎ爪が、五指から伸びていた。

　一本ずつが、伝説に名だたる魔剣聖剣にも劣らぬ鋭さと強大な神秘を秘めていると、若瓏ルォロンは看破した。エルゴと同型である自分の命にも、十分届くだけの武具だと。

（下がれるか！）

　八卦掌・大鵬展翅。

　円弧の流れで搦め捕るような套とう路ろとともに、術式と、そし

て幻翼に宿る力を、神腕の同一地点へ同時に打ち込む。

　幻翼と、神腕が激突した。

　地上から天空へ、逆しまの稲妻が迸ったかのようだった。

　一瞬の間をおいて、途方もない颶風と衝撃が、グラントウキョウ・ノースタワーの屋上を舐める。屋上につくられていた豪奢なウッドテラスもその威力に蹂躙され、分厚い倍強度ガラスに幾何学的なひびが入っていった。

「……るお！」

　アキラが、顔の前に手をあげて叫ぶ。

　身体が浮きかけたほどの暴風が収まったとき、ふたりは倒れていた。

　エルゴの神腕が、元に戻っている。

　若瓏ルォロンは、服の右袖が破れ、半身が血に染まっていた。

「るお！」

　駆け寄ったアキラが揺さぶっても、若瓏ルォロンはぴくりとも動かない。エルゴも意識を取り戻す様子はなかった。

　どうすればいいのか。

　彼女には、まるで分からなかった。

　これだけの騒ぎを起こせば、じきに工事中の階下から、誰かがやってくるだろう。自分を捜している夜劫の構成員が来る可能性も十分に考えられる。なんとか若瓏ルォロンを運ぼうとしても、少女の筋力では抱き上げることもかなわなかった。

　こつん、と音がした。

　横たわったエルゴの服から、携帯端末が落下したのだ。

　どうやら、受信によって振動したのが、ジャケットのポケットから落ちるきっかけとなったようだった。

おそるおそる、アキラはその端末を拾い上げた。

　発信相手の名前が表示されていた。

「……う」

　傷ついた若瓏ルォロンが、かすかに呻き声をあげる。

　アキラにとっては初めて見る、弱々しい青年の姿だった。一刻も早く、専門的な治療が必要なのは明らかであった。

「…………」

　しばし悩んでから、少女は通話ボタンを押して、耳にあてた。

3

「逃げられた？」

「残念ながら」

　と言って、師匠は携帯端末をしまった。

　正面の夜劫朱音のそばには、夜劫の構成員がついている。こちらは逐一朱音に耳打ちして、状況を知らせているようだった。

　夜劫の館である。

　漆黒の壁に、ずらりと仮面が掛けられたその部屋で、自分と師匠は事態の成り行きを聞いていたのだった。

（……エルゴさんが、行方不明に）

　自分たちが報告を受けたところでは、連れ去られたエルゴを追って、凛がグラントウキョウの屋上に赴いたが、連れ去ったという彷徨海の魔術師・白若瓏バイ・ルォロンも、エルゴも、一緒にいたという夜劫アキラも全員姿を消していたとのことだった。

　ひどく、落ち着かなかった。

　ある意味で、初めて自分にできた同胞はらから。

　シンガポールのアパートの屋根で、楽しそうに歌っていたエルゴの姿が、思い起こされてしまった。ゆうれいなんかこわくない、と星に呼びかけていた赤毛の若者は、今どうなってしまったのだろう。

「…………」

　師匠の横顔からは、何を考えているのか、読み取れない。

　こちらを見つめる能楽の仮面たちに似て、ほとんどの表情を消していた。時計塔の交渉ごとなどで、時折この人が見せる顔だった。

多分、昔は苦手だった事柄に対して、この人がかろうじて処してきた方法。

　やがて、

「……派手にやってくれたな、彷徨海」

　対照的に、苦々しさを隠さず、朱音が言う。

「また、政治家どもに根回しが必要になりそうだ。幸い現場になったグラントウキョウは工事中だから、なんとかなるだろうが」

「日本の政府は、魔術組織と繋がりが薄いと聞きましたが」

「組織レベルではね。とはいえ蛇の道は蛇。個人の政治家レベルなら残るところには残ってる、ということだよ。あいにく、時計塔ほど恵まれてはいないので、細やかな配慮が必要になるが」

　婦人と師匠の視線が、絡み合う。

　彼女のそれは、艶かしく光る蛇に似ていた。時計塔の法政科で、似た雰囲気を持つ日本の魔術師を知っている。ひょっとしたら、あれは国民性的なものだったのだろうか。

「本当に残念だよ、君主ロード」

　夜劫朱音は、改めて言う。

「君の生徒は優秀だという話だったが、その活躍が見られずじまいだった。まさか、同じ魔術協会として手加減したわけでもあるまいが」

　彼女の言う意味は、自分にも分かる。

　本当に逃げられたのか、と尋ねているのだ。

　実は、彷徨海と共謀していたのではないかと、言外に問うている。その黒い瞳が、かすかな変化も見逃すまいと、師匠を映している。

　瞳の中の師匠が、小さく咳払いした。

「一応、同じ西欧の魔術協会ですが、時計塔と彷徨海はほとんど接

触はありませんよ」

「そういうことにしておこう」

　師匠の返しに、朱音はあっさりとうなずいた。

　じわじわとこちらの喉を締めつけるような空気に、息が苦しくなる。

　時計塔でも政治はあった。世界最大規模の魔術組織として、内部での権力闘争は常に激しい。他人の言葉の裏を読み、複雑極まりない布石を打ち、少しずつでも己の領土を拡大すべく、誰もが野心を燃やしている。

　しかし、異国でのそれは、また違う緊張をもたらしていた。

　異なる力学。

　異なる状況。

　異なる文化。

　異なる魔術。

　そのひとつずつによって、いかなる破滅的な結果がもたらされるか、考えるだけでも胃が重くなる。いや、これがライネスだったら、「だから楽しいんじゃないか」ぐらいは嘯くかもしれなかったが。

　やがて、ゆっくりと、師匠が口を開いた。

「彷徨海の魔術師が、どうしてあなた方夜劫に介入したか、ご存じですか？」

　それこそ、最も重大な質問であった。

　婦人は柔らかく微笑したままだ。

　名前のごとく赤い唇の端に、二本の指を重ねる。つい楽しそうに歪んでしまうのを堪えている風にも見えた。

「答えて、いいのかな」

と、朱音が尋ねた。

「答えれば、君に関わってもらうことになるよ。私たちの魔術の根幹について聞かせるんだから」

「逆じゃないですか」

　と、師匠が切り返したのだ。

「わざわざ人を仲介して呼びつけておいて、中核となる話を何もせずに帰すだなんて、夜劫の名誉こそが傷つくのでは」

　思わず、師匠の方を振り向いてしまった。

　火薬庫に爆弾を投げ込むような言葉だった。

　数秒ほどで、婦人の表情に変化が起きた。

「はは！」

　と、吹き出したのだ。

「良かった！　すまないね君主ロード。ようやく噂の略奪公に出会えた気分だ。うん、それぐらいじゃないと、本場の魔術師の頭領はつとまらないな。こちらも時計塔の君主ロードに会えるなんて滅多にない機会なので失礼した。田舎者の戯言と思って、どうか許してほしい」

　へりくだった物言いが、どこまで本気かは分からない。

　そもそも、答えていいのかなというさっきの発言からして、師匠を試していたものに思えた。魔術師の言葉は、呪文や術式に似て一筋縄ではいかない。

　あえてたとえれば、チェスに似てるだろうか。

　ひとつずつ進めてきた駒が、順繰りに効果を発揮するとは限らない。ある駒はずっと後に、ある駒はもっと前に動かしていた駒と組み合わさって、徐々に相手を追い詰めていく。互いにそうしたやりとりを繰り返すことで、両者は妥結する地点を目指すのだ。

　魔術は世界への詐術のようなものだ、と時計塔で何度も言われた

のを思い出す。ひょっとすると、こういう迂遠な妥結こそ、魔術の本質なのかもしれなかった。

　朱音が、口を開く。

「まず、私たちの魔術について、知っているかな」

「夜劫を含む日本独自の魔術は、神の破片に接続している、ということですね」

（─えっ）

　一瞬、反応が遅れてしまった。

　確かに今、神の破片、と言わなかったか。

　地域によって、魔術の論理が違うというのは聞いていた。しかし、それはあまりに大きすぎる変化ではないか。

　いや。

　だから、日本に来たのか。自分に眠る、アーサー王英雄の因子を取り除くための方法。エルゴが喰らった、神を還すための方法。日本の魔術というのは、そのふたつとあまりに密接な関係があるように思えた。

　動揺を察したか、一瞬だけ、師匠の瞳がこちらを向いた。

（後で説明する）

　と、視線が言っていた。

　婦人はそっと微笑を深める。漆黒で形作られたこの部屋を見やり、ゆっくりと言う。

「私たちの魔術は神を─古い神の破片である神がん體たいを基点としている。正式には神しん臓ぞう鋳い體たいなんていうんだが」

　神の破片。

　神がん體たい。

「だが、知っての通り、古い神秘は現代では摩耗する。私たちは

とっくに時代に置いていかれた敗残者だからね。残された遺産は、いくら貴重なものだろうが、放置すれば腐っていくだけだ」

　そうだ。

　現代の魔術は、神代とはまったく異なる。

　神代の魔術は多くの理由から、現代に適応できなくなったためだ。それこそ、魔術師が受け入れなければならない、揺るぎなきルールのはずだった。

「……ヒヒッ、いやはや、ずいぶん聞き覚えのある理屈だな」

　小さく、自分だけに聞こえる声が、耳元でする。

　右肩の固フ定ッ具クで隠されたアッドである。この封印礼装がつくられたのも、古き宝具である〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉の神秘を保存するためだった。

　心臓の鼓動が、一際強くなった。

　じわり、と手のひらが汗ばむのを感じる。

　ほとんど地球の反対側の異国で、こんなに自分と近すぎる話を聞くとは。

「だから、私たちは神がん體たいを特別な方法で保存する必要があった。この方法は組織ごとに違うがね。ひとまず、日本この国においては八つの神がん體たいが現存する……までは時計塔もご存じだろう？」

　ひとつずつ、夜劫朱音が紐解いていく。

　西欧のそれとはまるで異なる、固有の魔術の深奥。

「私たちの場合、保存するための呪物を、黒くろ櫃ひつという」

「その黒櫃とは、人間のことですか」

　と、師匠が口を挟んだのだ。

　朱音が軽く目を見開き、師匠は真っ直ぐに対峙したまま続けた。

「生命とはそれ自体がひとつの小宇宙ミクロコスモスです。ゆえに、現実である大宇宙マクロコスモスからの反動も、生命の内側では起きにくい」

　その話は、時計塔の講義でも聞いたことがあった。

　だから、自己への『強化』が、最も簡単な魔術のひとつなのだと。

「古来さまざまな魔術が、人間の内側に興味を抱いてきました。魅了されていたといってもいいでしょう。アステカの神官は生贄の心臓をくりぬき、神への捧げものとしました。エジプトにおいては、心臓は魂の一部とされ、その重さをマァトの羽根と比べることで罪の重さをはかれると考えられました。ギリシャ神話においても、主神ゼウスが息子であるザグレウス神の心臓を喰らって、女と交わったことで、息子を再誕させたという逸話があります」

　つらつらと、師匠が並べていく事例に、自分は息を止めた。

　息子の心臓を喰らう。

　神を喰らいたいという──喰神衝動に苛まれていたエルゴと、あまりに似通っているではないか。

「初歩的すぎたかな。いや、知識としては一般的ポピュラーな部類だが、それを結びつけるのは、ただならぬ洞察力の賜物だ。ここはやはり君主ロードの慧眼と褒めるしかないか。とりわけ最後の逸話については、君、どこまで調べてウチにやってきたんだ？」

　と、朱音が頭を掻いた。

「その通り、夜う劫ちの保存方法はそれだ。素質のある者に、神がん體たいを移植する。この移植された人間を黒櫃と呼ぶわけだ。君主ロードにはこの場合の櫃の意味を語るまでもないだろう？」

「遺体をいれる棺を、この国では屍から櫃ひつとも呼ぶのだとか。また、この国における死のイメージは、おおよそ黒で示されます。死に関するケガレを黒穢れ、黒不浄などと呼んだとか」

　そこで、一拍の間を、師匠はおいた。

「つまり、黒櫃とは、神の遺体をいれるための名前だと、最初から

そう主張しているのでしょう」

「ふふ、期待通りだ。そして、次の黒櫃はアキラなのさ」

　一瞬、沈黙が落ちた。

　彼女の言葉を、師匠も数秒をかけて吟味していた。

　屍櫃。

　黒櫃。

　神の遺体をいれるための──保存するための棺。

　細く、長く、師匠が息をついた。

「それは、つまり」

「言った通りだとも」

　と、夜劫朱音の首が上下する。

　どこかうっとりとした笑みを、彼女の唇は浮かべていた。

「アキラの身体には、今少しずつ神がん體たいを移植している最中なんだ。次の夏祭りまでには移植を終わらせる算段でね。だから、彷徨海バルトアンデルスはそれを狙ったんじゃないかと、私たちは考えているわけさ」

　彷徨海は、エルゴに神を喰らわせた組織のひとつだ。

　ならば、攫われた夜劫アキラが神を保存する黒櫃であったというのは、けして偶然の一致ではありえまい。エルゴが彷徨海の魔術師とともに行方不明になった事件とも、きっと繋がっているはずだ。

「どうだい？」

　数秒の間をおいて、夜劫朱音はこう口にした。

「私たちがアキラを取り戻すのを手伝ってくれるかい？　ロード・エルメロイII世」

＊

　会談を終えて、自分と師匠は夜劫の館を出た。

　太陽はだいぶ傾いていた。

　まだたまらない暑さながら、ふわりと吹く風が現実感を呼び覚ましてくれる。カヤやマツと思しい青々とした枝葉の香りが、涼風には含まれていた。

（……ああ）

　漆黒と仮面に囲まれた室内で、さまざまな感覚が麻痺していたことに、やっと自分は気づいた。時間感覚も多分そのひとつだ。師匠に言わせれば、これも魔術の一種ということになるのだろう。

　なんだか、黒い怪物に呑まれていたような気分ではあった。

　浅く、何度か呼吸を繰り返す。

　強い光の下、クラクラと目眩がするのを、なんとか押し込める。

「大丈夫かね」

　背中を、長い手がそっと支えてくれた。もっとも、ちょっとばかり筋力が足りず、危うくふたり揃ってバランスを崩しかけたのだが。

　逆に、向こうの腰のあたりを保持しつつ、自分は尋ねた。

「師匠は？」

「見ての通りだ」

　言ってるのが、何のことかはすぐに分かった。

　首の後ろがぐっしょりと汗で濡れていたのだ。夏の暑さによるものだけではあるまい。先ほどの会話は、師匠にもそれだけの緊張を強いたのである。

　なぜだか、自分はほっとしてしまった。

「なんだね」

「いえ、師匠はそのままが嬉しいです」

「私は嬉しくないぞ」

　唇を尖らせた師匠に、おかしくなってしまう。

　変わるものと変わらないものがある。変わってほしいものと変わってほしくないものがある。本人と他人でそうした志向もすれ違うわけだが、それでも一緒にいることの心地よさがあった。

（……師匠は欠点と思っているかもしれないけれど）

　きっと、その欠陥は自分にとっての救いだ。そんな風に話したら、ますますむくれてしまうのだろうけれど。

　蟬の声を聞きながら砂利を踏むと、途中で師匠の視線が上がった。

　門の向こう側に、来たときと同様、仮面の構成員たちが並んでいた。

　館から出た自分には、この構成員たちの仮面が、夜劫という大きな機械のひとつなのだ、と主張しているように見えた。ひとりずつの意思は無視され、より大きな流れへの奉仕を強要される。いや、強要すら必要ではなく、そういう在り方こそ正しいと最初から刷り込まれているかのように、あまりにも自然に佇んでいる。

「…………」

　また、息が苦しくなってしまう。

　こんな自然さを、自分は知っている気がした。

　そして師匠の車のすぐそばで、ひとりだけ素顔を晒している逞しい壮漢は、かえって孤独に見えた。

　夜劫朱音の息子、夜劫雪信。

「お疲れ様です」

　頭を下げた雪信の、右手のギプスを見やって、師匠が言う。

「あなたが、前の黒櫃だったんですか」

「……ええ、もうすぐ役目を終えるところだったんです」

　と、雪信が肯定する。

　一瞬、喉が引き攣った。先ほどまで夜劫朱音が話していた内容がリフレインする。神を保存するための棺うつわ。

「じゃあ、そのギプスは」

「西洋魔術の魔術刻印にも同じことが起きるんでしょう。神がん體たいの拒絶反応というやつです。八割ほど引き剝がした今も、腕の機能が戻っていませんので、醜態を晒しております」

　魔術師とは、家系ごと魔術に呪縛されるものだ。

　長い歴史を持つ、優れた家系ほど、どうしようもなく雁字搦めにされる。魔術刻印とはそうした呪縛の象徴であった。何代も、何十代も、先祖がひとつずつ踏み締めてきた研究の成果が、魔術刻印には記録されている。

　刻印を受け継いだものは、これらの記録と性能を好きに活用できる。

　代わりに、その刻印の系譜に連なることが、己の人生にすり替わってしまうのであった。

（……つまり）

　夜劫の魔術において、黒櫃とは似たようなものなのだろう。

　似ているとは、この場合同じではないという意味だ。

　些細な違いが、ひどく致命的になってしまう予感がしていた。自分たちにとってか、はたまた彼らにとってか。

　師匠が尋ねる。

「アキラさんとは、どういうご関係になるんです？」

「アキラは、離婚した妻の子です」

端的に、雪信が答えた。

「姉妹だったんですよ。私が姉のメイを、妻が妹のアキラを引き取りました」

「魔術師はおおよそ一子相伝。片方がいればよいと思った。そういうことですか？」

「ええ」

雪信の角ばった顎が上下する。

「ですが、メイが急死しまして、アキラを連れ戻すことになりました」

「奥さんは賛成したんですか」

「倫理的な話でもするつもりですか」

雪信の眉間の傷痕が、かすかに歪んだ。

昼下がりの眩しい光の下で、それは擬態した蜥蜴とかげにも見えた。

「……いいえ」

と、師匠がかぶりを振る。

「もちろん、私にもそんなことを取りざたにする資格はない。魔術師が一般的な倫理を振りかざしたところで、道化にしかならないでしょう。ですが、事件の解決にはその情報も必要です」

師匠の口調から、淡い苦味を感じた。

なんだかんだで、師匠が子どもに甘いことを自分は知っている。ならば、今の言葉を平然と言うために、この人はどれだけの痛みを耐えただろう。

「賛成も何も。そもそも、母親は失踪していたんですよ」

感情の色を交えずに、夜劫雪信が言う。

「失踪？」

「妻は、アキラを育児放棄ネグレクトしていたようでして。ああ、彼女はもともと夜劫の家が神秘に連なっていることも知りませんでした。単に、変わった宗教の家系だとだけ思っていたから、子どもの周囲で奇怪な現象が立て続けに起きることにも耐えられなかったのでしょう」

「…………ッ」

　唾を、飲み込む。

　一般的な技術はともかくとして、魔術の秘奥の部分は一子相伝が基本だと、時計塔でも教わった。だから、一緒に育った兄弟や姉妹であっても、魔術の存在すら知らないことも珍しくないと聞く。

　おそらく、日本でもこの基本原理は変わらなかったのだろう。

　だが、この場合の問題は。

「どうやら拝み屋を探したようですが、夜劫の神がん體たいを受けいれられるほどの素質は、市井の拝み屋が御せるものではありません。かといって、離縁した私どもに連絡を取ることもできず、逃げ出したのでしょう。部下が発見した際のアキラは栄養失調状態に陥っていました。祭りの近くになるまで移植ができなかったのは、あれの健康が移植可能な段階に達していなかったからです」

「……ッ、あなたは、そうなると分かっていて」

　いずれ破綻すると、知りながら放置したのか。

　食ってかかりかけた自分の前へ、さりげなく師匠が歩み出た。

「アキラさんが、彷徨海の魔術師に攫われた時の状態はどうだったんですか」

「当主にお聞きにならなかったんですか」

「あなたに聞いた方が早い、と言われまして」

　これは本当だ。

　朱音から、その手の実務は雪信に一任しているからと言われたのだ。

「神がん體たいの移植は本殿で行われました」

　と、壮漢の視線が、自分たちの出てきた館へ向いた。

　あの中に、魔術師の工房のような場所も存在するのだろう。

「移植が一度終わるたび、黒櫃となる施術者は下界に返されます。これは夜劫の山の霊気が強すぎて、必要以上の同化が進むのを避けるためです。西洋魔術の魔術刻印も、似た理由から、第二次性徴期が終わるまでに分割して移植されると聞きますが」

「……大抵はそうなりますね」

　師匠が認める。

　それを踏まえてかどうか、白い光の下で、ゆるゆると雪信の声が続く。

「二度目の神がん體たいの移植が終わった後、アキラは攫われました。彷徨海の白若瓏バイ・ルォロンは、その直前アキラと接触して、唆そそのかしていたようです。攫われた際、私どもの部下も若瓏ルォロンと接触して、交戦しております。彷徨海の名前を聞いたのはこの際です」

「…………」

　自分は、ただ絶句していた。

　それは、本当に攫われたのだろうか。

　逃げ出した、というのではないだろうか。

　ジリジリと肌を焼く夏の陽光が、まるで暑く感じられなかった。胃の底から冷えて、喉はヒリヒリと渇いて、指先の感覚も失われてしまっていた。一秒でも早く、この場を立ち去りたくて仕方がなかった。

「ありがとうございます」

　至極真面目な顔で、師匠が頭を下げた。

　こちらにも助手席に座るように促して、車のドアを開く。

乗りこんだところで、

「ロード・エルメロイII世」

車の屋根に分厚い手の平をおいて、壮漢が呼びかけた。

「母の──いえ、当主の依頼をどうするつもりですか」

「返事は、一両日のうちに」

短く言って、いつもより乱暴に、師匠は車の扉を閉じたのだった。

✦第四章✦

1

　車の窓の向こうを、夏の空が流れていく。

　できそこないのソフトクリームみたいな白い雲を、この国では入道雲というらしかった。入道とは巨人のことだそうで、古い時代の人々は青空を席巻する真っ白な塊に、伝説の存在を重ねたのだろう。

「…………」

　しばらく、自分たちは話さなかった。

　夜劫の館で開示された事柄は、あまりに重かった。

　自分の視線は、窓の外と膝の上を落ち着かなく行き来するのみだった。

（……駄目だ）

　ぎゅ、と膝の上の拳で握る。

　これは、自分のことだ。師匠に甘えるばかりじゃいけない。ここに至ってしまった──至らせてしまったことに、自分は向き合わなければならない。

「さっきの──」

　決意とともに、つっかえながらも、口を開く。

「さっきの黒櫃が、拙の中の英雄アーサー王や、エルゴさんの神を還す方法だったんですか？」

「私の想定ではね。日本の魔術が神との接続を前提にしているのは知っていた。ならば、接続を絶つ方法も伝わっているだろうと考えたんだ。夜劫朱音の前であれこれと話したのも、そうした仮説をもとに、以前から考察していたからだ。まさか、こんな事件に巻き込まれるとは思ってなかったが」

ハンドルを握ったまま、師匠が言う。

　確かに、納得はできる。

　だとすれば、自分の中の英雄アーサー王や、エルゴの内側の神を、誰かに引き渡すということになるのだろうか。たとえば、新しい黒櫃だという夜劫アキラに。

「それは……許されることなんでしょうか」

「現時点ではなんとも言えないな。有力な候補だが、君やエルゴにそのまま適用できるかは、試してみないと分からない。一応加えておくと、夜劫アキラの件について、格別に夜劫が無慈悲というわけでもない」

　師匠が、なるべく予断を与えまいとしているのが伝わった。

　是非も、善悪も、きちんと自分で考えるべきだと、この人は言っているのだ。他人の考え方をただ丸呑みしてしまうのではなく、己の感性を育てなさいと、大学の講壇にでも立っているかのように話している。

「……夜劫が特別に無慈悲じゃない、というのは分かります」

　と、自分はうなずいた。

　時計塔で聞かされていた事柄と、夜劫の話はよく似ていた。

　おそらく、魔術師という生態が、こうした思想を規定するのだ。子どもに対する態度も、あくまで思想の一端に過ぎない。時計塔の魔術師がすべてを放り捨てても根源に近づこうとするように、日本の術者たちも一般的な倫理や価値観の外にいるのだった。

　──『魔術師は弟子や家族を大切にするものだと、昔橙子さんから聞きました』

　あのとき、両儀幹也が言っていたことを思い出した。

そう、大切にはするのだ。

　ただし、一般的な考えとは異なる。

　弟子や家族自体が大事なのではない。彼らが愛しているのは身内ではなく、身内が受け継いでいく魔術そのものだからだ。

　科学には、「生命とは遺伝子の乗り物に過ぎない」という考え方があるそうだが、魔術師は極めてこれに近い。遺伝子ではなく魔術を入れ込み、到達不可能としか思えぬ根源への執着を加えれば、魔術師というカタチになるのだろう。

「でも、拙は、苦しくなってしまいます」

「……私もなるとも。そんなことを言う資格があるかはともかくとして」

　ハンドルを、師匠は強く握りしめていた。

　誰よりも魔術師たらんとするこの人が、時に無慈悲な面を見せることも、自分は知っている。だけど、そうありたいわけじゃないのだ。

　矛盾だと、思う。

　魔術師であろうとする師匠。

　魔術師然と振る舞えない師匠。

　そんな矛盾こそがこの人だとは思うけれど、いつか壊れてしまうのではないかと、自分はずっと怯えていた。まるでガラスの剣だ。見事、誰かの心臓に食い入ったとき、剣もまた粉々に砕け散ってしまうのではないか。

　同時に、もうひとつの疑問も浮かんだ。

「エルゴさんは、どうするんですか」

　彷徨海の魔術師とともに、行方不明になった赤毛の若者。

　彼を見つけるためには、夜劫と協力するのも必要なのではないか。

そこで、車が止まった。

「師匠？」

　四階建てのビルの前であった。

　どうも建設途中でやめたらしく、五階部分は柱などの基部だけが突き出ている。

　住宅地と工場地帯の中間につくられたビルは、どことなく静謐な神殿を思わせる。そのせいか、周辺には通行人も見当たらない。

「ここは……？」

　てっきり、宿泊しているホテルに向かっていると思っていたので、軽く驚いてしまった。

「……伽藍に、似てるな」

　と、車から降りた師匠が呟いた。

「伽藍？　仏教ブッディズムの神殿ですか」

「そのくらいは講義を覚えてたか。原義だと、神殿よりは僧侶の住居という方が近いがね。僧そう伽ぎゃ藍らん摩まを略して伽藍というようになったんだが、ここの場合はもっと後期の、寺院全体としての伽藍の雰囲気だ」

　伽藍、と自分も口に出してみた。

　鐘の鳴るような響きは、確かにこのビルとよく似合っている。どこか寂しそうな佇まいのせいだろうか。

　入り口のところから、見知った人影が現れた。

「あ、先生！　グレイ！」

「凛さん」

　大きく手を振った遠坂凛の隣に、もうひとり髪の長い少女がいた。

　七、八歳ほどの幼さでいて、その面差しは優美に咲き誇る花を思

わせる。凛と同じく、この国だと珍しい青い瞳をしていることに、昼の光でやっと自分は気づいた。

「両儀……未那さん」

「よかった。迷わなかったのね」

　と、少女が唇をほころばせた。

「ここって、地図渡していても来られない人が多いから」

「見事な結界だった。私も似たような方式を使うが、精緻さでは及びもつかないな」

　師匠の言葉に、自分は振り向いた。

「結界、って師匠がアパートの近くに張ってるようなのですか」

「ああ。魔術抜きで、縁の薄い人間を遠ざけるタイプの結界だ。ここしばらくは手入れしていないようだが、それでも十分な効果を保持している。……私のは一週間に一度は見直さないと、到底持たないんだがね」

　最後はひどく不満そうな口ぶりであった。

　凛が、おやという感じで、首を傾げる。

「わたしも気になりましたけど、純粋な魔術抜きで先生より上、って評価はかなり珍しいですね」

「仕方あるまい。この手癖を見れば、誰の仕事かは分かる。いささかならず趣味が強い癖に、過剰に完璧すぎるからな。物臭なんだか律儀なんだか、どちらかにしてほしいが、文句のつけようだけはない。学生時代の師にあたるロード・バリュエレータはさぞ教育が楽しかったろう」

　そこでため息をついて、師匠がこう言った。

「蒼崎橙子の仕事だ、これは」

「……ヴぇ」

　凛の喉から、奇妙な声が溢れた。

「あ、それで両儀さんが蒼崎橙子から紹介されたって」

「はい。ここは橙子さんが使っていた事務所ですから。さ、入ってください。パパが待ってます」

　うなずいてから、未那がビルの入り口へ促したのであった。

＊

　四階が、事務所になっていた。

　正確には、もとは事務所っぽい、と思われる構造だった。

　壁も床も素材が剥き出しで、机と椅子、いくつかの棚が置かれているだけ。なぜか壁際には、古式ゆかしいブラウン管のテレビが大量に積まれていて、不思議な雰囲気を醸し出していた。

「……これが蒼崎橙子の事務所か……」

　と、師匠が息を呑んだ。

「それって、重要なんですか」

「現代の魔術師にとってみればね。ある意味、伝説的な芸術家のアトリエみたいなものだから」

　自分の質問に、凛が人差し指を振る。

「でも、あまり魔術の品は残ってなかったわね。放り出されたウィジャ盤とかあるけれど、加工しようはあっても、大した神秘が刻まれてるわけじゃない。歴史もせいぜい百数十年かそこらだったし。工房に使ってたのは別かもしれないけれど」

「さてはお前、先に漁りまくったな？」

「せ、先生だって、逆の立場ならそうするでしょう！　これはそう、貴重な呪体や礼装が散逸せぬよう、お救い差し上げようという慈悲の心ですよ！　いえ、蒼崎橙子の事務所だと知ってれば、もっと徹底的に、塵ひとつだって見逃さずにやってたんですけど！」

キリッと表面上の体裁だけは整えて、凛が言う。

　台詞はわりとめちゃくちゃな気もするのだが、彼女が口にすると、なんとなく説得力があるのは人徳かもしれない。

「橙子さんが、この事務所を手放して久しいんですけどね」

　と、部屋の奥から声がした。

　とびきりの笑顔で、未那が振り返る。

「コクトー」

「パパ、だろう」

　軽く嗜たしなめて、両儀幹也はこちらにお辞儀した。

　師匠がやや未練げに事務所の風景から視線を離して、問いかける。

「君が、この事務所の持ち主なわけかな？」

「いえ。だいぶ前に橙子さんが手放したあと、何人かの手を渡ってから、たまたま今の持ち主と知り合いになったんです。本人は、買ったんじゃなくて間借りさせてもらってるだけなんて言ってて、たまに遊びに来るぐらいなんですけどね。今日に限っては、ここがいいように思えて」

「今日に限っては──？」

　言いかけたところで、小鼻が動いてしまった。

　ぷん、と何かを炒めている、美味しそうな香りがしてきたのだ。階段のあたりからも漂っていたのだが、窓からの風向きが変わったのか、ぱちぱちと油の弾ける音と、牡蠣醤油かなにかの食欲をそそる匂いがまとめてやってきた。

　仕切りの向こうである。

　かんかん、と多分おたまで中華鍋を叩く音色。

　何かしらリズムを取っているようで、鼻歌も聞こえた。

（……エルゴ？）

　一瞬、若者の顔が浮かんだ。シンガポールのアパートで、どこか寂しそうに歌っていたエルゴの面影がだぶったのだ。

　だけど、その響きは明らかに違う。

　すぐに、右手に包帯を巻いた褐色の肌の青年が、大きな皿を片手に現れたのだ。

「幹也さん、チャーハンできたぜ」

　きらきらと米粒が光っていて、みじん切りにした唐辛子と葱がまぜてある。あとは申し訳程度の干し蝦えびが入っている程度の極めてシンプルな料理だったが、その見た目と匂いだけで、もはや味わいまで保証済みである。

　が、問題はそれではなかった。

　皿を抱えた青年が、師匠に向かって口を開いたのだ。

「おお、あんたが噂のロード・エルメロイII世か！」

「この人、は……」

　振り向いた自分に、凛が眉根を寄せた。

「あれ、先生、グレイに説明してなかったんですか」

「しようとは思っていたんだが、いささか状況が悪くてな。あと、説明に手間取りそうなので、ここでした方が早いかと」

「……先生、時々そういう省エネというかズボラをしますよね」

　凛が、視線をそらす。

　少しして、諦めたように手を動かし、こう紹介したのだ。

「こちら、彷徨海の白若瓏バイ・ルォロンさんです」

「は？」

　思わず、素っ頓狂な声が出たのは許してほしい。

「正確に言えば、彷徨海に属してるのはオヤジで、オレはその弟子って扱いだけどね」

　小皿にチャーハンを取り分けつつ、青年──若瓏ルォロンが言う。

　家庭的なムーブが、ひどく手慣れた感じではあった。時計塔にも家庭的な子弟がいないわけではないが、ここまで板についている者は知らない。

　最後に、別に持ってきていたバジルの葉を添えて、綺麗な飾り付けまでやってのけた。

「はい、できあがり」

「るお。麦茶も注ついだよ」

　お盆に人数分のグラスを載せて、七歳ぐらいの少女が持ってくる。

「おう、謝謝シィエシィエ、アキラ」

「アキラ？」

　その少女にも、見覚えがあった。

　両儀幹也から手渡された写真に、写っていたからだ。

　そもそも、今回の事件の発端となったのが、この少女ではないか。

「夜劫……アキラ……」

　呆然と、呟いてしまった。

　師匠へと振り返る。

「どういう、ことです？」

「夜劫朱音と話していたとき、別にメールが来ていたんだ。両儀幹也から、夜劫アキラと白若瓏バイ・ルォロンを確保した、というね。ただ、夜劫の前ですぐ話すわけにもいかなかった。向こうがどういう動きに出るかも分からなかったからな」

そうすると、まるで話が変わってくる。

　あのときの師匠はアキラと若瓏ルォロンの所在を知りつつ、夜劫から情報を聞き出していたのか。

「夜劫の側も、私たちがすでに夜劫アキラさんを捜し当てているとまでは思わずとも、似た状況は想定していただろう。だから、念入りに、取り戻すのを手伝う気があるか、って確認してたんだ」

「……それで」

　自分が聞いていた師匠と夜劫朱音の会話は、まったく別の意味を、後ろに潜ませていたのだった。魔術師同士の会話が、けして言葉通りに聞けないのはいつものことだが、その理屈は異国でも通じるらしかった。

　師匠の言葉に自分の名前が出たのを聞いて、アキラがこちらを窺っていた。

　不安そうなその表情に、

「大丈夫よ」

　と、未那がすぐ前で受けあった。

「こういうの、パパは絶対うまくやるもの。もちろん、あなたたちが、どういう解決をしてほしいかにもよるだろうけど」

「……うん」

　小さく、アキラがうなずく。

　意外なやりとりに思えたが、年が近いので、気があったのかもしれない。

　少し間をおいて、両儀幹也が口を開く。

「インターネットの掲示板やＳＮＳとかをチェックしていたら、グラントウキョウ付近で不思議な光を見たって話があって。それで、エルゴさんに電話を入れたんですよ」

　日本に到着した際、師匠はエルゴにも携帯端末を持たせていた。

電話越しでは例の礼装も使えないため、緊急連絡用として、凛とエルゴの番号を幹也に伝えていたのであった。

「電話に出てくれたのが、アキラさんだったんです。幸い、グラントウキョウに出入りしている友人がいたので、彼らと無事に合流することができました」

「あなたは、いかにも友達が多そうだ」

「正直、使われる方が多いです」

　師匠の言葉に、幹也が淡く笑う。

　冗談というには、ひどく実感のこもった台詞だった。

「じゃあ、エルゴさんも」

「こっちよ」

　と、凛が先導した。

　事務所に隣接した部屋に、寝室が設けられていた。

　そこのベッドに、赤毛の若者が横たわっていたのである。

「エルゴさん！」

　目立った傷は見当たらない。

　見かけだけでいえば、おそらく若瓏ルォロンの方がよほど重傷だろう。

「傷はほとんどないわ。極端な精オ気ドの減少が気になったけれど、そちらもびっくりするぐらいの速度で回復してる。あとは精神の問題ね」

「そっちはまだ半日はかかるだろ。飢えに襲われたあげく、神腕まで起動したからな」

　後ろから、若瓏ルォロンが言う。

　神腕。

シンガポールの戦いで発動したエルゴの切り札だった。孫行者の権能を秘めたかの神腕は、分身とはいえ山嶺法廷のムシキさえ撃退せしめたのだ。

「あなたは……」

「幸い、こっちは丈夫にできてるもんでね。丈夫にされた、って方が正確か」

　包帯を巻いた右手を叩いて、「あいたっ」と涙目になる。

　その程度で済んだことの方が、自分には驚きだった。神腕を振るったエルゴと対峙して、命があっただけでも奇跡に等しい。

「…………」

　聞きたいことが、無数にあった。

　エルゴのこと。

　彷徨海のこと。

　夜劫アキラのこと。

　そもそも、この青年は敵なのか、味方なのか。

　若瓏ルォロンは快活に笑い、取り分けたチャーハンの小皿を差し出した。

「まあ、とりあえず飯を食ってくれよ。冷めても美味いつもりだけど、やっぱり温かいうちが一番だろ？」

2

　呉越同舟、という言葉をライネスに聞いたことがある。

　敵対関係にある国民同士でも、同じ舟に乗り合わせれば、嵐などの災害には協力して立ち向かうものだ……という中国のたとえ話らしい。「時計塔の運営はおおよそこういうものだよ。魔術師同士が協力するかというと怪しいが、とりあえず同じ舟に乗っている間は背中を刺されないからね」と、当時の彼女は苦笑していたものであった。

　今が、まさしくそんな状況だった。

　師匠と、自分と、凜。

　彷徨海の白若瓏バイ・ルォロンと、彼が攫った夜劫アキラ。

　両儀幹也と、その娘・未那。

　寝室で寝ているエルゴを除き、その全員が一堂に会して食事をとっている。

「……美味いな」

　神妙な面持ちで、師匠がチャーハンに視線を落とす。

　実際、いくら師匠が数々の怪事件に遭遇してきたからって、まさか彷徨海の魔術師からチャーハンを振る舞われるなど、夢にも思わなかっただろう。

　自分だって同じだ。

　噛みしめた食事が美味であるほど、困惑の気持ちがいや増してしまう。

「ちょっと憎たらしい味付けね。わざと半歩だけ胡椒利かせすぎてるでしょ、これ」

スプーンを握った凛が、むむむ、と米粒を睨みつけている。

「ん、ここにいるヤツら、みんな脳みそよく使っただろ？　だったら、細かく味のバランス取るより、ガッツリ食欲満足させる方がお得じゃん」

「うわ、技テ術クじゃなくて感性と仰る。飯粒がパラパラなのは一度水洗いしてるからだし、最後にバジルをいれて味を上品にまとめてるくせに」

「そこはホームレス仲間の佐野さんから教わったんだ。バジルはそこらの公園でも結構生えてるからな」

　意外な単語に、眉が動いてしまった。

　魔術師とホームレスという組み合わせが成立するなんて、思わなかったからだ。自分の知っている魔術師は、種々の実験にせよ、対外的な交渉にせよ、何かと散財を迫られがちであり、結果として貴族や富豪ばかり多い印象があった。

　師匠がさまざまな依頼を受けているのも、借金の返済のみならず、君主ロードとして最低限の格を保つだけで、飛ぶように金が消えていくからという事情がある。

「それより、よく中華鍋なんか見つかったね」

　と、幹也が口を開いた。

「ああ。キッチンの隅でホコリかぶってたよ。錆びちゃいなかったんで、さっと洗って使わせてもらった。水道の蛇口が三つもあったのがビックリしたけど、実験かなにかしてたわけ？」

「かもしれない。僕がここで働いていたときから、そうだった」

　懐かしそうに、幹也が言う。

「うん、そういえば、橙子さんが風邪をひいたとき、お粥をつくってたな」

「幹也さんがですか？」

　あの蒼崎橙子が風邪をひいたというのにもびっくりしつつ、尋ね

てしまった。

「残念ながら、僕はパスタを茹でるぐらいしかできないです。ただ、橙子さんが褒めるのは珍しかったから、きっと気に入ったんだろうな」

　不思議と、その風景が瞼に浮かぶ気がした。

　仕方なさそうに看病する幹也と、濡れタオルを額に置いた橙子の姿。

　この事務所──かつては事務所だったのだろうビルで、あの人はどんな仕事をしていたのだろう。

（どんな時間だったんだろう）

　誰しもにある歴史に、思いを馳せてしまった。

　多分、この奇妙な呉越同舟が成立しているのも、両儀幹也という男ひ性との纏う空気によるものだ。いわゆるカリスマとは違う。もっと穏やかで、息のしやすい在り方。異形の領域に身をおくはずの人々が、ほんのひととき、そんな事実を忘れてしまうような。

　そんな青年が、どうして冠位人形師・蒼崎橙子と知り合い、ジャパニーズ・マフィアの会計士になったのだろうか。

「……そろそろいいかしら」

　全員の皿が空になったところで、凛が切り出した。

「若瓏ルォロンさんには、いろいろ聞きたいことがあるんですけど」

「それは……」

　師匠が、言いよどんだ。

　この場で話していいか悩んだのである。

　当事者である夜劫アキラはまだしも、両儀未那は直接関係ない。しかも、まだ七歳かそこらの年である。いくら大人びているからといって、無配慮に聞かせていい内容とは思えなかった。

すると、未那はひょいと椅子を降りて、頭を下げた。

「食べ終わりましたし、わたし、アキラちゃんと本を読んでますね」

　背中を翻し、アキラの手をとって、廊下へと出ていったのだ。

　その背中を見送ってから、

「よくできた娘さんだな」

　若瓏ルォロンが感心した顔で言った。

「自慢の娘だけど、よくできてるかはどうかな」

　幹也が言いながら、空になった小皿を重ねて片付ける。台所のシンクに置いて、水の張られる音を聞きながら、凛が口を開く。

「確認させてもらっていい。彷徨海」

「はいはい、なんでもどうぞ。時計塔のお嬢様」

　ふたりの視線が、刃のように嚙み合った。

　どちらも外そうとはせず、凛が重ねて言う。

「どうして、アキラを攫ったわけ？」

「お察しの通り、神が必要だからだよ」

「神がん體たい、ね」

　夜劫朱音から話された、神の破片。

　その情報については、凛も知っていたらしい。シンガポールにいたときから、日本の魔術の特異性を話していたのだから、それも当然か。

「なんのために？　エルゴと関係あるわけ？　それに、どうしてアキラに神がん體たいの最後の移植をする前の、このタイミングなの？」

「さて」

矢継ぎ早の質問に、若瓏ルォロンは不敵に唇を歪めた。

　ソファに深く座り直し、両手を広げる。

「せっかく場を設けてもらったから、話ぐらいはするさ。だけど、こちらの手札をただ晒せと言われても困る。もう少し、面白そうな質問にしてもらえないか？」

「……だったら、ひとついいかな」

　と、割り込んだ師匠が、人差し指をあげた。

「シンガポールのときから、疑問があったんだ」

「へえ、なんだい？」

「順番だよ」

　ゆっくりと、師匠が言う。

「エルゴに手を出す順番については、アトラス院、山嶺法廷のムシキ、そして彷徨海と決めていたらしい。二番目のムシキはまだ分かる。ずっとアトラス院を監視していた素振りがあるし、実際鄭てい和わの宝ほう船せんでラティオが失敗してすぐ、ムシキがやってきたのは、何かしら言いがかりをつけて横取りする気満々だったからだろう」

　シンガポールでの事件を思い出す。

　確かに、ムシキがやってきたタイミングは都合が良すぎた。アトラス院のラティオにしてから、ムシキに強奪される可能性を考慮していた節がある。

「だが、三番目の彷徨海は謎だった。凄まじい長期間とコストをかけながら、何の収穫も得られない可能性が高すぎる。ムシキのように、いざとなれば奪い取る構えだったのかと思ったが、そういう様子も見当たらない」

　おそらく、師匠はずっとその欠落の意味を考えていたのだ。

　時計塔の君主ロードとして、師匠の実力が見合ってるとは残念ながら言い難い。代わりに、この人はほかの魔術師では及びもつかぬ

ほどの細心さを払っていた。時計塔の権謀術数などまるで似合わぬくせに、その用心深さだけで乗り越えてきたのだ。

　きっと、洞察力というよりは臆病さの賜物。

　いかにも堂々と──怯えを呑み込みながら、師匠が言う。

「彷徨海にとって、すでにエルゴが必須でなかったならどうだ？」

「先生、それって」

　凛が振り返った。

　自分も、数秒遅れて衝撃を受けた。

　なぜ、その可能性に思い至らなかったのか。

「エルゴと同じ実験を、すでに彷徨海がもうひとつ行っていたなら？」

　厳かに指摘する師匠の声が、事務所に響いた。

「君は、エルゴとよく似た能力を発揮したそうだな、エルゴに神を喰らわせた際のデータを彷徨海が利用して、独自にもうひとつつくりあげたとしても、驚くにはあたるまい。とはいえ、改めてエルゴを捕まえようとしたからには、エルゴが不必要になったというわけじゃないだろう。おそらく、君は彷徨海のつくった代用品ということなんじゃないか」

「……代用」

　ずきり、と胸が痛んだ。

　だって、それじゃあ、あまりにもそっくりだ。

　英雄アーサー王の代ス用ペ品アとして、つくられた自分と。

「……やれやれ。先生ってのは嫌なことに気づくもんだなあ」

　若瓏ルォロンが肩をすくめる。

「だいたい、その通りだ。オレはエルゴの後継作ってわけ。大事な実験ならスペアもつくるだろ。もちろん、彷徨海の実験目的と、ほ

かのふたつは必ずしも一致しないけどさ」

「夜劫アキラを求めたのも──神がん體たいが必要だというのも、その実験のためか」

「ああ。だからオヤジは、もしもあんたらが生き残ったら、この国で会うと考えていたんだろう。エルゴと両方手に入れば都合がいいけど、そうじゃなくても良かった……あたりじゃないか？」

「成り行き次第ってわけ？　意外と行き当たりばったりなのね」

　凛が、軽く首を傾げる。

　実際、未来視ともいうべき高速思考を達成していたアトラス院と比べれば、彷徨海のやり口はいっそ杜ず撰さんにも思える。そうした高速思考を前提に、アトラス院を監視していたムシキも、大雑把ながら最適解であったろう。

　しかし、師匠はむしろ表情をますます陰鬱に曇らせた。

「わざと知らされて、ないのか？」

「お」

　と、若瓏ルォロンが片眉をあげた。

「……コントロールしようとしてない。そもそも、狙いがそうだとしたら？」

「なんですそれ。言ってること、おかしくないですか先生？」

「エルゴの実験にはアトラス院の六源も絡んでいる。そしてアトラス院、山嶺法廷、彷徨海の目的が一致してないのはシンガポールの事件でも明らかだ。ならば、彷徨海からすれば、行動が理路整然としているほど、アトラス院の高速思考と並列思考でその計画を読み取られることとなる」

　凛が、唾を飲み込んだ。

　可憐な喉が小さく動き、彼女が言う。

「つまり、計画を読み取られたくなければ──」

「そうだ。彷徨海がアトラス院を出し抜こうとするなら、可能な限り手札を伏せ、ダミーの情報を増やす必要がある。……つまり、今の若瓏ルォロンのように、正確な情報を渡さずにおくことだ」

「……あんた、オヤジと妙に似てるな」

　若瓏ルォロンが、苦笑した。

「厳密にいえば、そのオヤジこそが彷徨海の魔術師だと言ってたな？」

「ああ。なんだろうな。現代魔術科の君主ロードと彷徨海のオヤジが似てるってのも変な話なんだが……どっちも、魔術師らしすぎて魔術師らしくない」

「なんだ、それは」

　まるで謎かけみたいな言葉だった。

　それでいて、若瓏ルォロンは勿体ぶることもなく、続けたのだ。

「最高の魔術師になりたかったらどうするか、だよ」

　師匠が、一瞬息を止めたのが伝わった。

　それは、今の若瓏ルォロンの台詞が、師匠の核に食い入るものだったからだ。

　けして諦めてはいないのだ。生来乏しい魔術回路も、担保として奪われたままの魔術刻印も、師匠が魔術師としての道を諦める理由にはならなかった。

（……それは）

　飢えのようなものじゃないか、と思う。

　師匠が師匠であるがために、どうしても欠かせない衝動。

　ほかにさまざまな事情はあれど、講師をやめようと思う、なんて言い出したのも、結局はこれに起因する。

　そして、若瓏ルォロンが言う。

「普通なら魔術を窮きわめようとするだろう。金にあかせて環境を整えるのもアリだ。だけどさ、オヤジみたいなタイプはこう言うんだ。──魔術師たるもの、自らが強くある必要などない。そんなものは使い魔にでもくれてやればいい、ってね」

「学院時代の蒼崎橙子も、似たことを言ってたそうだ」

「へえ。さすが冠位人形師だ」

　師匠と若瓏ルォロンの会話に、自分はそっと首筋を撫でた。

　まさしく、自分とライネスが、橙子のつくった人形と戦ったことがあったからだ。

「あんたは違うのか？」

　かすかに、若瓏ルォロンの目が細められた。

　黒くろ瑪め瑙のうに似た綺麗な瞳がきらめいた。

「オレだって噂は聞いてる。エルメロイ教室といえば、その気になれば時計塔を一変させられるだけの勢力だってね」

　その通りだ。

　はっきり言ってしまえば、師匠はうまくやりすぎた。

　数年前ですら、ほかの君主ロードたちに目をつけられるレベルだったのだ。なのに、たったひとりとはいえついに色位ブランド──冠位グランドを除く事実上最高位の弟子を輩出し、何人もの魔術師を典位プライドに届かせてしまった。

　神童はほんのわずかだからこそ歓迎される。

　時計塔の派閥でさえごく少数しか抱えていないほどの高位の魔術師を、エルメロイ教室が定期的に生み出せるとなれば、もはや喜ばしい事態ではない。しかも、これらの成功者に新世代ニューエイジの魔術師がまざっているとなれば、時計塔の既存権益者にとっては災害に等しかった。

　師匠が講師業務を減らし、エルメロイ教室と呼ばれる生徒たちの人数を減らしているのは、まさしくこの軋轢もあったからで……だ

からこそ、講師をやめようと思う、という言葉には安易に覆しがたい重みがあったのだ。

「あんたが魔術師として大成したいなら、優秀な生徒たちを活用した方がよほど近道のはずだぜ。ロード・エルメロイII世」

「合理的な話だな」

　笑みに苦さを含ませて、師匠が囁く。

　若瓏ルォロンが、楽しげに身を乗り出した。

「……だが、私は違う」

　師匠が断言した。

「私は生徒じゃない。生徒だって私じゃないし、ましてや使い魔などではありえない。いくら生徒たちが成功しようが、それは私が成功したことにはならない」

「本当に？」

　と、若瓏ルォロンが首を傾げた。

「時計塔の魔術師ってそういうもんだろ。でなきゃ、延々と代を連ねたりしないはずだ。あれだけたくさんの人を詰め込んで、難しい顔をして魔術を教えているのは、達成するのは誰でもいいって思ってるからじゃないのか？」

「そう考えられれば、楽なんだろうな……」

　師匠の表情は、ますます苦さを増す。

「だが、そうじゃないんだ。かつての事件で生徒たちを頼ることもあったし、今回も成り行きとはいえミス遠坂やグレイの手を借りているが、それはあくまで私の力不足ゆえだ。その未熟を恥じないようなら、もう私じゃないということだ」

　どこか独白にも似た、師匠の言葉に若瓏ルォロンは何度かうなずいた。

「ふうん。そうか。そうなのか」

淡々と、呟く。

なぜだか、少し驚いたように見えた。

「そういう風に、オヤジと似てるのか。あんたは」

さきほどとほぼ同じ言葉なのに、別の意味がこもっているように思った。

それを尋ねるより先に、

「エルゴを渡せよ。ロード・エルメロイII世」

と、若瓏ルォロンが迫ったのだ。

「そこの内弟子や遠坂凛とは違う。もちろん時計塔の生徒たちとも違う。エルゴはあんたの生徒としては一番の新参者で、あんたの魔思術想を受け容れるような相手でもない。オレに引き渡したところで、何の問題もないだろう？　エルゴにしたところで、古巣に戻るだけの話だぜ」

「……君はエルゴと敵対したんじゃないのか？」

「それはエルゴが忘れてるからさ。思い出せば、自分から戻ってくれるとも」

「どうだかな。さっきも言っただろう。そもそも君の父君とやらは、君にすべてを話していない。話せばアトラス院に悟られる。君自身、それを薄々分かっているからこそ、核心に迫らないように、微妙に話をそらしている。それは、話の中核に至ってしまえば、君には予想がついてしまうからじゃないか」

ひどく、奇妙な対峙であった。

先ほどから、師匠は目の前の若瓏ルォロンと話しているというより、彼を通してオヤジという人物と対話しているような気がしたからだ。

そしてもうひとつ、視られている、という強烈な暗示があった。

アトラスの六源。

シンガポールで戦った、ラティオ・クルドリス・ハイラム。

　彼女ならば──あるいは彼女の一族ならば、わずかな情報の漏れから彷徨海の計画全体も看破しえると考えているからこそ、この奇妙な会話が成り立っている。師匠と若瓏ルォロンの交わしている言葉にも、そうした配慮や牽制がいくつも重なっていて、頭痛がしてきそうであった。

　たとえるならば、何重にもブラフで覆われたポーカーのゲームだ。

　この場にはいない参加者まで想定しながら、ふたりは互いの手札を慎重に探っている。

「折れてくれないか、エルメロイII世」

　にこやかに笑ったまま、若瓏ルォロンの視線が鋭さを増した。

　野獣の牙を連想した。

　コンクリート剝き出しの事務所が、突如熱帯のジャングルと化したかのようにも思えた。突き出たデスクライトは鬱蒼と茂ったシダであり、隙間で光る彼の瞳は食物連鎖の頂点に位置する暗殺者ジャガーのそれだった。

「師の命令は絶対でね。エルゴを見つけたら、必ず連れてこいって言われてる」

「私にとっても、これは信念ポリシーの問題だ。自分の生徒を売り払う真似はしない。それがたった一週間の生徒だろうが変わらない。たとえ相手がアトラス院だろうが彷徨海だろうが、おいそれと曲げるようなら君主ロードを引き受けたりしなかった」

「もう一度言う。彷徨海うちじゃ、師の命令は絶対だ」

　折り合えない、と悟った。

　この青年は、けして邪悪ではない。

　かといって、自分たちと折り合えるわけではない。持っている基準や尺度がまるで違うのだ。絶対だと言った瞬間の、凄まじい殺意がそれを表明していた。

じわ、と鎖骨のあたりを冷や汗が伝った。

隣の凛も、かすかに腰を浮かせたのが分かった。

自分は固フ定ッ具クのアッドに、凛は懐の宝石に、密やかに指を滑らせる。

「ところで、若瓏ルォロンはパスポートとか持ってる？」

ひどく穏やかな声が、割り込んだのだ。

全員が、はっとそちらを向いた。

両儀幹也であった。

「パスポートでなくても、運転免許証とか住民票とか身分証明書ならなんでもいいんだけど。あ、別に正規じゃない、ちょっといけないものでも構わないよ」

張り詰めた空気に、天使が通り過ぎたかと思った。

突然会話が途切れた際に言う、フランスのことわざである。ともあれ、あまりに毒にも薬にもならない言葉に、ほかの全員が意表を突かれたのは本当だった。

一度左右を見回してから、若瓏ルォロンはジャケットのポケットを裏返した。

何も入ってないよ、というジェスチャーだ。

「持ってるように見えるかい」

「ううん。だから、ホームレス生活とか言ってたんだろう」

幹也が言って、近くの机の引き出しから古ぼけた金属片を取り出した。

小さな鈴がついた鍵だった。

チリンと鳴ったそれを、彼は若瓏ルォロンに手渡したのだ。

「この事務所の合鍵。屋根がないところで寝るより、子どもの身体には楽だろうから」

「は？」

「気にしていたことだけど、アキラが自発的に君についていってるのは一目で分かった。でなかったら、僕から電話を受けたときに、家に戻してくれと言ってるだろうしね」

「…………」

　自分たちは沈黙せざるを得なかった。

　夜劫の家が、彼女にどのような扱いをしていたか、聞いたところだったからだ。

「僕には魔術師の事情は分からない。夜劫の家から、アキラを連れ戻すよう頼まれたけど、それも正直なところどうでもいい。……こう言うと、だったらなんで首をつっこんだんだ、って怒られるかもしれないけれど」

　困ったというより、はにかむような表情を幹也は見せた。

　誰のことを、思い出したのだろう。

「ただ、屋根を貸すことぐらいはできる。オーナーにはもう話してあるから、電気とガスと水は好きに使っていい。キッチンの棚には保存食が入ってるけれど、賞味期限を過ぎてるのが多いから確認してね」

　若瓏ルォロンも、その申し出に絶句した。

　たっぷりと十秒ほど、沈黙は続いたように思えた。彼の能力がエルゴと伍するなら、その秒数で百人だって殺すことができるだろう。

「……ずいぶんお人好しなオーナーなんだな」

「僕もそう思う」

「あんたは分からないだろうが、オレはこっちの世界じゃミサイルみたいなもんだぞ」

「子どもを匿って、会話が通じるミサイルなら、多分同じことを言うよ」

　魔術師たちの集いとは思えぬやりとりだった。

　ほんの少し前、自分たちは熾烈な戦闘に陥りかけていたはずで、だからこそ気の抜けたようなこの時間は、ほとんど奇跡であった。

　いかなる魔術にも括られない、本当の奇跡だったかもしれない。

「参ったな……」

　手のひらの鍵を見下ろして、若瓏ルォロンが呟いた。

「これは参った。こんなに重い貰い物は初めてだ」

　そっと両手で覆って、額にあてた。祈るようなポーズだった。

　大事そうにポケットへしまって、服の上から撫でた。

「ありがとう。この恩は忘れない」

　時代がかった言い方で、頭を下げた。

　師匠も、しばらくその様子を見守ってから、幹也に口を開いた。

「君は……なんだ……」

　言葉に詰まって、懐からシガーケースを取り出した。

「吸っても？」

「どうぞ」

　シガーカッターで葉巻の先端を切り落として、師匠がマッチの火を炙りつける。

　どこか蜂蜜めいた甘い香りとともに、事務所に紫煙が漂う。

　その煙をしばし見やってから、改めて言った。

「私たちも、この事務所を諍いに巻き込まないよう努める。約束まではできないが、ひとまず努力するということでかまわないかな」

「十分です。エルメロイさん」

「そこは、呼び捨てでいいからII世をつけてほしい。私には見合わない名なのでね」

「わかりました。エルメロイII世」

　それから、若瓏ルォロンが立ち上がった。

　まっすぐ廊下に続く扉へと向かう。

　ノブに手をかけたところで、

「ひとつだけ、言っておいてやる」

　と、背を向けたまま口にした。

「エルゴ、あのままだと一ヶ月はもたねえぞ」

「ッ……！」

　自分だけでなく、凛も硬直した。

　しかし、予感はあったのだ。

　凛と一緒にいた間、エルゴが飢えに襲われることはなかったはずだ。満たされない感覚はあったそうだが、発作的な行動に移りはしなかった。

　ならば、ムシキとの戦いと、若瓏ルォロンとの戦いで二度目。

　いや、　海賊島でムシキに殺されかけた際の暴走も加えれば、三度目になるだろうか。

　むしろ、あの暴走こそがきっかけだったのかもしれない。これだけ短期間で飢えに苛まれているのは、彼の症状――喰神衝動が悪化しているという証左にほかならないだろう。

　優しく閉じられた扉の音を、自分たちはただ聞いていることしかできなかった。

3

　夜が、更けていく。

　いつもの宝石の調整を終えてから、遠坂凛はあてがわれた部屋を出た。

　四階から階段を下りていくと、魔術の残り香はかなり強くなっていく。おそらく魔術師の工房としての本体は、二階と三階だったのだろう。こちらもすでにもぬけの殻ではあったが、ワインの澱おりにも似た魔力を、凛は感じ取っていた。

（何かを封じるのに、使ってた？）

　と、思う。

　魔術師の工房としては一般的な機能だが、一切合切の品を持っていって、十年経ってもまだ芳醇というのはかなりのものだ。かつての蒼崎橙子がここに何を封印していたのかと考えると、好奇心が過剰に膨らんでしまう。

　二階の間取り自体は、四階とほとんど変わらなかった。

　事務所に相当する部屋の扉を開くと、コンクリート打ちっぱなしでがらんとした中央に、仕立てのよいサマージャケットの背中が見えた。

「先生」

　エルメロイII世が、振り返る。

　古ぼけたテーブルと椅子だけが残された場で、彼はノートパソコンを広げていた。近くには灰皿がおいてあって、何本も煙草を突っ込まれている。

　葉巻ではなく、紙シ巻ガきレ煙ッ草トなあたり、そこそこ長い作業中だなと、凛は判断した。この君主ロードにとって、葉巻は嗜好

品だが、紙巻き煙草は実用品だ。精神をリラックスさせるなら葉巻、長丁場の相棒なら紙巻き煙草ぐらいの距離感。

「グレイはどうした？」

「エルゴを見てくれてます。とはいえ、結構しんどそうでしたけどね。気疲れするところに連れて行ったんじゃないですか？　肉体的疲労はともかく、精神的なのは真面目に受け取りすぎるタイプでしょう」

「私が逆だからな。ひとりで行けば殺されて終わりだ」

　その言い草に、凛は軽く目を見開いた。

「なんだ？」

「いえ、先生のためなら命も惜しまない方はたまに見ますけど、そういう風に信頼してらっしゃるのは珍しいですから」

　礼儀として画面を覗かないようにしつつ、尋ねる。

「調べ物でもしてたんです？」

「今回のことで、気になった点があってね。デジタル化した資料で確認していた。あと、サーバーに提出させた生徒の論文の採点の締め切りも今日だったからな」

「この状況で、採点してるんですか」

　あきれた顔で、凛が言う。

　対するII世は、ふんと唇を歪めたきりだった。

「どんな状況だろうが、仕事は仕事だ。私の事情は生徒たちには関係ない。まして、十分な報酬と待遇をもらってるんだからなおさらだろう」

「時計塔で、同じように考えてる講師は少ないと思いますけどね。インターネット経由で論文を提出させてるのだって、先生だけじゃないですか」

「じきに増えるさ。コンピュータの本質は処理能力ではなく、ネッ

トなどによる共有能力だ。お歴々は嫌がるだろうし、魔術回路の演算機能で十分だと言い張る者もいるだろうが、そんなのは表層的な理解だ。頭の中にあったんじゃ、レトロゲームだって遊ぶわけにもいくまいよ」

「……書いてる途中で、何もしてないのに止まらなければ……」

「レディ。前も言ったが、何もしてないのに、パソコンは壊れたりしないぞ」

「す、するったらするんです！」

　赤面しつつ、凛が言い張る。

　軽く肩をすくめて、II世が居住まいを正した。

「で、どうかしたのかね、ミス遠坂」

「寝る前に、少し確認しておきたくて」

　と、凛は近くの柱にもたれかかる。長い髪が埃を吸わないようにだけ、気をつける。

「グレイの話も聞いていたんですけれど、今、結構しんどい二択ですよね」

　そう言って、二本の指を立てた。

　まず、中指を下ろす。

「ひとつは夜劫側について、アキラを若瓏ルォロンから奪うルート。こちらだとグレイやエルゴの問題が解決するかもしれません。ただし、アキラちゃんはどうなるか分からない。いえ、これはちょっと嘘ですね。わたしも先生も魔術師がどういうものか知ってるんだから、準備ができてない人を投げ込めばどうなるか、だいたい予想がつくんだもの」

　少し、凛は嫌そうな顔をした。

　心当たりがあったのかもしれない。自分が魔術師を後継するときのことを思い出したのか。それとも、もっと別のことだろうか。

それから、人差し指を下ろす。

「もうひとつは若瓏ルォロン側について、エルゴを引き渡すルート。こちらだとアキラちゃんを夜劫にやらずに済むけれど、エルゴはアウト。グレイの問題も解決しません。まあ、改めて若瓏ルォロンの師匠と交渉する手はあると思いますけれど、あの様子だとエルゴについて譲ってくれる可能性は薄いですね」

「現状認識としては正しい」

　と、II世はうなずいた。

「ただ、不自由な二択から選ぶよりは」

「力ずくで選択肢を増やす方がオススメ、でしょう？」

　勝手に言葉を引き取って、凛が胸を張った。

「素晴らしく優等生の解答だが、力ずくとまで言う気はなかったぞ」

「そこで、なんですが！」

　力強く、身を乗り出す。

「一晩で覚えられてすぐ強くなる方法、ありませんか」

　さしものII世も、啞然と生徒を見つめる。

　黒い瞳の中で、腕組みした凛は、なんと素晴らしい要求をしたのだろう、とばかりにうなずいていた。

「あ、きついリスクのあるのは無しで。後から魔術回路に影響でたり、寿命が縮んだりするのはノーサンキュー。できたら徹夜も美容的に勘弁してほしいですし、金銭的な負担も控えめにお願いできたら」

「めちゃくちゃ言ってるとは思わないか」

「そんなの分かってます。で、あるんですかないんですか」

「……どうしてだね？」

今度は、間をおいてから尋ねた。

「今の遠わ坂た凛しじゃ足りないからです」

キッパリと、凛が言った。

「山嶺法廷のムシキもそうでしたが、若瓏ルォロンもエルゴも、魔術師の枠の外にいます。わたしはさっきの二択にまったく満足してないですが、新しく遠わ坂た凛しらしい選択肢を提示するには、ふさわしいだけの力もいるでしょう？」

極めて明瞭に、凛が主張する。

間違っても、弱者の言い分ではない。たとえ一時的にその立場に甘んじたとしても、遠からず逆転するのだという、強い意志に満ちた言葉だ。

そして、人間とは、数千年をかけてその意志を達成し続けてきた生き物であった。

「まして、エルゴの余命が一ヶ月というなら、かね」

「残念ながら、ハッタリじゃないでしょあれ。こんなことになるなら、実家の蔵の剣でも模倣コピーさせておけばよかったけれど……」

「模倣コピー？」

「いえ、こっちの話です。どうですか、先生」

「…………」

しばらく、II世は沈黙した。

そして、諦めたように、吐き出したのだ。

「……実は、ある」

＊

きっかり十分後、概要を聞き終えた凛が、口を開いた。

「……先生、頭おかしいんじゃないですか」

「促成かつローリスクで強くなる方法を尋ねた君が、それを言うのかね」

　渋い顔のII世に、凛は片目をつむる。

「なんか考えてるだろうとは思ってたんですよ。シンガポールの時もそうでしたけど、他人の魔術について、ちょっとありえないぐらい考察してるじゃないですか。正直、師弟の関係でなければ気持ち悪いぐらい。というか、それ、効果はあるでしょうけど、お礼がわりに殺されても文句言えないですよ」

「もうちょっと直截でない言い方をしてもらえないか」

「迂遠さは、ブリティッシュの美徳でしたっけ？　効率全振りの先生が言うとは思いませんでしたが」

「別に、効率的なことが良いと思っているわけじゃない。私の人生が、非効率を許すほど余裕がなかっただけだ」

　言いたい放題の生徒に、II世がため息をつく。

　ついでに、もう一本、紙巻き煙草に火をつけようとしたところで、凛が近くのマッチに手を伸ばした。白い指が灯した炎にそっと煙草を近づけて、唇に咥えてから、ゆっくりと煙を吸い込む。

「ありがとう。で、修行を始めるかね。概要は話した通りだから、君なら一時間足らずで学習できるだろう。あとは応用の問題だ」

「もうひとつ、確認させてもらっていいですか」

「どうぞ」

　再びノートパソコンに視線を戻して、打ち込み始める。

　打鍵が、途中で止まった。

「人生の余裕がなくなったのは、聖杯戦争からですか？」

　と、質問されたからだ。

「そうだな。君も私も聖杯戦争の参加者だからな。君も私も、我が師も」

「先代ロード・エルメロイ──ケイネス・エルメロイ・アーチボルトでしたっけ」

「知ってるのかね？」

「まあ、少しだけ縁があるような、ないような」

　埃っぽい空気に、凛は遠い目をした。

　窓からは、欠けた月が見えている。

　まるで、大切な半身を無くしてしまったような、半月。

「聖杯戦争での境界記録帯ゴーストライナー──サーヴァントは、先生にとってただの使い魔でしたか」

　サーヴァント。

　聖杯戦争という儀式において、それは最も特別な要素であった。過去の英雄を召喚し、魔術師の使い魔とするという規格外はんそく。

　当時、エルメロイII世が召喚したのは、イスカンダルという英霊だった。

　またの名を、アレキサンダー大王。

　世界史でも特筆に値する、英雄の中の英雄。ギリシャ近くの小国からインドの奥地までわずか十年ほどで侵略して、文字通り世界地図を塗り替えてしまった名は、いずこの国の書物にも絢爛と輝いている。

　そして、その真実の顔は、いま懐かしそうに微笑んだ魔術師の胸にしまわれている。

「いいや」

　モニターの光を受けつつ、II世はそっとかぶりを振った。

「ただの使い魔なものか。今、君が言った通りだ、人生の余裕を片

端から略奪された。おかげでこの十数年、気の休まる暇もない。文句を言い始めたら、一週間でも足りるものか」

「そうでしょうね」

　クスクス、と凛が笑う。

「君も、同じ類かね？」

「いいえ、あいつと会って、変わったことなんて何もありません」

「ほう」

「だって、あいつは、無責任にわたしの背中を押しただけですから」

　師に語りかける女性は、ほんのひととき、夢みる少女に見えた。

「だけど、あのとき背中を押してくれたから、わたしはここにいるんです。うん、多分わたしが死ぬまで、あいつは一緒にいるんですよ。あの顔も、あの声も、あの手も、あの匂いも、いつか古びた本のページみたいに掠れて、思い出せなくなったとしても」

　けして消えないものがある。

　記憶も記録も摩耗しても、なお残るものがある。救われることはなくても、報われることはなくても、生き続けるものがある。

　夜よ、続け。

　たとえ、美しい夢から覚めたとしても。

「そうだな。……私も同じ意見だ」

　少しだけ優しく、II世が言った。

「だから、せめて記憶の中のあれには意地を張りたいんでね。なおさら、エルゴを放棄するわけにはいかないだろうさ」

「そういえば気になってたんですが、エルゴと似てたんですか」

「いいやまったく。赤毛が一緒なぐらいで、性格も仕草も似ても似つきやしない」

誰かの面影を見出すには、それで十分かもしれない。

　II世は目を閉じた。

　瞼に、しっかりと思い出を刻み込むように。

　不意に、その睫が揺れた。

「……似てる……？」

「どうかしたんですか？」

　凛の質問にも答えず、II世はしばらく宙の一点を睨んでいた。

「似てるけど、似てない……似てるけど、別のもの……だったら若瓏ルォロンのあれは……！」

　静寂が、廃ビルの部屋に落ちた。

　師の集中を、凛も乱そうとはしなかった。こんなときの一秒一瞬が、どれほど代えがたく貴重なものか、彼女も痛いほどによく知っていた。

　やがて、

「若瓏ルォロンの正体が、ひとつ、分かった」

　窓からの月光を浴びながら、時計塔の君主ロードは囁いたのであった。

＊

　窓から、夜空が見える。

　雲間に、半分欠けた月が覗いていた。

　エルゴは、ぱちぱち、と何度か瞬きした。

　ずいぶん寝ていたらしい。ベッドの側面に、そっと頭をもたせか

けた少女がいた。

「……グレイ、さん」

　どうやら、自分を看病しているうちに、眠ってしまったらしい。

　枕元にはメモが置いてあった。

　こちらは凛の手書きで、これまでのことが綴ってあった。いつ起きてもいいように、と書き残してくれたらしい。エルゴが寝ている間、若瓏ルォロンと一時的な休戦協定が結ばれたこと、このビルが両儀幹也の関係者のものであること、などが簡潔にまとめられている。

「……そっか」

　なぜだか、あっさり腑に落ちた。

　エルメロイII世と若瓏ルォロン、それに両儀幹也という男ひ性とならば、そういう結論に辿り着くだろうと、納得できたのである。

「……師匠」

　グレイの唇から、かぼそい寝言が溢れた。

「エルゴ……さんを……助……」

　その言葉に、胸が締め付けられた。

　どうしてだろう。

　出会ったときから、不思議と他人とは思えなかった。多分グレイも同じだろう。離れた場所で育った姉弟のような感情を、エルゴは彼女に抱いていた。

（……だから）

　怖くも、ある。

　シンガポールでの戦いでは、彼女に喰神衝動を覚えてしまったからだ。被ひ食つ者じと捕食者おおかみの関係。あのときは我慢できたが、今度もそうとは限らない。

エルメロイII世は、それでも耐えろと言った。

　誰もが、それぞれの人生で耐え忍んでいるように、君もそうすべきだと。そう考えていいのだと──自分で決めていいのだと言われたことが、あのときのエルゴは嬉しかった。

　だけど。

　眠る少女の首元が、ひどく蠱惑的に映った。

　ああ、涎よだれを誘うぐらいに、あの肌は白いじゃないか……。

「…………っ！」

　外れかけていたフードを、そっと戻してから、エルゴが立ち上がる。

「ん」

　うまく、力が入らなかった。

　まるで、体中の隙間に鉛でも詰め込まれたようだ。ただ膝を持ち上げるだけで、岩を引き抜くほどの気力が必要になった。あちこちが痛くて、軽く動かすだけで、嫌な汗がにじんでしまう。

（……前と、違う）

　シンガポールで神腕を使った後は、ここまでではなかった。

　どうやら、自分の身体は変わってきているらしい。それとも、グラントウキョウ・ノースタワーでの戦いでは、まるで神腕を制御できていなかったためだろうか。荒れ狂っていた孫行者の怒りが、まだ腹の底に残っている気がした。己のものでない感情が燻くすぶっている感覚は、ひどく奇妙で、居心地が悪かった。

（……変わって、しまう）

　心も、体も、変わってしまう。

　たった一週間、たった一日、もしくはたった一時間で、エルゴの心身は取り返しのつかないほどに変貌していく。記憶を失ったままの彼には、どれが本当の己なのかさえ、判別ができなかった。

──『オレも、お前が喰いたい。昔も同じこと言ったんだが、どうせ覚えてねえな』

　暴走していた際の、若瓏ルォロンの台詞が鼓膜にこびりついていた。

　お前の親友だとか言い出した褐色の肌の青年を、どうしてもエルゴは拒絶できなかった。それもまた、変わってしまった己の名残なのだろうか。こんなにも支えてくれる凛やグレイやII世さえも、自分は忘れてしまうのだろうか。

　どんなに大切にしたくても、この手から零れてしまうのだろうか。

（嫌だ）

　グレイを起こさないよう、そっと扉を開いた。

　壁に手を当てながら、階段をのぼり、屋上へと出る。

　本来は屋上ではなく、五階をつくるつもりだったようで、あちこちから不自然な基部が生えていた。

「……ああ」

　乱れた呼吸を整えていると、夜空に半月が見えた。

　儚くて青白い光が、床に溜まっているかのようだ。

　その向こうには、宝石箱のような街の灯がちりばめられていた。東京の中心部を外れたためだろうが、ほどよく暗闇が残っているせいで、夜空の星も地上の明かりもくっきりとエルゴの網膜に映った。

「……綺麗、だ」

　切れ切れに呟く。

　星を見上げていると、少しだけ身体の痛みが引くように思えた。

視界の隅に、黒髪が、すうと流れた。

放り出された椅子に座り、手元の絵本を読んでいた少女は、あまりに自然で、いっそ魔的ですらあった。

「起きたの？」

「……両儀、未那さん」

あの祭りで出会った少女だった。

飛び出た柱にランプをかけているが、読書には少し暗いのではなかろうか。

「目が、悪くならない？」

「パパにも言われるわ。でも、今日は悪い子になりたくなったから夜更かしなの」

絵本に視線を落としたまま、未那が言う。

長い髪が、月の光を受けて輝くようだった。そこからやってきたのかもしれない、益体もないことを、エルゴは思った。

なんとか誤魔化せる程度に呼吸を整え、尋ねる。

「何を読んでるの？」

「アンデルセン」

そこで、やっと少女は視線を上げた。

「あなたも読むの？　そこに置いてあるわよ」

無造作に、すぐ近くの柱を顎で示した。

つくりかけだった基礎部分を改造して、本棚にしているらしかった。風雨にさらされないよう、蓋もできるようになっている。

何十冊か並んだ本から、アンデルセン、ミヒャエル・エンデ、小川未明……そうした著者名を、エルゴは読み取った。もっとも、こうした作者の並びに、どのような嗜好があるかは分からない。

ただ、どの表紙も美しかった。

「このビルの今の持ち主が、童話が好きなの。だから、わたしもたまに読ませてもらっています。あぁ、日本語が読めないなら読みあげましょうか？　わたしにしては珍しい気まぐれなので、断るのは損かもです」

　親切なのだか脅しなのだか分からない文句に面食らいつつ、もう一度本棚を見やった。

「多分読めるけれど……お願いしてもいいですか？」

　選んだのは、寂しげな少女の顔が描かれた本だった。

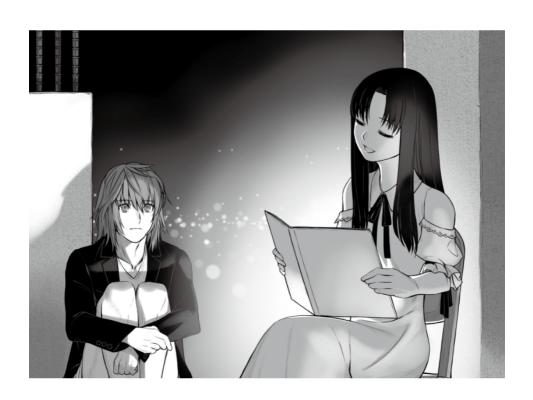
「赤い蠟燭と人魚？　いいですね。わたしも好き」

　受け取って、本を開いた。

　紅い唇が、最初の文章を読み上げた。

『人魚は、南の方の海にばかり棲んでいるのではありません。北の海にも棲んでいたのであります』

　くっきりとした発音で朗読されるのは、儚い夢のような話だった。

　妊娠した人魚が、孤独の辛さに耐えかねて人里へとやってくる。自分はもう孤独なままでも仕方ないが、せめて子どもには味わわせたくない。だから、産み落とした子どもをお宮の石段に置いていくことにした。

なぜだか人魚は、人間がこの世界の中うちで一番優しいと聞いていたのだ。そんな優しい人間が拾ったなら、けして無慈悲に捨てることはあるまいとも、考えたのである。

『月のいい晩で、昼間のように外は明るかったのであります。お宮へおまいりをして、お婆さんは山を降りて来ますと、石段の下に赤ん坊が泣いていました』

　幸い、赤子は蠟燭屋の親切な老夫婦に拾われた。

　美しく育った娘は、やはり腰から下が魚であるため、人前に出ることはなかったけれど、代わりに老夫婦を手伝って、赤い蠟燭にさまざまな絵を描いた。

　不思議なことに、彼女が絵を描いた蠟燭を山の上のお宮にあげて、その燃えさしを身体につけると、どんな大暴風雨おおあらしの日も船が転覆しない、と噂されるようになった。

『だから、夜となく、昼となく、山の上のお宮には、蠟燭の火の絶えたことはありません。殊に、夜は美しく燈火の光が海の上からも望まれたのであります』

　ありがたい神様だと、山もお宮も途端に評判が高くなる。

　しかし、心をこめて蠟燭に絵を描いている娘のことは、誰も考えなかった。ひとりぼっちの娘を可哀想に思う者は誰もいなかったのだ。

『ある時、南の方の国から、香具師やしが入って来ました』

話は突然その空気を変える。

　南からやってきた香具師が、人魚を狙ったのだ。

　昔から人魚は不吉なモノとされている、手放さないとよくないことがおきる――とまことしやかに吹き込まれた老夫婦は、それを信じ切ってしまう。親切だった老夫婦はすっかり人が変わってしまい、娘がどれほど行きたくないと言っても、まるで通じない。

　いくら蠟燭に絵を描いても、もはやなんとも思われない。

　ついに香具師が娘を連れに来たとき、娘は描きかけの蠟燭を真っ赤に塗ってしまった。

『その夜のことであります。急に空の模様が変って、近頃にない大暴風雨となりました。ちょうど香具師が、娘を檻の中に入れて、船に乗せて南の方の国へ行く途中で沖合にあった頃であります』

　この後、赤い蠟燭がお宮にともったときは、どんな天気のいいときでも、暴風雨が来るようになる。

　当然赤い蠟燭は不吉と忌まれることになるが、不思議なことに、毎晩お宮には赤い蠟燭が灯った。昔あらたかであった神様は、今では町の鬼門となり、こんなお宮がなければと恨まぬものはなくなったという。

『幾年も経たずして、その下の町は亡ほろびて、失なくなってしまいました』

　それが、物語の仕舞いであった。

　明るい月を、もう一度エルゴは見上げた。半分欠けた銀盆と、人魚の娘が見上げたそれは、少しぐらい似通っているだろうか。

「ありがとう」

　と、頭をさげて感謝した。

「読んでもらえて、良かった」

「喜んでもらえたなら何よりです。あなたも借りっぱなしは気分が悪いだろうから、ひとつぐらい質問しておこうかしら」

　本を閉じて、未那が小首を傾げる。

　それから、

「あなたは、アキラちゃんをどうするつもりなの？」

　その質問に、エルゴの息が詰まった。

　これが目的で、朗読をしたようには見えなかった。本当に、今思いついたから、質問したということなのだろう。

　だけど、エルゴにとっては。

　何十秒か黙り込んで、絞り出すように言った。

「……僕には、分からない」

　夜劫アキラという少女が、若瓏ルォロンに懐いていることは、エルゴにも分かる。無理やりに引き離せば、確実に傷つくことになるだろう。

　同時に、エルメロイII世から、自分の内側の神を還すために、日本の魔術組織と交渉するのだとも聞いていた。

　ただ、命を惜しがれるほど、エルゴは長く生きていないのだ。

　多分、それはたくさんの思きいお出くを持っているモノの特権なのだろう、と漠然と考えている。だからこそ、同様の術式でグレイの問題を解決できるということは、けして安易に無視してはならないだろうとも。

「分からないけれど、もっと、知りたいとは、思う」

　知らないままで、誰かを踏みつけにはしたくない。生きているな

ら当然誰かを傷つけるわよ、なんて凛は言うけれど、彼女のそれは可能な限りに手を尽くし、覚悟をした上での態度だろう。

　自分も、そう生きたい。

　誰かを傷つけてしまうことも、あるだろう。

　でも、そのときに、せめて覚悟できる自分でありたい。

　そこで、不意に気づいた。

「君は、アキラさんと友達だったの？」

「お姉さんのメイさんとは、少しだけ話したことがあったわ。そうね、生前のお姉さんは夜劫の家が好きだったように思うけど」

　さばさばした口調で、未那が言った。

「それこそ若瓏ルォロンさんには聞かないの？　あの人、あなたの親友だって言ってたのに」

「全部忘れちゃったから」

「あなた、記憶喪失のかた？」

「うん。先生は記憶飽和って言ってたけど、現象は似たようなものだと思う」

　こんな小さな女の子に打ち明ける話だろうかと思いつつ、エルゴは素直に言った。

　つかの間少女が黙り、夜風が吹いた。

　夜空を見上げ、足をぱたぱたとさせてから、口を開いたのだ。

「この事務所、前の持ち主は伽藍の堂と名付けてたんですって」

　不意に、話題が変わった。

「がらんの、どう？」

「多分、がらんどうの言葉遊び。ちょっと子どもっぽいけれど、大人がわざと子どもっぽいのって、余裕があるって見られるから羨ま

しいわ」

　少し拗ねた感じが、エルゴには意外だった。

　こんなにませた少女でも、もっと大人に見られたいなんて思うのだろうか。それとも、大人に見てほしい相手がいるのだろうか。

　いずれにせよ、彼女はこう続けたのだ。

「それって、多分事務所の持ち主の、理想だったんじゃないかしら」

「からっぽであることが、ですか？」

「だって、恋みたいでしょう」

　と、未那が囁く。

「どんなに好きな本でも、やっぱり増えた分だけ本棚は狭くなるの。好きな方向性が分かってしまえば、それ以外は手を出しづらくなって、最初の自由は消えてしまう。最適化されていくのって、正しいけれど、ときめきはしないわ」

　幼い横顔が、それを知ってか知らずか、恋を語る。

　エルゴは、さっきの人魚を思った。

　最初に、娘を人間に預けた、親の方である。

　なぜか、人間を世界で一番優しいと考えていた人魚は、知りもしない空想上の人間に恋をしていたのだろうか。

「あなたは記憶を失ったんだろうけど……それは失っただけじゃなくて、何もない今を得たということじゃないかしら。うん、これこそ言葉遊びだけれど、せっかくなら楽しい方がいいでしょう？」

　ふわ、と未那が微笑した。

「それにほら、よく言うけれど、とっても大好きな本だったら、一度全部忘れて読み直したいと思うもの、でしょう？」

　他人の深刻な悩み事を、よくもこんな卑近にまとめてくれるものだ。

だけど、エルゴは吹き出してしまった。

「そうですね。それは分かります」

「よろしい。忘れてもいいですけれど、覚えてる間はありがたがってね」

　と、少女が指を振る。

　こんな小さな女の子に、子分扱いされてる気分だ。

　なのに、居心地は悪くなかった。

　むしろ——

「どうしたの？」

「あ、いや……」

　いつの間にか、身体の痛みが落ち着いていることに、エルゴは気づいた。

　魔法のようだ、と思った。魔術と魔法はまったく違うものだとか、凛が言っていたが、その違いを若者はきちんと分かっていない。

　あれこれ考えるのを途中で打ち切って、彼は少女へと尋ねた。

「そんなに本が好きなの？」

「ええ。私の好きな話を書く人はもう死んでしまってるから。できたら、生きている人に会ってみたいわ」

　初めて、はにかむように少女が笑った。

　年相応の、あどけない笑顔。

「生きている作者さんに？」

「だって、生きているなら、次の物語を楽しめるもの。たとえ駄作でも凡作でも、次があるっていいものよ」

　白いブラウスが、ふわりと踊る。

夏の夜空に、彼女の声が溶けていく。

「生きているなら、神様だってつくってしまえるんだから」

✦ 転章 ✦

―舞台は移る。

　ひとつは、漆黒の空間であった。

　暗闇というわけではない。薄暗いながら、部屋の四方には和式の蠟燭がともっている。シュルシュルと細い煙の上がる光源の、近くも遠くも、まったく同じ色にしか見えない。

　つまりは、壁と天井、床のすべてが黒いのであった。

　さらに、壁一面に、おびただしい仮面が掲げられている。

　いわゆる能面だ。

　エルメロイII世が看破したように、男の面ばかりであった。

　部屋の中央には、ひとりの女がいた。

　夜劫朱音。

　部屋と同化するような真っ黒な着物を纏い、彼女は仮面の掲げられた壁を睨んでいる。微動だにしない。吐息さえ極めて薄く、ともすれば死んでいると勘違いしてしまいそうだ。

「ふるべ」

　その唇から、呪句が零れた。

　布留部、とも書く。

　意味は、こうだ。

　ふるえろふるべ。

「ふるべ、ふるべ」

　続けて、朱音が言う。

　ふるえろ。ふるえろ。

唱える朱音の体も、小刻みに震えている。

　それは共鳴を旨とする、日本の魔術のひとつであった。古代から巫女は魂を震わせてきた。その震えは天に通じ、鬼に通じ、神に通じると信じてきた。たとえ死者であろうとも、たまらず起き上がってしまうほどに。

「ゆらゆらと、ふるべ」

　ぶるぶる、と仮面が震えだす。

　最初は、たくさんの仮面のひとつのみ。

　すぐにその周囲が小刻みに震えだし、やがて仮面のすべてが大きく震えだした。木製の面と壁が擦れ合って立てる音は、あたかも多くの仮面たちが啜り泣くようでもあった。

　その音から、正しく神の意図を聞き取ることこそ、夜劫の巫女の職能であった。

「櫃の主よ」

　と、呼びかける。

「……なぜ、荒れなさる？　いや、怯えなさる？」

　優しい声だった。

　子に問いかける母にも似ている。

　巫女とはけして神の信者ではない。神と対峙し、都合の良い結果を取り出すためならば、いかなる態度もとりうる。

「何を、見てらっしゃる？」

　糸のように、目が細められる。

　同時に、息を整える。

　フッ……フッ……フッ……と規則正しいリズム。

　自分の視界を曖昧にして、呼吸によって身体に新たな律動を形成する。仮面たちから発せられる気を、ただ感受性のままに受け容れ

るためであった。自らの意志を心中の匣に納めつつ、あるがままに仮面たちの意思を聞く。

　彼女の内側に、鏡合わせのようなふたつの仮面が視えた。

　まるで、同じ神が、もう一柱いるかのような……。

「いや……もう二柱……？」

　眉間に、きつく皺が寄った。

　すぐ前のめりになって、黒い床に手をついた。

　トランス状態が途切れたのだ。ほんの数分ほどの憑依であったが、どれほどの疲労を強いたかは、彼女の顔を濡らした汗の量を見れば分かった。

「次の祭りまではと思ったが、間に合わないか。祭りの方を早めるしかないね。残念ながら、時計塔の君主ロードもあてにはなるまい」

　しみじみとしたため息は、今の幻視を半ば予期していた、という風だった。

「おい」

　と、呼びかけた。

　すぐ背後の──これまた黒い襖が開き、ひとりの男が膝をついたまま現れた。

「朱音さま」

　控えていたのは、息子である夜劫雪信だった。

　鬼瓦のような顔に、決意に似た感情が宿っていた。

「行ぎょうを始める。後のことはお前に任せた」

「承りました」

　雪信がうなずく。

「残りの神がん體たいもよこせ」

「はい」

　これも、うなずく。

　雪信が右手の三角巾を解き、ギプスの上から左手で叩いた。

　あっさりとギプスは砕け、内側を露わにした。その皮膚の大部分が、無残に削ぎ落とされていたのである。残った部分には、奇怪な入れ墨のごとき刻印が脈動していた。

　比喩ではない。

　本当に、刻印は息づいていたのである。

　雪信本人とは異なる生命体として、男の皮膚に寄生していた。

「動かすなよ」

　そう言った朱音の手に、短刀が握られていた。これも儀式のために揃えられた品だった。

　息子の手首を摑んで、さほど力を入れた風もなく、刃を振るった。

　短い苦鳴と、肉を断つ音がこぼれた。

　奥歯を嚙みしめたままの息子に背を向けて、朱音は壁を見つめる。

　最初に震え出した面を外す。

　指の腹に奇妙な感触があった。

　面の裏に、人の皮が張り付けてあるためだと、朱音は知っている。本来の主から剝がされてから長年経つというのに、それはいまだ瑞々しかった。

　雪信から剝いだばかりの皮膚を、そこに張り付けた。

　びちゃりと音がした。

そのまま、思い切って、顔にあてがったのだ。

「ああ！」

　婦人の体が痙攣する。それでも面をあてがった指だけは離さなかった。上向き、何度もガクガクと震える仮面の横顔は、哄笑しているようにも見えた。

　背後の雪信は、微動だにしない。

　ただ、母を凝視している。

「あ、ああ、あああああああああ！」

　悲鳴にも、悦楽にも、聞こえる声であった。

　たちまち、強烈な異臭が部屋に発した。

　鉄錆びた臭いだった。

　朱音の顔と面の隙間から、ぼとぼとと大量の血がこぼれて、黒い着物へと広がっていったのだ。

＊

　もうひとつは、国外である。

　イギリス首都、ロンドンの郊外。

　スラーと呼ばれる土地の通りストリートが、エルメロイ派率いる現代魔術科の学術都市になっていることは、時計塔に行き来する魔術師だけが知ることだ。

　日本との時差はおおよそ八時間。

　こちらも陽が沈み、薄闇が世界を浸した頃合いだった。

　執務室で、ライネス・エルメロイ・アーチゾルテは万年筆を置いた。

「お客人です」

　と、銀色のメイドが現れたのだ。

　この場合、銀色というのは髪のことでも比喩でもない。文字通り、彼女の体は水銀によって出来上がっているのだ。エルメロイ家に伝わる至上礼装・月霊髄液ヴォールメン・ハイドラグラムが形を変えたものが、このメイドであった。

「……ああ、やっぱりね」

　呟いてから、招き入れるように顎をしゃくる。

　すぐ、扉が開く。

　革鞄を持った長身の相手に、ライネスは立ち上がって一礼した。

「そろそろ来るかと思っていたんだよ」

　ライネスは、海を思った。

　それほどに蒼い髪の女だった。

　自然界にはあるまじき色だが、この女の属する魔術組織を考えれば、さもありなんと思われた。およそ感情の色が窺えない表情も、先んじて未来を演算してしまう高速思考からすれば、比較的スタンダードなタイプかもしれない。

　錬金術師。

　それも、時計塔に属する、西洋錬金術とは異なる一派。

　自らの名を、彼女は口にする。

「ラティオ・クルドリス・ハイラムだ」

「アトラスの六源の名前を、こんなところで聞くとはね？」

　緊張を噛み殺しつつ、ライネスが言った。

　彼女こそ、II世とグレイがシンガポールで戦った、アトラス院の錬金術師であった。

「どういう御用かな？　兄とよろしくやっていたのは、一応私も聞いているが」

　言外に、それらの諍いは兄の独断であり、現ノ代ー魔リ術ッ科ジは関係ないぞというニュアンスを匂わせる。アトラス院に通じるかは別として、交渉ごとというのは、こういう細かな積み重ねに他ならない。

　アトラス院、山嶺法廷、彷徨海の魔術師が団結して作り上げたというエルゴは、魔術世界における爆弾である。現状、時計塔の他の派閥は状況を摑んでいないようだが、これが漏れれば、一気に参戦してきてもおかしくないとライネスは目していた。

　何しろ、現代魔術科は時計塔きっての弱小学科である。兄が指導するエルメロイ教室こそ気を吐いているが、政治や財政的地盤については脆弱としか言いようがない。

（……我が兄も、よくぞこれだけ貧乏くじを引いてくれる）

　つい面白がってしまう自分を抑えながら、ライネスは蒼い髪の錬金術師を窺う。

　すると、

「今回はその件ではない、とラティオは主張する」

　奇妙な言い回しとともに、彼女はかぶりを振ったのだ。

「じゃあ、どういうことかな？」

「時計塔の現代魔術科に、我らと協力してほしいことがあるからだ」

「アトラス院と？　そいつはいきなりだな」

　心中で、舌打ちする。

　逆手に取られた。

　兄と君らの戦いは、現代魔術科に関係しないと前置きしたのを、「だったら自分たちに協力できるだろう」と返されたのだ。もちろん、そういう用件も想定の範囲にはあったが、こうも直球で投げて

くるとは思わなかった。

（話が早い、と言えばそうだが）

　アトラス院らしいやり口かもしれない。時計塔の迂遠な権謀術数は、ここまでストレートな相手とは嚙み合いが悪い。基本的に、何かしら陰謀の種を撒いている同士でのやり口だからだ。

　一拍おいて、こう尋ねた。

「ひとまず、どういう話か教えてもらわねば、なんとも言えないな」

「了解した。……では、少し失礼を」

　さしものライネスも、ギョッと目を剝いた。

　彼女が鞄から取り出したのは、人間の頭蓋骨だったのだ。

「タンゲレ」

　短い名前とともに、頭蓋骨の下が生えた。

　首から鎖骨が、鎖骨から胸骨が、胸骨から腰骨が盛り上がり、たちまち四肢も同じように揃っていった。

　執務室の天井に届くほどの、骨の巨人が現れたのだ。

（……アッドに似ているな）

　と、ライネスは思った。

　偶然ではないかもしれない。

　アッドは〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉を封印するための礼装だが、その核にはアトラス院の技術が使われている。結果として、どこか似た雰囲気を纏うのは当然かもしれなかった。

「これは初めまして。時計塔のご令嬢」

　巨大な骨が、恭しくお辞儀する。

「ラティオお嬢様が頑張って計算したんでね。まあ見ておくれよ」

「お嬢様はやめろ」

「へいへい、お嬢様」

　恐ろしい外見とは裏腹に、飄々とした口調で、骨の巨人は手を開いた。

　あたかも最新のモニターのごとき鮮明さで、その白い表面に計算結果が浮かび上がる。

「おい、これは──？」

　世界地図であった。

　ただし、ユーラシア大陸の中央、地中海周辺から現在の中国、そしてその東まで、黒いインクをこぼしたような染みが広がっていた。

「エルゴの喰らった神について、我々はごく一部の情報しか持たない。三柱の内、我々が選んだ神の破片も、いくつもの側面や化身、派生を持っていたためだ。古き実験に立ち会ったクルドリスの者も、いずれの因子が目覚めるかまでは演算しきれなかった。この地図はその神の伝播を視覚化したものだ」

　神が、複数の側面を持つのは珍しくない──というより通例である。

　たとえば、ギリシャ神話の狩猟の女神アルテミスは、月の女神セレネと同一視され、後にローマ神話の女神ディアーナとも同じ神格とされた。同じように、インド神話の主神の一柱である破壊神シヴァは、暴風の神ルドラと同一視される。

　また、ひとつの神の伝説が、西洋から東洋に流れていく内に──あるいはその逆の行程で、何十という別名を持つことになるのも、しばしば見かけられるケースだ。

（地中海から、インド、さらに中国まで伝播していった神……？）

　まだ、エルゴの喰らった第二の神は絞りきれない。

　この経路で伝播していった神など、無数にいるだろう。

しかし、この経路自体には心当たりがあった。侵略自体はこの半ばで止まったが、歴史上最も早くこの世界交流を確立し、ギリシャ文化と東方文化を融合させたヘレニズムなどという概念を生み出した大英雄を、ライネスはよく知っているのだ。

（……イスカンダル……！）

　ただの連想である。

　しかし、その名前は彼女にとって、また彼女の兄にとって、あまりに重かった。

　唾を飲み込み、顔をあげる。

「じゃあ、私に何をさせたいんだね？」

「今見せた神の伝播の中で、一部の神の破片──神がん體たいが現存することを、最近になって私たちはつきとめた。残念ながら、アトラス院は極東とほぼ接触がないが、時計塔のあなたならば、この神がん體たいの所持者からデータを取らせてもらえるよう、交渉が可能と考えた」

「データ？」

「エルゴの現状の解析に必要だからだ。代わりに、神がん體たいを解析できたデータは共有することを約束する。最終的にラティオたちがエルゴを手に入れるにしても、あなた方がエルゴを助けるにしても、この段階では協力ができるはずだ」

　話の流れが、やっとライネスにも摑めてきた。

　それが、ひどく致命的な流れであることも。

「おい、待て。極東の神がん體たいの所持者というのは」

「夜劫、という日本の魔術組織だ」

　その名を、ラティオが告げたのであった。

＊

夏の朝日に、自分は手をかざした。

　事務所の前である。

　階段を下りていく気配で目が覚めて、玄関まで追いかけたのだ。

「若瓏ルォロンさん」

　ちょうど道路を渡りかけていた青年が、さっと振り返った。

「おう。おはよう」

　片手で、軽々とアキラを抱き抱えている。幼い少女はことりと首を傾けて、青年の首元に顔を埋めていた。すやすやとリズムよく胸が上下しているのが、この距離でも分かった。

「おかげでよく寝てる。昨夜はよほど安心したんだろ」

「事務所には、戻ってこないんですか」

「いいや？　せっかく鍵もらったんだし、あんたらが出た後こっそり戻るさ。ホームレス生活でそういうのは慣れてるんだ」

　快活に、若瓏ルォロンが笑った。

　すると、自分の後ろから、声がかかったのだ。

「もうじき、夜劫が来るからかね」

「おや、あんたまで起きたか。それともひょっとして徹夜か？」

　すぐ背後で、師匠が若瓏ルォロンを見つめていた。

　指摘通り、昨夜はあまり眠ってなかったのか、目の下には淡くくまができている。

　一度瞼のあたりを擦ってから、師匠は口を開いた。

「夜劫が君の居場所をつきとめた場合、両儀との休戦協定などお構いなしに襲ってくるだろう。だから、ひとまずここを出ようと考えたんじゃないか」

「恩人に後足で砂をかける真似はできないんでね」

　と、若瓏ルォロンが肩をすくめた。

　律儀というかなんというか、どうもこの青年は妙に仁義を大事にするところがある。ひょっとすると、生まれ育った土地によるものかもしれない。

「で、見送りに来たってだけじゃないだろ」

「ああ、こちらも、もうひとつだけ確認しておきたくてね。幸いこの事務所は休戦地帯だと、君も認めてくれただろう」

「オレが答えて面白そうな質問ならどうぞ」

「単刀直入に行こう」

　と、師匠は切り出した。

「白若瓏バイ・ルォロン。君は神を喰らってなどいないのでは？」

「えっ」

　思わず、声が出てしまった。

「でも、師匠、昨日、若瓏ルォロンさんはエルゴの代用品だって……」

「もちろん言ったとも」

　師匠もうなずく。

　わけが分からない。むしろ、昨日の師匠は若瓏ルォロンが神を喰らったという傍証を固めていたはずだった。彷徨海の目的の全貌を暴くのは不可能としても、その一端として、若瓏ルォロンはエルゴの同型だとつきとめたのではなかったか。

「収しゅう斂れん進しん化か、という言葉がある。大して難しい概念でもない。イルカとコウモリは種の系統はまったく違っているが、どちらも超音波を出して周辺を観察するエコーロケーション機能を獲得している。これはどちらも暗闇で餌を探ったりするために、同様の能力を必要としたためだ。本来は異なる因子でも、似た

環境に投げられれば同様の力を得る。……だけどこれは、似てるけれど別物、という意味でもある」

「……似てるけれど、別物？」

「エルゴの幻手は、おそらく進化に関連している」

　すう、と師匠が右手をあげた。

　その仮説は、以前から師匠が唱えてきたものだ。

「手は、極めて多大な情報を受けるものだからだ。数々の石器をつくり、土器をつくり、弓矢をつくり、そのたびに受ける刺激こそが、人間を発達せしめてきた。まさしく、手こそは神であった」

　右手を下ろしながら、師匠が言う。

「だが、翼はおかしい。そんなものは人間に必要ないんだ。人類にとって翼を得ることは古代からの夢だが、人間の方向性と合っていなかった。人間はこの手によって栄えたが、翼など得たことはない。エルゴの幻手と若瓏ルォロンの幻翼は一見似たものに見えるかもしれないが、まったく思想が異なっている」

「へえ」

　気に入ったという風に、若瓏ルォロンが相槌を打つ。

「一応、根拠も聞いていいかい？」

「もともと疑ってはいた。有翼神の分布は地域が限られているからな」

　小さくうなずいた師匠が、言葉を続ける。

「おおよそ、メソポタミアからギリシャなど地中海沿岸にしか根付かなかった。この影響を受けた有翼の天使の方が、現在となっては有名なぐらいだ。それでも候補が出せないわけではないが、どうも君の性質と一致しないし、さきほどの話と合わせると、別の仮説が浮かび上がってくる」

　その瞳が、褐色の肌の青年を映した。

「何より、あきれることに名前自体がそうだろう？　彷徨海は、後世にできたバルトアンデルスなんて言葉を、組織の名に使うほどそのあたりにこだわりがない。本質であればそれでよい、なんて思ってるんだろう。加えて言えば、現代にせよ神代にせよ、名前が魔術に与える影響は甚大だ。ふん、それこそ私が漢字圏の人間だったら、もっと早く気づいたんだろうが」

（……名前？）

　確かに、自分には分からない。

　師匠と自分が使っている翻訳用の礼装は、あくまでコミュニケーションを円滑にしてくれているだけであり、厳密には言語を理解しているわけではないからだ。師匠にしても、日本語の読み書きはできるが、話すのはできなかったはずだ。

「極めて神に近い性質を持つ、有翼の神秘は天使のほかにもいる。東方においては神と区別なく語られ、私たち西洋にあっては神に対立するものとして、あるいは神に打ち倒されるものとして括られた神秘が。……ああ、つまり、こう思うんだ」

　他に行き交う者とてない朝の道路に、師匠の声は静かに響いた。

「シンプルにエルゴを喰いたいと言ったムシキはともかく、偽装情報といい君の存在といい、君の父上はあまりにアトラス院を意識している。ならば、アトラス院が喰らわせた神と、君が喰らったモノは、神話上の関係があるんじゃないか。たとえば、君が完成することで、アトラス院の喰らわせた神が無意味になってしまうような関係が」

「……あれま」

　若瓏ルォロンが、頭を掻いた。

「やれやれ、こりゃオヤジの眼鏡違いだ」

「見当違いだったかね」

「いいや、たかが現代の魔術師なんて見くびらず、あんたを最初に殺すべきだって話さ」

　ぞくり、と背筋に冷たいものが走った。

この陽気な青年の言葉が、単なる脅しではないと、放射される殺気の濃さが証明していたからだ。

「では、改めて問おう。白若瓏バイ・ルォロン」

　フームダニット。

　喰らわれたのは、誰か。はたまた、何か。

　エルゴの喰らった神と関連するという、その正体。

「君は龍を──もしくは、竜を喰らったんじゃないか？」

「龍……！」

「本来同じ言葉だが、東洋の魔術世界の一部では、竜と龍の二文字を使い分けるそうだな。君の名の瓏というのも、漢字としてはその派生だろう。その名前で術式を安定させていると考えれば、極めて自然だ」

「…………」

　少女を抱きかかえたまま、若瓏ルォロンは片目をつむった。

（神、じゃなくて）

　若瓏ルォロンが喰らったのは、龍であった──？

「今も言ったが、龍は東洋において神と同一、西洋において神と対立するものとして語られてきた。君の喰らった龍は、エルゴの二柱目の神と縁深いはずだ。おそらくは、夜劫に伝わってきた神の破片──神がん體たいとも」

　若瓏ルォロンの喰らった龍。

　エルゴの二柱目の神。

　夜劫の神がん體たい。

三つの神秘が、ここに結びつけられる。

「……やれやれ、困った先生だな。せっかく休戦協定なんて言ってたのに」

にい、と青年の唇から覗いた歯は、まるで獣の牙のようであった。

だが、その時異変が起こったのだ。

「痛！」

突然、アキラが顔を押さえたのだ。

眠っていたはずの少女が、体を丸めて、悶絶していた。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い――！」

「アキラ?!」

腕の中を見下ろした若瓏ルォロンが、目を剝いた。

少女の顔である。

あどけない顔は、真っ黒な面をかぶっていた。

星も吸い込まれそうなほどの、現実にはあり得ない漆黒の面。

「先生！」

「グレイさん、何が！」

異常を察して、凛とエルゴも飛び出してきた。

その眼前で、アキラの背中が微かな光を帯びていたのである。

いや、光ではない。

闇だ。

「くそ、夜劫のヤツら！」

若瓏ルォロンの顔に、初めて焦りの表情が滲んだ。

　少女の背中を中心に、得体の知れない黒暗淵やみわだが広がっていく。

「助けて、るお……！」

　少女の黒暗淵から、ざわ、と何かが波立った。

　あたかも、夜の海に跳ねる人魚のようだった。

　黒い縄にも似たそれは、たちまち若瓏ルォロンの体を包み込んだ。

あとがき

「死を忘れるなメメント・モリ」

　酒杯を掲げ、賢者が言う。

「その日を摘めカルペ・ディエム」

　陽気に踊り、詩人が歌う。

　誰もが最後は眠るのだから。何なん人ぴとであれ、ただの記録になるのだから。

　だが、時に記録シカバネこそが恐ろしい。

　死してなお残る記録シカバネこそ、果ての果てまで生き続けるかもしれないのだから。

＊

　お待たせしました。『ロード・エルメロイII世の冒険』二巻をお届けします。

　サブタイトルに（上）とあるように、今回は続きもの。そして、一巻ラストでも予告していたように、舞台は日本の東京となります。

　TYPE-MOON世界において、しばしば重要な土地となる東京だけに、もしもエルメロイII世が訪問したら……という想像は僕も何度もしていました。今回、こうして筆を執る機会をいただけて光栄です。

　日本人である僕が、イギリス人であるII世やグレイの視点からこの国を描くことは、物語に独特な緊張をもたらします。僕が当たり前に思っていることは、彼らにとって神秘にも似た不思議であったり、その逆もしかりだったりするからです。

それは日常についてだけではなく、魔術においても起こります。

当然、「神」にもです。

多くの意味を内包し、多くの願望や想像を詰め込まれているからこそ、神という概念にはその国の文化が反映されます。もとは同じ信仰であっても、国や地域を移動すれば、何らかの変化が起きるものです。

だからこそ、II世たちは旅することとなります。

エルゴが喰らった神を見定めるために。その眼と肌とで、神を理解するために。

＊

今回のゲストには、TYPE-MOON世界でもとりわけ特別な位置にいる両儀（黒桐）幹也に登場してもらいました。

彼が登場した『空の境界』はあまりにも美しく終わっている物語だったので、起用には大変悩みました。とはいえ、東京とその近郊を舞台にするなら避けられないか……と覚悟を決めて打ち合わせに臨んだところ、奈須さんの方から「幹也は魔術世界と絡んでも大丈夫だよ」と切り出してもらったのは胸を撫で下ろしたものでした（新型コロナが流行るよりも前のことだったのです）。また、短編ひとつ分しか登場シーンのない両儀未那については、細かく台詞の微調整をいただきました。

物語は、ここから本格的に加速します。

エルメロイII世を中心とした、幾多のキャラクターたちの運命が交差する果てを、どうか一緒に楽しんでいただけますよう。

最後になりましたが、他作品でのスケジュールも忙しいところ美麗なイラストを描き下ろしてくださった坂本みねぢさん、魔術まわりのみならずヤクザや祭りの考証も引き受けてくださった三輪清宗さん、また監修や編集作業を引き受けてくださった奈須きのこさんやＯＫＳＧさんをはじめとするTYPE-MOONの皆様に感謝を申し上

げます。

　もちろん、この本を手に取ってくださったあなたにも。

　次は、原作を担当している『魔法使いの嫁』スピンオフ漫画『魔術師の青』五巻を九月に挟んで、おそらく冬の頃にお会いできるかと思います。

二○二一年六月

ディズニープラスの『ロキ』を観ながら

Ｐ□Ｓ

『Aniplex Online Fest 2021』にて、『ロード・エルメロイII世の事件簿』アニメ特別編の制作も発表されました。前作の『事件簿』は原作小説として終わった旅なのですが、こうしてまた新しい形で出会えるのが、作者としてとても嬉しいです。

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

『レンタルマギカ』

『ロード・エルメロイII世の事件簿』

『魔法使いの嫁 詩篇．１０８ 魔術師の青』

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

『Fate / Grand Order』サーヴァントデザイン

（牛若丸、マルタほか）

『ロード・エルメロイII世の事件簿』

イラスト / 坂本みねぢ

装丁 / W I N F A NWO R K S

ロード・エルメロイII世の冒険

 2「彷徨海の魔人(上)」

著者　三田 誠

角川文庫

2021年8月13日　発行

ver.002

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の冒険 2「彷徨海の魔人(上)」』

2021年8月13日　初版発行

発行者　竹内友崇

発行所　TYPE-MOON

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

（「お問い合わせ」へお進みください）

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

※Japanese text only